

年間（1596～1614）には美作で木地職をしていた小椋善兵衛の子太兵衛が初めて四国予洲宇摩郡の御領山へ渡った、と記されている。さらにその子庄右衛門は元禄10年（1697）に松山領久万山の坂瀬山（面河村）に入山、とある⁽¹⁹⁾。

こうした記録から面河の木地屋が四国に来る直前の居住地は美作の山中であったことがわかる。一方、同じ梅ヶ市出身の別の木地屋には筒井公文所が発行した正親町天皇綸旨と豊臣秀吉の五奉行の一人といわれる増田右衛門の木地商売免許状の二通が残されていた⁽²⁰⁾。このことは氏子駄帳の記録とも符合して、面河周辺の木地屋は蛭谷の氏子駄を受けていたことがわかる。

さて木地業に関しては『久万町誌』に木地師の技術伝承として梅ヶ市の小椋亀吉氏からの聞き書きが掲載されている⁽²¹⁾。それによれば、江戸時代には同じ愛媛県内の越智郡にあった桜井漆器の木地請負をやっており、椀木地100枚～120枚を「一丸」として何丸も馬に着けて出していたという。また桜井漆器勃興前の古くは温泉郡川内町の間屋を経て松山に送り、さらにそこから大阪の木地間屋に船で運んでいたともいう⁽²²⁾。当時の面河木地屋の活況が窺える。明治期にも10戸以上の木地屋がいて盛んに木地を生産していたが、次第に陶器の普及に押されて衰微し昭和10年頃から衰退の一途を辿っていったという。道具に関しては明治の末年まではスエロクロ（手引ろくろ）でろくろの回転軸に牛革のベルトを巻き付けて左右から交互に引っ張り回転させた、という⁽²³⁾。その後現在も残る足踏みロクロに変わったが、それはスエロクロに比べて大変な技術革新であったという。（以上、『久万町誌』所収の小椋亀吉氏聞き取りの要約）

次に面河山岳博物館の資料を中心に、面河地方のろくろについて検討する。

③ 愛媛県上浮穴郡久万高原町 面河山岳博物館のろくろ[台帳番号 62]

前節までみてきたように四国の中でも古い歴史をもち、江戸時代を通じて活動した上浮穴郡内の木地屋たちは明治期まではスエロクロと呼ぶ手引ろくろを使い、明治以降は足踏みろくろに移行したとみられる。そのスエロクロとはいかなるものであったのか残念ながら伝統的な手引ろくろは今のところ確認されていない。確認できたのは面河山岳博物館の資料と偶然訪ねた木地屋の末裔が保有していた資料の二点で、いずれも足踏みろくろであった。これらの資料について検討してみよう。

博物館の資料は形式的には、台に対して2本の支柱を一定の間隔をあけて直立させ、その支柱の間に二枚の横板を落とし込んで、その間を軸受としたヨコ受型のろくろである。もう一方の後部軸受は台に角材をほぞ穴に差し込んだもの（二木型）。軸は鉄製で、軸頭は鉄軸と一体のカップに爪付きの木製アダプターをはめ込んだタイプ。爪は4本平行型に加えてセンターに丸釘状の爪が一本あり、5本爪である。これは少なくとも本州の資料では見かけなかったものである。台の中央には長方形の穴が開けられ、ベルトを下に垂らすようになっている。（展示コーナーには外された布製ベルトも並べられていた。）爪数を別にすれば、これらの特徴は一般的に各地の足踏みろくろによくみられるもので、地域的特徴を示すものではない。

この資料の注目すべき点は、台の両側面に紀年銘等が墨書されていることである。これは

資料所在地(施設)	徳島県三好市東祖谷字京上14-3. (東祖谷歴史民俗資料館)		
調査台帳番号	No.61	資料番号	219 ろくろ
文化財指定等			



基本データ＝ 台長595mm 軸長270mm(木軸部) 軸径54～60mm

<観察記録>

〔形式・概要〕 ヨコ受型で鉄軸に木管を被せた軸を持つ足踏み式ろくろ。

ただし、一部の作業痕跡から手引での使用の可能性も考えられる。

台の角穴の縁に角釘が対角線に二本打ち付けられているが用途不明。

〔軸受〕 ヨコ受型 2本の直立した支柱の間に軸受となる棧木を落としこんだ一般的な構造である。軸受の上側板に小さな切込みあり。手前支柱に鉋を固定させたと思われる切込みがある。(手引の可能性)

〔軸〕 鉄軸に木管を被せている。木軸の表面がかなりざらざらでろくろ目状の凹凸も残る。前半分と後半分で径が異なり表面の状態も微妙に違う。

〔爪・軸頭〕 独特な爪を持つ。鉄軸一体で外側が3本爪(2本円環、1本放射の変則型)内側は4本(平行型)の二重構造の爪である。

〔後部軸受〕 台と一体のカマボコ型、軸受部は台形の別材はめ込みである。注油孔あり、木の表皮を残したままの簡単な作りの蓋あり。

〔台〕 長方形型、中央に四角の窓があり、足踏みろくろが想定される。窓の四隅は太いドリルで穿孔した作業痕跡が残る。正面からみて左側の台の縁が丸く面取りされており手引きの使用も考えられる。

〔地方名〕 ろくろ

〔採集地〕 徳島県三好市東祖谷

〔製作地〕 不詳

〔使用地〕 東祖谷山地内

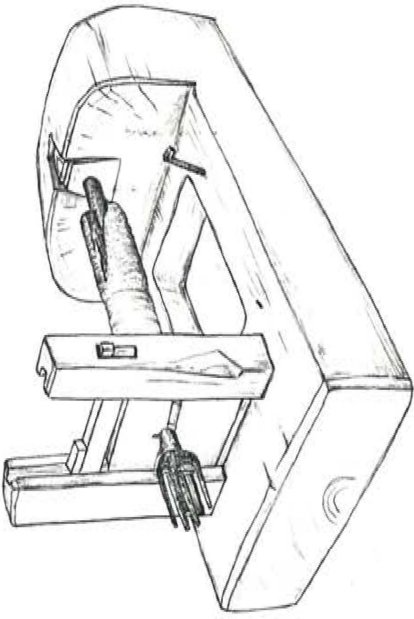
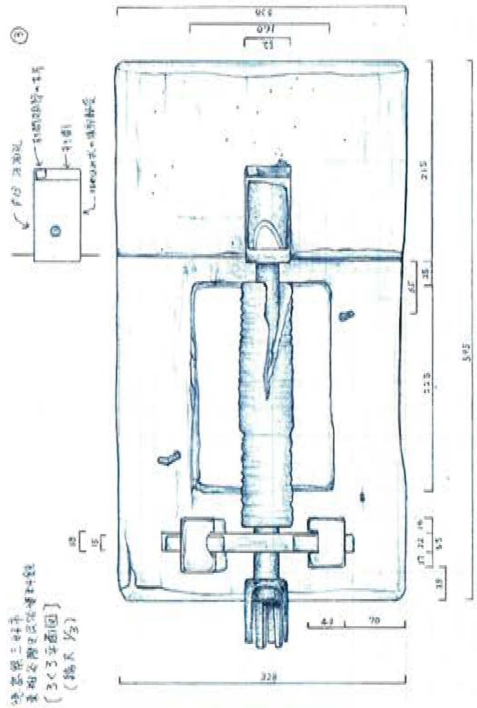
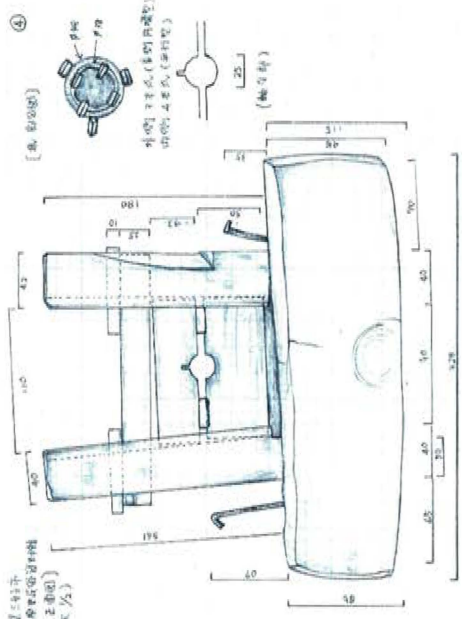
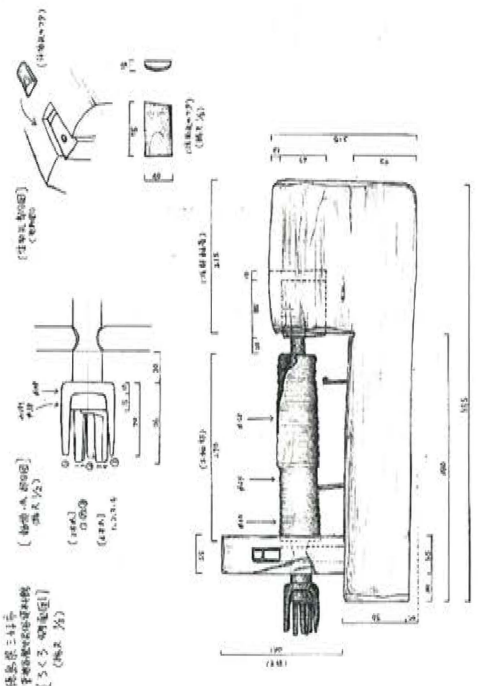
〔来歴〕

東祖谷の釣井にある旧家木村家の先代当主 木村巧氏が収集した資料。

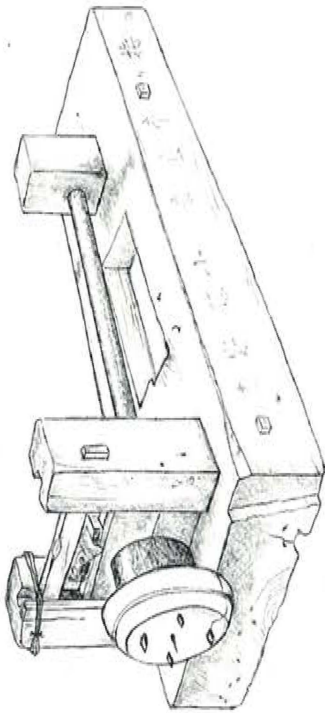
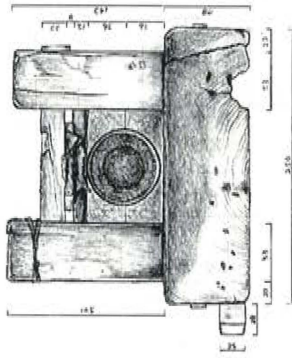
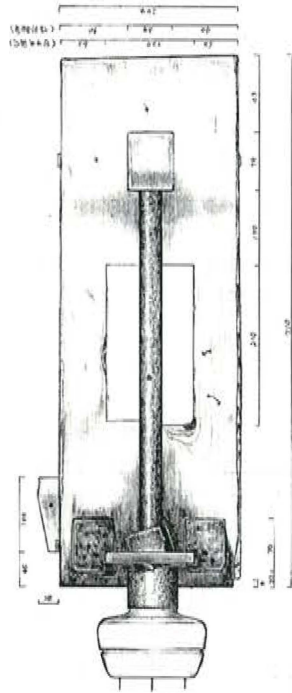
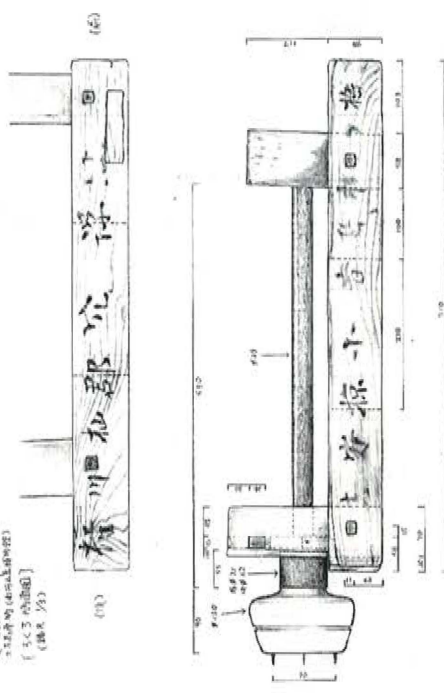
木村家は木地屋ではない。どこで誰が使っていたか等の詳細は不明。

(木村家所蔵の資料を資料館展示用に貸与したもの。)

〔保存状態〕 比較的新しい資料で傷みはほとんどない。

台帳番号	61	徳島県三好市東祖谷山 [東祖谷歴史民俗資料館]	地方名	足踏ろくろ
		<p>徳島県三好市 東祖谷歴史民俗資料館 〔3<3 見取図〕</p> 	<p>徳島県三好市 東祖谷歴史民俗資料館 〔3<3 見取図〕</p> 	
		<p>徳島県三好市 東祖谷歴史民俗資料館 〔3<3 見取図〕</p> 	<p>徳島県三好市 東祖谷歴史民俗資料館 〔3<3 見取図〕</p> 	

資料所在地(施設)	愛媛県上浮穴郡久万高原町若山650番地1 (面河山岳博物館)	地方名 足踏ろくろ	
調査台帳番号	No.62		
文化財指定等			
		基本データ＝ 全長710mm 軸長555mm 木製アダプター(爪部)90mm	
<p>〔地方名〕 ろくろ</p> <p>〔採集地〕 愛媛県上浮穴郡(旧)面河村</p> <p>〔製作地〕 不詳</p> <p>〔使用地〕 面河村</p> <p>〔来歴〕</p> <p>展示解説では寄贈者は「上浮穴郡面河村 小掠京之臣」となっている。しかし、この資料には台の両側面に墨書があり、旧所有者が確認できる。</p> <p>(右側面)「梅ヶ市 ○音? 小掠安吉」(面河の木地屋の姓は「掠」を使う)</p> <p>(左側面)「上浮穴郡 杣川村」</p> <p>杣川村は明治22年に大味川村と杣野村が合併してできた村。したがってこの資料は明治22年以降に作られたものと推測される。また製作者(または使用者)は笠方の梅ヶ市集落の小掠安吉と考えられる。寄贈者の京之臣は同じ笠方の人行(ひとぎょう)集落の人。恐らく安吉から譲り受けて使っていたのではないだろうか。</p> <p>〔保存状態〕 良好な保存で傷みはほとんどない。</p>		<p>＜観察記録＞</p> <p>〔形式・概要〕 ヨコ受型で軸頭にカップの付いた鉄軸足踏み式ろくろ。</p> <p>〔軸受〕 ヨコ受型 2本の直立した支柱の間に軸受となる棧木を落としこんだ一般的な構造である。軸受の上側板に布でくるんだ木片を挟んでいる。軸受部のはめ合い精度調節のための工夫と思われる。</p> <p>〔軸〕 径29mmの鉄軸で、全体に黒光りする。前後支柱とその下に油の付着と思われる黒いしみ。軸頭には軸一体の鉄カップ(外径71mm、内径62mm)</p> <p>〔爪・軸頭〕 鉄軸一体のカップにはめ込む木製アダプターに爪が取り付けられている。アダプターは径150mm、4本平行型の爪の開き幅90mmの大型。4本爪の中央に丸釘状の爪があり、計5本爪となる。</p> <p>〔後部軸受〕 台後部に別木を柄組で差し込んだ2木型。台側面から約1cm角の棒を差し込んで固定している。前部支柱にも同様の細工。</p> <p>注油孔はないが、油を軸受部に差していたと思われる。</p> <p>〔台〕 長方形型、中央に四角の窓があり、足踏みろくろの形。別にベルトが付随している。</p>	

台帳番号	62	愛媛県久万高原町(面河) [面河山岳博物館]	地方名	ろくろ
<div style="display: flex; justify-content: space-around;"> <div style="text-align: center;"> <p>愛媛県上流地区 久万高原町(面河山岳博物館) 〔ろくろ見取図〕 (図尺 1/5)</p>  </div> <div style="text-align: center;"> <p>愛媛県上流地区 久万高原町(面河山岳博物館) 〔ろくろ見取図〕 (図尺 1/5)</p>  </div> </div>				
<div style="display: flex; justify-content: space-around;"> <div style="text-align: center;"> <p>愛媛県上流地区 久万高原町(面河山岳博物館) 〔ろくろ見取図〕 (図尺 1/5)</p>  </div> <div style="text-align: center;"> <p>愛媛県上流地区 久万高原町(面河山岳博物館) 〔ろくろ見取図〕 (図尺 1/5)</p>  </div> </div>				

各地のろくろを見ても二、三例しかなく、極めて珍しいことである。⁽²⁴⁾ 一部を除いて比較的明瞭に判読できたので次に示す。(実際は右から左へ書かれている。)

(軸頭から見て右側面) 梅ヶ市 ○音 小掠安吉 (面河の木地屋姓は「掠」を使う)

(軸頭から見て左側面) 上浮穴郡 杣川村

「梅ヶ市」は既にみてきたように旧面河村の大字笠方の一集落で、江戸時代に木地屋が入山して形成した集落の一つである。次の一文字は判読不能だが地名か屋号だろう。「杣川村」は面河村となる前の村名で、さらに江戸時代は大味川村と杣野村に分かれていた。明治22年(1889)に2つの村が合併して杣川村となり、その後昭和9年(1934)に面河村に改名され現在は周辺4町村が合併して久万高原町となっている。この紀年銘から解ることは、この資料の所有者あるいは製作者は小掠安吉という木地屋で、大字笠方梅ヶ市に住んでいたということ。更にその製作年代は杣川村ができて以降、すなわち明治22年以降昭和9年までの間である。この資料の寄贈者は小掠京之臣という人行^{ひとぎょう}(人形)集落に最後まで住んでいた木地屋であるから、恐らく小掠安吉から譲り受けて使用していたのであろう。

もう一つの資料は、梅ヶ市から国道に下ったところにある小掠家で保有されていた足踏みろくろである。当主小掠秀男氏(昭和8年生まれ)は木地屋の末裔であり先代からの貴重な資料を何点か保有している。ろくろの種類は面河山岳博物館の資料と同じ足踏み式で、構造、形状ともほとんど同じである。強いて言えば台が若干薄く作られ、ロープを下に垂らす四角い穴の一边が斜めになっていることが相違点と言える。秀男氏はかつて父親を手伝ってこのろくろで作業をしたことがあったという。「戦後も木鉢等を作っていたが大きいものを挽くときは力があるので足踏みを手伝った。踏み板を広くして父と二人で足を掛けて踏んだ。手引ろくろは見たことがない。電動ろくろも使わなかった。自分が12~13歳のころで木地挽は終わった。ろくろは伯父の小掠常太郎から譲ってもらったものだ。」

(秀男氏からの聞き取りの要約)

県史によれば大正年間にはこの地域で二人挽ろくろ(手引ろくろ)と足踏みろくろの両方が使われていたとある。博物館のろくろの製作時期と秀男氏の説明を勘案すれば、恐らく明治末から大正時代にかけてこの二つの方式の入れ替わりが進んでいったものと思われる。

(4) 四国のろくろと木地屋(まとめ)

ここまで徳島県と愛媛県それぞれの木地屋の歴史とろくろの特徴について見てきたが、最後にこの二地域の木地屋相互の関係について、それぞれのろくろの特徴を手掛かりとして考えてみたい。

まず、調査した資料は二点とも足踏みろくろである。しかし外観を一瞥しただけで、この二つのろくろがまったく異なるコンセプトによって作られていることがわかる。それほど際立った相違を示しているのである。具体的に見れば、東祖谷の資料は短い台にやはり短い軸が特徴的なずんぐりとした外観である。一方の面河の資料は長めの長方形で薄型の台に、細い鉄軸が組み込まれている。後部軸受も東祖谷が台と一体でほとんど丸太の外形を残した素朴なもの(一木式)であるのに対して面河の方はきちんと細工した角材を台に柄組で差し込んでいる(二木式)。軸は東祖谷が鉄軸に木管を被せた手の込んだものであるのに対し

て、面河はシンプルな鉄のシャフトである。爪は東祖谷が軸と一体の大きめの鉄製の爪で、それも4本と3本が二重になった複雑なもの。一方の面河は、軸端に鉄製カップがあり、そこに5本爪の木製アダプターをはめ込む方式。相違点の多い2つのろくろで共通しているのは前部軸受を構成する支柱の形である。ろくろの二大類型として支柱と軸受の構造によって「タテ受型」と「ヨコ受型」に分類しているが、これについては両資料とも同じヨコ受型である。

ではこの二つの特徴的な資料がそれぞれの地域の一般的な傾向を示しているかどうか、この点について検討したい。先ず東祖谷のろくろについては『阿波の木地師』p11の図版18に掲載されたろくろ（一字村 小椋慶蔵氏所蔵）が基本構造や形態においてほぼ同じ特徴を示している。違う点は前部軸受が支柱ではなく機械部品の軸受になっている点、頭部の爪が軸端のカップに爪付きの木製アダプターをはめ込む方式である点でこれらは後の部分的な改良とみられ、基本的には同一系統のろくろと言える。面河の足踏みろくろについては既に述べた通り、同じ構造・形態の資料が同地域内の小椋秀男家で確認されている。

以上から東祖谷、面河どちらについても、それぞれの特徴をもつ足踏みろくろはその地域の木地屋が一般的に使っていたものと考えられる。ろくろ以外の道具類についても両地域間で、いくつかの相違点が指摘できる。ろくろ作業では材料を削る刃物（ろくろ鉋）を固定する鉋台が必要となるがその呼称が各地によって様々であることが知られている。阿波の木地屋はそれを「カンナボウあて台」と呼び、刃物はカンナボウ、工程によって仕上げカンナボウ、アナクリカンナボウなどと区別する。またろくろにかける前のアラガタを作る道具では平チョウナ、中割りチョウナを使う⁽²⁵⁾。

一方、伊予の木地屋はろくろ鉋の台を「ウマ」といい、ろくろ鉋には大きく外道具、内道具に分けてそれぞれの作業によって細かな名称が付いている。外道具ではビビラ、マルガンナ、内道具ではシヤカ、ウチシヤカ、エグリ、ダラツケ等である⁽²⁶⁾。

使われてきた道具の呼称にこれだけの違いがあるという事は、そこに何らかの歴史的な背景の違いがあるのではないかと、次にこの点をみてみたい。

まず阿波の木地屋については個人的な文書（系図、来歴、手控え等）からの情報はなく、氏子駈帳など周辺情報からの推測によるほかないが、(2)の②で述べたように紀州から阿波の美馬郡、三好郡への流入も可能性のないことではない。一方伊予の木地屋の来歴については、旧家に残る文書（小椋克寛家文書、小椋胤一家文書）によって美作（岡山県）から江戸初期に四国へ渡って来たことがわかっている。いずれにしても、ろくろの構造や道具類の呼称に大きな違いがあること、相互の歴史的なつながりが希薄であることを考え合わせれば、やはり伊予と阿波の木地屋は系統を異にする歴史を歩いてきたものと考えるのが妥当だろう。四国山地の東と西の端にあって、直線距離でわずか100kmしか離れていないにも関わらず、蛭谷、君ヶ畑双方の氏子駈の記録が、伊予と阿波ではまったく異なる足跡を示していたことも、その辺に理由があったのかもしれない。

なお、ひと言付け加えれば、今回は足踏みろくろの比較検討から木地屋の歴史をとらえ直す流れになったが、手引ろくろによる分析でも同じ結論に至るかどうか、そのことを検証する意味においても伝統的な手引ろくろの発見を今後に期待したい⁽²⁷⁾。

第2節 九州地方のろくろ

(1) 九州地方の木地屋

九州の木地屋についてはその起源は不明で、古い時代の姿は容易には把握できないようである。⁽²⁸⁾ つまるところ木地屋の活動をうかがわせる地名や伝承があっても、その歴史が古すぎて今に伝わるものが何も残されていないケースが多いのである。しかし大分県、熊本県、宮崎県の三県にまたがる筑紫山地から九州山地一帯に古くから木地屋が住み着いていたことは間違いないようで、わずかではあるがその消息が判明しているケースが各地の地誌、郷土史、自治体史に散見される。⁽²⁹⁾ 九州全体を概括するには氏子駈の記録によっておおよその姿を把握するのが捷徑であり、以下にその概要を述べる。

蛭谷と君ヶ畑の氏子駈記録を比較してみると、君ヶ畑の記録が極端に少ない。それも時代が下った幕末の弘化2年(1845)と維新後の明治5年(1872)の2回で、訪問先はどちらも宮崎県の東臼杵郡を中心とした狭い範囲に限定されている。訪問集落数は前者が5カ所、後者で11カ所。ほとんどが1～数世帯の小集団である。一方の蛭谷は正徳3年(1713)から天保14年(1843)に至る間、前後8回に渡って福岡・大分・宮崎・熊本の4県で延べ93カ所の木地屋を訪ねている。この差が何によるものかは検討が必要だが、まず考えられることは後発の君ヶ畑が入り込む余地がないほど九州では蛭谷が優位な地歩を築いていたということではないだろうか。いずれにしてもまずは蛭谷の記録によって概要をまとめてみた。

県別の実態を見れば18世紀の初頭から末までは大分県の下毛郡、日田郡への訪問が圧倒的に多く、次いで熊本県の上・下益城郡、阿蘇郡があり、福岡県・宮崎県はわずかである。それが18世紀末から19世紀初頭の2回の訪問では宮崎県一色になってしまう。その内訳は東臼杵郡がほとんどを占め、わずかに西臼杵郡と児湯郡がある。要するに江戸時代中期には大分県を中心とした九州の北部山地に多くの木地屋が足跡を残しているが、江戸後期から明治維新にかけてはそれらが南下してほとんどの木地屋が宮崎県に集中する、という大きな流れを認めることが出来るのである。ちなみに氏子駈で九州の最も南への来訪は熊本県人吉市の山手にある古仏頂という集落で、正徳3年(1713)の一度だけであった。また九州7県の中で氏子駈の来訪を一度も受けていないのは長崎・佐賀・鹿児島県の3県である。長崎県と佐賀県は地理的環境を見れば当然かも知れないが、鹿児島県は少し事情が違う。ここには確かに江戸時代から明治まで一度も近江の神社の役人が足を踏み入れているが、木地屋の足跡はあちらこちらに残っているのである。杉本寿の『木地師制度の研究』第二巻第十章 薩摩国の木地師制度には各地の情報が詳細に報告されている。⁽³⁰⁾ 個々の事例の紹介は省くが、熊本と鹿児島の県境近く、先に挙げた古仏頂から峠を越えた鹿児島県側には集落名・字名では木地山が3カ所、旧家名では木地山、軸屋、轆轤などの姓があり、轆轤氏を除いてそれぞれが木地製作の歴史を伝え、来歴では肥後国球磨郡からの移住であったり四国からの渡来を伝承していたりする。⁽³¹⁾ これらの報告を踏まえて解釈すれば、九州北部の大分県の山地に入った木地屋が江戸中期から後期にかけて南下し、やがて宮崎県と熊本県南部に集まり、その一部が氏子駈の廻国が及ばない鹿児島県北部に入って定着し近代を迎えた、という事ではないだろうか。

次にこうした九州の木地屋の歴史の中から、その主要部の一角を占める宮崎県西臼杵郡五ヶ瀬町の木地屋に焦点をあて、彼らが持ち伝えた道具を中心に見ていきたい。

(2) 宮崎県西臼杵郡五ヶ瀬町 小椋康尋家のろくろ[台帳番号 60]

九州での資料把握において、手引ろくろの保有を確認できたのは五ヶ瀬町一カ所であった。五ヶ瀬町「自然の恵み資料館」所蔵の手引ろくろは複製品であったが、資料館で得られた情報によって木地屋の末裔小椋康尋家を訪問し、原資料を確認することができた。以下は、その概要である。

形式は、二本並んで直立した支柱の間に軸受けが作られたタテ受型の木軸ろくろで、伝統的なろくろの特徴を伝えている。支柱は幅広でやや上に向かって開いており、軸受の真上の支柱の開いた部分には大きなクサビ状の板が挟みこまれている。軸の径が81mmと太いことから、⁽³²⁾当初は細い軸が使われていたものをある時点で太い軸と交換し、支柱は当初のままで転用したために太い軸を挟んだ時に上に隙間ができたものと思われる。その隙間を埋めて支柱と軸の関係を安定させる目的でクサビ状の板が使用されたのではないだろうか。本来であれば二本の支柱の間に軸がきれいに収まるように軸受が作られ、支柱上部も下部と同様の幅で閉じて細縄で結わえられているはずである。いずれにしてもタテ受型の支柱の間に板を挟む事例は少ない。後部軸受は一木型で注油孔があり、スライド式の蓋が付いている。爪は4本平行型であるが、中央に一本の細い丸棒が打ち込まれている。爪よりも13mm短く、先端が尖っておらず丸みを帯びている。台は左右対称のトンボ型で、軸下の中央付近に楕円形の窪みが掘られている。引綱につけられた把手をくぐらせるための工夫と思われる。その引綱は綿布を撚り込んだ麻縄と思われるが、特徴は端部を持ちやすくするために鼓型の把手をつけていることである。ろくろが保存されていても付属品である引綱は残っていない場合が多く、仮に引綱が付いていても最近の市販品などが巻き付けてある場合も少なくない。資料としての引綱がある場合は、その両端の処理の仕方も地域差の表れる部分であり、重要なポイントの一つである。引綱を持ちやすくし、また力を入れやすくするための様々な工夫がみられるからである。今まで確認した事例から主なものを挙げれば、①綱の両端に結び目を作る。②木製の把手を両端に結わえ付ける。その把手の形にはA輪型、B半月型、C鼓型などがある。本資料は②のC鼓型である。

(3) 宮崎県の木地屋について

それではこのろくろを使っていた小椋家の先祖はどこから来て、どのような歴史を歩んできた木地屋なのか。聞き取り調査および自治体史の記述等を手掛かりに考えてみたい。

蛭谷氏子駈帳による九州全体の木地屋の概要はすでに述べたところだが、ここでもう一度宮崎県にしぼってその動きを見てみよう。宮崎県で最初に同記録に登場する木地屋は五ヶ瀬町の北に接する高千穂町五ヶ所の木地屋で享保12年(1727)の第10号にその名がみえる。その後第12号(元文5年・1740)までの十数年間は変わらずこの五ヶ所の木地屋数世帯だけが顔を出し、次の第13号(延享元年・1744)で五ヶ瀬町が初めて記録に現れる。それは五ヶ瀬町鞍岡の木地屋で、氏子駈帳の名前と突き合せれば一部が高千穂町五ヶ所

資料所在地(施設)	宮崎県西臼杵郡五ヶ瀬町長迫 小椋康尋氏蔵		
調査台帳番号	No.60	個人蔵	
文化財指定等			



基本データ＝ 全長835mm 軸長735mm 軸径81mm

＜観察記録＞

〔形式・概要〕 タテ受型の木軸ろくろである。

〔支柱〕幅広のがっしりした支柱である。やや上に開き加減に取り付けられ、上部に大きな隙間ができて、そこにくさび型の板が挟みこまれている。他にはみられないかたちである。軸がかなり太く、材が新しいことから、もしかしたら細い軸に対応した支柱をそのまま使って、新しい太い軸に対応させるための工夫か。

〔軸受〕単純な段欠き型の軸受。半円弧の中央に縁の部分のみわずかに「くの字」形に削られている。

〔軸〕直通の円柱型で径81mmと太い。表面は極めて円滑でろくろ目なし。

〔後部軸受〕一木型で注油孔にスライド式の蓋あり。後端部が腐食して欠ける。

〔爪・軸頭〕爪は4枚平行型。取付方に特徴あり、軸端中央が金輪より突き出て、爪はその突出部の周縁に露出して埋め込まれている。付け根は金輪で押さえられている。軸端突出部の中央に細い丸棒が差し込まれている。先端は爪の先端より13mm短い。さらに先端がは尖っていないので、用途が不明である。

〔台〕左右対称のトンボ型。台中央の軸下に楕円形のくぼみあり。綱をくぐらせるための工夫か。引綱の端には鼓型の把手が縛り付けられている。

〔地方名〕 ろくろ

〔採集地〕 宮崎県西臼杵郡五ヶ瀬町 長迫

〔製作地〕 不詳 〔使用地〕 同

〔来歴〕 宮崎県西臼杵郡日之影町及川から明治初年に五ヶ瀬町内の口に移住して来た木地屋の家系。その後同町長迫に移って定住、大正時代まで手引ろくろで木地を挽いていた。(資料所蔵者の祖父の代)

本資料は祖父岩三郎が使用していたろくろである。

* 「古い来歴については聞いていないが、曾祖父が四国の愛媛県から婿にきているので、家も元は四国から来たのかもしれない。」

(康尋氏の親戚、小椋昭夫氏談)

* 氏子狩りは筒井神社から受けている。

〔保存状態〕 後部軸受と台底面にかなりの腐食あり、一部原形を損ねている。他の部分については良好な状態で、使い込んだ古い資料であると思われる。

から分かれたことがわかるが、別の木地屋も居ることから離合集散していたことが窺われる。この時点で宮崎県内の木地屋集落は二つになるが、三十年後の第18号（安永9年・1780）ではともに姿を消し、以後の氏子駈帳にはどちらも上がってこない。高千穂町五カ所地区での聞き取り調査では、かつて木地屋がいたという言い伝えはあるが、それ以上の事はわからないとのことだった。高千穂町の郷土史家碓井哲也は祖母山麓の一角に木地屋敷という場所があり、小さな石臼が出た、と報告している⁽³³⁾。

いずれにしてもこの木地屋たちの五ヶ瀬町における足跡はここで消えて、資料館のろくろに関する木地屋が登場するのは明治に入ってからのもので、まったく別系統の移住によるものだった。

五ヶ瀬町史によれば、明治初年に五ヶ瀬町の東に接する日之影町及川から五ヶ瀬町内ノ口に木地屋が移って来たとある。その後内ノ口から同町坂狩、長迫に分かれて定着し現在に至るという⁽³⁴⁾。前節で述べたように、その一軒坂狩の小椋昭夫氏⁽³⁵⁾を訪ねて聞き取りを行うことができた。氏の話では祖父秋次郎の代には内ノ口に住んでいて炭焼きやお茶の指導をしていたという。祖父は木地の仕事はしていなかったが、祖父の弟岩三郎は大正年間まで木地を挽いていた、とのこと。長迫の小椋康尋家が岩三郎の子孫で、資料館展示の複製手引ろくろの原資料を保有していた⁽³⁷⁾。また昭夫氏の話では、この木地屋は水車ろくろや足踏みろくろを導入せずに木地業は終わった、とのこと。

ではこの宮崎県五ヶ瀬町の木地屋は日之影村の前はどこにいたのか。これについては坂狩の昭夫氏も詳しいことは聞いていなかった。ただ曾祖父が愛媛県上浮穴郡から婿に来ていたので、四国から来たものと思う、とのこと⁽³⁸⁾。昔の木地屋の縁組は氏子駈の役人が取り持っていたようだから、こうして遠くから婿に来ることがあったのだと思う、とも話していた。確たる史料のある話ではないが、宮崎県の一木地屋の系譜として、四国伊予からの流入を想定させるエピソードとして挙げておきたい。

もし愛媛県上浮穴郡の木地屋が使っていた手引ろくろが資料として残っていれば、それとの比較類推も可能であるが、資料が残っていないことは、(4) 四国のろくろと木地屋（まとめ）で述べた通りである。

それでは、I 四国地方(3)の②（上浮穴郡面河村の木地屋の歴史）で述べたように面河の木地屋が美作（岡山県）からの来住を伝えているのであるから、もし五ヶ瀬町の木地屋が四国の面河周辺とつながりがあるのであれば、岡山県のろくろとも何らかの系統的つながりがあるのではないかと。視点をろくろの構造に移して検討したい。

(4) 九州木地屋のルーツ（ろくろの構造比較から）

今まで岡山県の木地屋調査で確認したろくろは合計9台あり、その内訳は次の通りである。

真庭市 ^{まにわ} 田羽根 ^{たばね}	4台
美作市 ^{みまさか} 右手 ^{うで} 木地山	1台
苫田郡 ^{とまた} 鏡野町 ^{あかわせ} 赤和瀬	3台
苫田郡鏡野町奥津	1台

これらのろくろについて、五ヶ瀬町の資料と類似する特徴を持つものがあるかどうか調べてみた。まず、田羽根のろくろは台の長さが1メートルを超える大型のもので、胴が細く後部軸受が異様に大きいという特徴を持つ。外観上も細部の構造においても五ヶ瀬町の資料との共通点は乏しい。また美作市右手の資料は軸受部の構造に特徴があつて五ヶ瀬町の資料とは造りに対する考え方が根本的に違うと思われる。残る苫田郡鏡野町赤和瀬と奥津の資料については五ヶ瀬町のものと類似点が多いので以下にその細部について照合を試みる。(赤和瀬の資料は3台のうち「資料1」を選ぶ)

	赤和瀬(資料1)	奥 津	五ヶ瀬町
基本構造	タテ受型	タテ受型	タテ受型
軸受部	段欠き	段欠き	段欠き
軸尻部	鉄芯金輪なし	鉄芯金輪なし	鉄芯金輪なし
軸形(材質)	円柱(木軸)	円柱(木軸)	円柱(木軸)
軸径(mm)	62	74	81
軸長(mm)	665	848	735
台長(mm)	910	1020	835
爪数・配列	4本平行	4本平行	4本平行+1(センター)
支柱の作業痕	わずかな凹み	わずかな凹み	なし
支柱下の釘	あり	あり	あり
軸受細部の溝	あり	あり(片側のみ)	あり
台形	対称トンボ型	対称トンボ型	対称トンボ型
台尻	一木型	一木型	一木型
注油孔	あり(スライド型、蓋なし)	あり(蓋なし)	あり(スライド型、蓋あり)
引綱の把手	鼓型	輪型(*)	鼓型

こうして細部を比較してみると五ヶ瀬町と赤和瀬では、ほとんどの項目で一致していることがわかる。ただ、項目ごとに細分することで一致点が多くなるが、サイズには個体差があり全体としての印象はよく似ているというレベルである。ただ一点注目したのは引綱の把手の形である。これについてはすでに述べた通りいくつかのタイプがあるが、赤和瀬では五ヶ瀬町と同じ鼓型の把手を使用していた。これらのことから判断して赤和瀬のろくろと五ヶ瀬町のろくろは極めて高い相関性を示していると言っていいだろう。

愛媛県上浮穴郡面河の木地屋には先祖が岡山県から移住してきたという来歴を示す文書が残っているが、伝統的な手引ろくろが資料としては残っていない。一方宮崎県五ヶ瀬町の木地屋は、先祖が愛媛県上浮穴郡から渡って来たかもしれないという話があり、古い手引ろくろを持ち伝えていた。そしてそのろくろを照合した結果、岡山県苫田郡鏡野町(旧上斎原村)赤和瀬のろくろと高い相関性を持っていた。事実を列挙すれば以上のようなことである。このことで直ちに、岡山 → 愛媛 → 宮崎 という木地屋の移住を立証できたとは言えないかもしれないが、少なくともその可能性を示すことはできたのではないだろうか。可能性という点では、九州の木地屋にはもう一つ想定される移住のルートがあった。

(5) 九州の木地屋のルーツ（氏子駈帳によると）

(1) で氏子駈帳の記録によって九州木地屋の動きを概括したが、ここでもう一度氏子駈帳の記録に戻って、初めて近江の国から九州へ廻国人が訪れた時の状況を振り返ってみたい。正徳3年(1713)正月3日に伊予松山の畑野川山（上浮穴郡久万町）の木地屋を訪ねた廻国人はおそらくその翌日同郡小田町を最後に四国を後にし、初めて九州へ渡っている。その九州における最初の氏子駈訪問地は豊後へいけ山木地屋（大分県玖珠郡九重町・玖珠町）であった。そして正月28日には三番目の訪問地、福岡県と境を接する下毛郡の奥地の木地屋を訪ねている。現在は中津市に編入された旧山国町槻木がその訪問地で、九州では極早い時期の木地屋集落であった。

旧山国町では古い木地屋の墓標の発見を契機に同町における木地屋の歴史を発掘し、平成16年に「漂泊の山民 木地師たち・・・山国町から時をこえて」という企画展を開催している。そして平成17年には同展の展示資料や文化財調査委員会が調査した木地屋の歴史を冊子にまとめて「民俗文化財集・山国町の木地師」を発行した。手引ろくろが資料として残るのは九州では五ヶ瀬町一カ所であり、この旧山国町では確認されていないが、江戸中期の年号を刻した木地墓が13基も見つかっており、その最も古いものは正徳3年(1713)であるという。こうした木地屋の歴史を踏まえて同書では、山国町の木地屋がどこから来たのかを氏子駈帳を手掛かりに探っており、その結論を山口県からの来住であった、としている。⁽³⁹⁾ 当時の名前は類型的で同じ名前を付ける場合が多いことから、同名であることを根拠に同一人物であると断定することにはかなりリスクが伴う。検証してみたところ槻木で氏子駈を受けた（正徳3年正月・1713）20人のうち7人が山口県阿武郡、佐波郡、都濃郡の氏子駈記録（元禄7年5月・1694）に同名で登場していた。⁽⁴⁰⁾ これだけのまとまった人物が同名で記録されていれば、恐らく同一人物と判断してもいいのかもしれない。もしそうであれば九州への木地屋の移住ルートとしては愛媛県から大分県(宮崎県)へのルートに加えて、山口県から大分県へのルートも想定されることになる。

氏子駈の廻国人の足取りがそのまま木地屋の移住の足取りと重なるわけではないとしても、本州の山口県と四国の愛媛県を結ぶ線は氏子駈の当初から廻国のルートとして使われており、さらに第8号簿冊（宝永4年）の氏子駈からは九州への訪問がこのルートに加わって来る。

すなわち [↔ 山口県 ↔ 愛媛県 ↔] から

[↔ 山口県 ↔ 九州(大分・熊本・宮崎) ↔ 愛媛県 ↔]

というルートに変わってくるのである。こうした点も九州への二つの移住ルート（山口ルート、愛媛ルート）を示唆しているように思われる。⁽⁴¹⁾

第3節 沖縄地方のろくろ

沖縄地方における木地屋の活動については、まったく情報がなく氏子駈についても今まで見てきたように熊本県人吉市を南限とし、それ以南は記録がない。それだけに琉球漆器における円形器物の製作をだれが担い、どのような道具を使用していたか、さらにその歴史と起源はどうであったか等々は非常に興味深い問題である。沖縄県でろくろの存在が確認で

きたのは石垣市の市立八重山博物館のみであり、まずはそこから話を始めたい。

(1) 沖縄県石垣市八重山博物館のろくろ[台帳番号 63]

八重山博物館に所蔵されていたろくろは伝統的な手引ろくろではなく足踏みろくろであった。かつては手引ろくろが使われていたというが、残念ながら資料としては残っておらず、恐らく博物館に残る足踏みろくろが唯一の資料だろう。以下その概要について述べる。

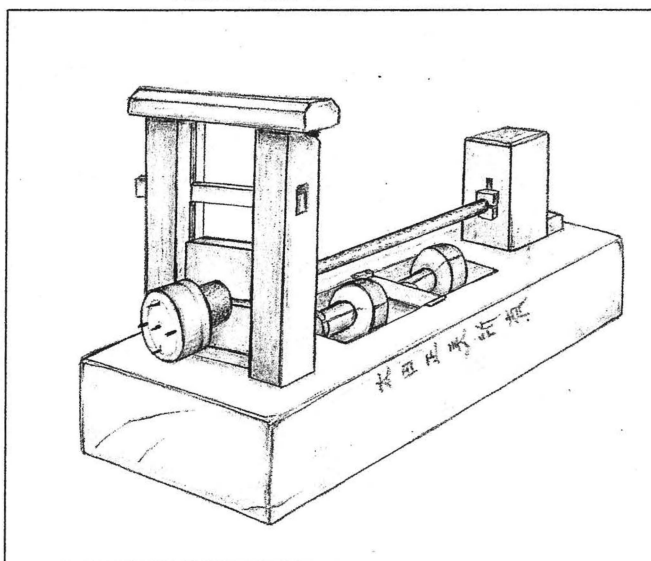
まず博物館の収蔵品台帳から紹介すれば、名称は「挽物用轆轤」、地方名が「ピイキムヌ クルマ」とあり、寄贈者は大田正美（明治33年生まれ）である。

基本的な形式としてはヨコ受型の鉄軸足踏みろくろで、分類としては愛媛県久万高原町面河山岳博物館の資料と同じ範疇に入る。しかしこのろくろは他の足踏みろくろには見られない独特の仕組みを持っていた。それは台の中央に2つの滑車を組み込んでいることで、その機能は軸の回転数を上げるための工夫であった。石垣市史にはその図とともに詳細な説明が記述されており以下に引用する。⁽⁴²⁾

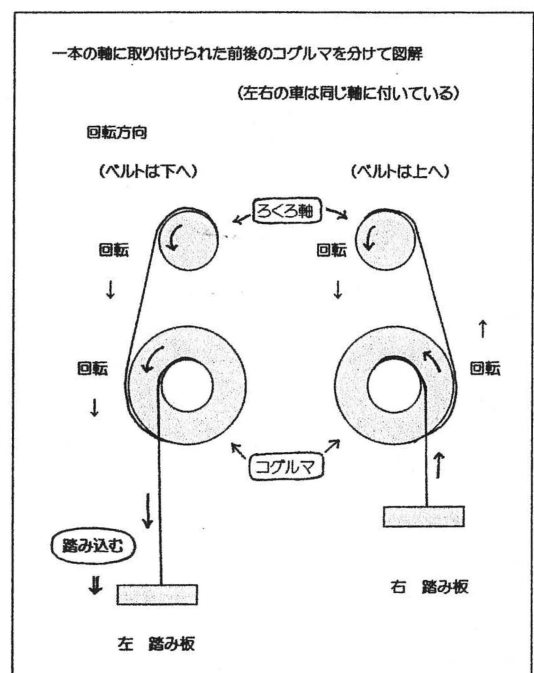
シャフトと足踏みとの間に、図②のような「コグルマ」が二つあって、大小の車にそれぞれ幅一寸（約三センチ）、長さ三尺（約九十センチ）のベルトを4本巻く。ベルトは馬の皮が一番良いのだが、豚の皮も使用した。牛の皮は堅いので使わなかった。大きい方の車のベルトはシャフトに巻き、一方は向う側へ四、五回巻き、また、もう一方の大きい車のベルトは手前に四、五回巻き、両方の先を紐できつく結ぶ。小さい方のベルトは両方とも踏み木にくくり、ちょうど織機のように、左、右と踏む。（石垣市史各論編 民俗上 p765）

文章では少しわかりにくいかもしれないが下図を参照されたい。

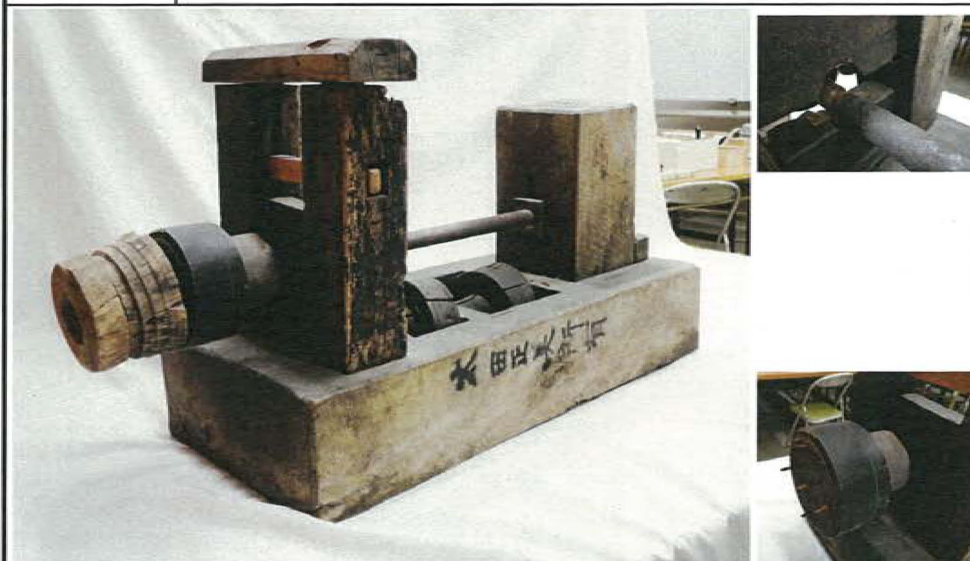
↓ 八重山博物館の足踏みろくろ（コグルマのある構造）



右は回転の仕組み →



資料所在地(施設)	沖縄県石垣市登野城4-1 (石垣市立八重山博物館)		
調査台帳番号	No.63		
文化財指定等			



基本データ＝ 軸長503mm(鉄軸部) 木製アダプター(爪除く)57mm

<観察記録>

〔形式・概要〕 ヨコ受型で台に変速用滑車が付いた鉄軸足踏み式ろくろ。

〔軸受〕 ヨコ受型 2本の直立した支柱の間に軸受となる棧木を落としこんだ一般的な構造である。特徴は支柱の上に蓋をするようにしっかりした横木を被せてあること。

〔軸〕 径24mmの鉄軸で、軸頭には軸と一体の鉄製カップ(外径79mm)前部軸受部では鉄軸に段欠きが施されている。

〔爪・軸頭〕 鉄軸一体のカップにはめ込む木製アダプターに爪が取り付けられている。アダプターは径127mm、4本丸釘型の爪で開き幅90mmの大型。4本爪の中央に丸釘状の爪があり、計5本爪となる。

〔後部軸受〕 台後部に別木を嵌め込んだ2木型。注油孔なし。軸受は金属の板で軸を上下から挟んで固定している。

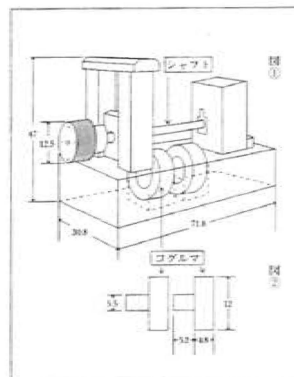
〔台〕 長方形型、中央に四角の窓があり、大小の滑車が二組はめ込まれている。足元の踏み板から小滑車にベルトをかけ、大滑車と鉄軸をベルトでつなぐことで高速回転を得るしくみ。同様の構造を持つろくろは石川県金沢市の「北陸地方の木地製作用具」(国指定)にもあり、関係が注目される。

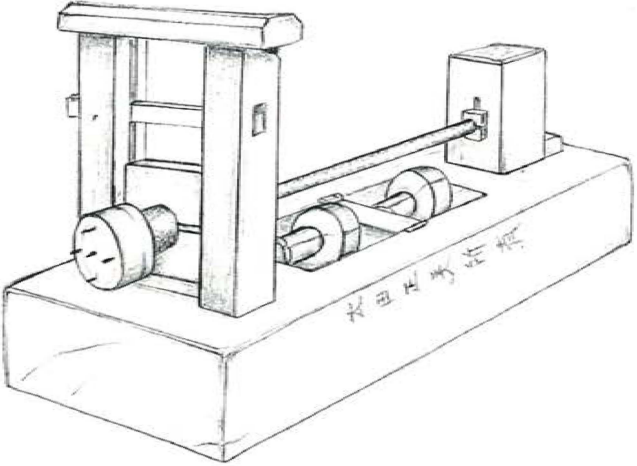
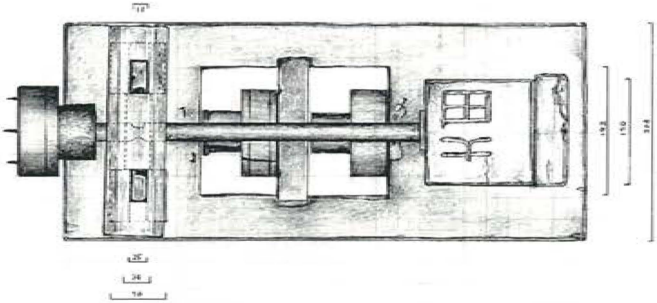
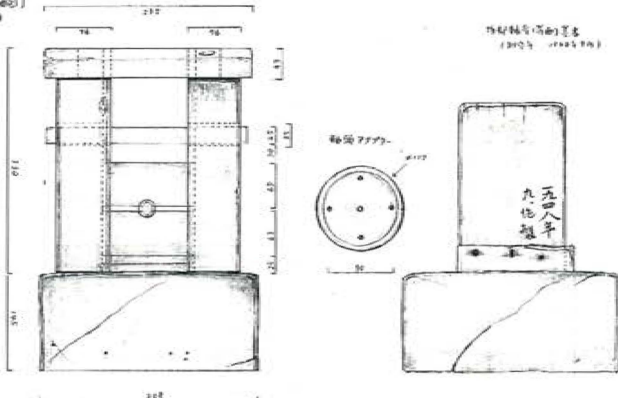
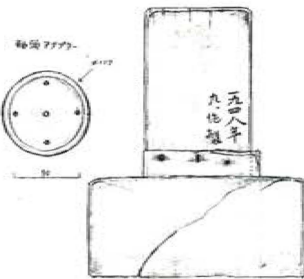
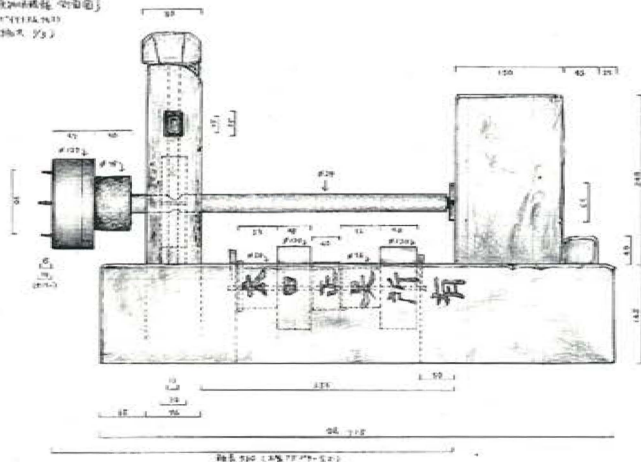
〔地方名〕 挽物用ろくろ (ピキイムヌ クルマ)
 〔採集地〕 沖縄県石垣市字石垣92(大田正美)
 〔製作地〕 石垣市 〔使用地〕 石垣市
 〔来歴〕

寄贈者は挽物職人の大田正美氏(明治33年生まれ(石垣では挽物職人をギリギリヤーという。))
 台の側面に墨書があり、旧所有者が確認できる。
 後部軸受の背面には制作年月が墨書されている。
 それによれば1948年9月の製作。

(石垣市史に掲載された解説図) →
 木枠で組んだ台の上に載せて、足踏みで回転させる構造。滑車で回転数を変える仕組みは石川県、福井県の資料にも例がある。

〔保存状態〕 支柱に腐敗劣化があるが他は良好で傷みはほとんどない。



台帳番号	63	沖縄県石垣市 [八重山博物館]	地方名	パイキムヌクルマ	(足踏ろくろ)
			<p>沖縄県石垣市 八重山博物館 [足踏ろくろ 前面図] (2011.12.14撮影) (2011.12.14撮影)</p> 		
<p>沖縄県石垣市 八重山博物館 [足踏ろくろ 後面図] (2011.12.14撮影)</p>  <p>作製機(後面)写真 (2011.12.14撮影)</p> 			<p>沖縄県石垣市 八重山博物館 [足踏ろくろ 側面図] (2011.12.14撮影) (2011.12.14撮影)</p> 		

つまるところ、この仕組みの狙いは径の異なるコグルマを踏み板とシャフトの間に介在させることによってシャフトの回転数を上げ、加工材の切削能力を高めることにある。今まで見て来た足踏みろくろには見られない、まるで工作機械のような仕掛けが使われているのである。このタイプは確かに珍しいが、今までの調査で確認した例としては金沢市教育委員会所蔵のろくろにはほぼ同型のものがあつた。⁽⁴³⁾ 両者の間に関係があつたのか、どのような経緯があつたのかは検証しなければならないが、それは後に触れることとしたい。

そのほかの特徴を挙げれば、軸頭の方法取付部は金属のカップに爪付きの木製アダプターをはめ込んでいる点は面河の資料と同じで、爪が4本とセンターに1本の5本であることも同じである。ただし、この資料では爪は平爪ではなく丸釘状である点が異なる。またヨコ受型の支柱上部に上から被せるような横木が渡されているのも他にはない特徴である。さらに台側面に所有者名が墨書され、後部軸受の上面にも所有者の姓がデザイン的な書体で彫り込まれ（陰刻）、同じ後部軸受の背面には製作年が墨書されている点が注目される。

台側面・・・大田正美所有

後部軸受上面・・・大田

後部軸受背面・・・一九四八年 九、作製

これらを手掛かりとして、本資料の来歴と合わせて石垣島におけるろくろの歴史を次項でさぐってみたい。なお、台帳にはろくろを載せるための木枠（台）を復元した写真が張り付けてあつた。足踏みろくろは手引ろくろと異なり、踏み板を使うことから腰かけて作業することになり、そのための台が必要となるのである。大田氏による復元とあるから、実際に使っていた姿に近いと思われるが、注目されるのはろくろの頭部、加工材を取り付ける側を右手にして、ろくろの側面に向かって腰かける方式であることだ。これは石川県の山中に特徴的な方式であり、その共通点が何を意味するのか、このあと検証していきたいと思う。

（2）石垣島のギリギリヤー（挽物屋）について

石垣市史には挽物に関する項が設けられ、かなりの紙数を割いて八重山地方における本地挽物の役割と歴史、それに携わってきた職人の系譜やろくろの仕組み、技法さらに主要製品に至るまで詳しく述べられている。⁽⁴⁴⁾ これをみれば本土各地とは若干異なる独特の挽物の文化が石垣島を中心としたこの地方に存在したことがわかる。その概要をまずは市史の記述によってまとめてみた。

市史によれば、山林資源に恵まれた八重山地方では古くから挽物加工がおこなわれ、ギリギリヤー（挽物屋）と呼ばれる挽物職人が庶民に親しまれていたという。ちなみに沖縄本島ではヒチムンサー（挽物職人）と言うとのこと。同じ職業を指し示すのに二つの島でなぜ呼称の違いが生じたかは不明であるが、注目すべきは本地屋、本地師という言葉は市史の記述の中には一度も使われていないという事である。ただ古い記録では挽物を指す言葉として「本地引」が使われていたということは興味深い点である。

この本地引について記された最も古い史料は『八重山島年来記』⁽⁴⁵⁾で、雍正6年（1728年・享保13年）の条に「本地引稽古させ所遣物仕立申候也」（本地引を稽古させ、地元で使う物を作らせました。）とある。また関連史料から、このとき指導に来たのは沖縄本島の具

志筑登之^{ちくとうん}という人物であったという。これらのことからわかるのは、八重山における挽物製作の歴史が江戸中期における政策的な技術導入によって始まったという事、さらにこの木地引の歴史は沖縄本島が先行しており、その後石垣島に伝えられたということである。この具志筑登之^{ちくとうん}は島の人たちに技術を伝え3年後の雍正9年には本島へ帰っている。その間石垣で挽物の技術を習得した人たちは、様々な日常の用具を仕立てることが出来るようになり大いに島民に重宝される存在になっていたという。この時使われていた道具がどのようなものか、それを窺う事の出来る記述も図像も残念ながら残されていない。

ギリギリヤーに関する記録は江戸中期以降では特に確認されたものがなく、その後の様子ははっきりしないようであるが、少なくとも島の人々の生活に根付いていったものと思われる。明治以前の様子を窺うものとして市史では一つの伝承記録を載せているが、そこに登場するのが八重山博物館に展示されていたろくろの所有者大田正美氏である。

石垣市史には大田正美氏が、父正次氏から聞いた話として、同治5年（1866年・慶応2年）頃に沖縄本島から挽物師が二人八重山に来て2、3年の間注文仕事をしたことがあったという話を紹介している⁽⁴⁶⁾。その道具が縄をかけて引く人と鉋をかける人の二人で作業するものであったということだから、詳細な形はわからないにしても江戸末期には二人挽きろくろ（手引ろくろ）による作業が沖縄本島で行われていたこと、またそれが石垣島に伝えられたことも間違いないだろう（技術の伝授はなく注文仕事のみかもしれない）。なお沖縄本島における起源については後段で触れることにしたい。

明治以降のギリギリヤーの動きについては、やはり石垣市史に詳しいのでそれによって概要を記す。市史によれば、県の統計資料などによって明治期の石垣島にはわずかに数人の挽物職人しか存在しなかったことが窺える。これは大正期に入っても変わらず、大正4年の「沖縄県統計書」にはギリギリヤーが一戸あるのみとある。ところが大正7年の『商工行政概要』には熊本から来た職人熊田某が挽物製作を始めて、これが石垣市におけるギリギリヤーの最初と記され、一方「先嶋新聞」では那覇の若狭から来た職人に習った石垣某が大正6年に開業したのが八重山挽物の元祖と紹介されるなど諸説登場し、この時期石垣島における挽物業にある種の転機が訪れたことが窺える。いずれにしても江戸時代に伝えられたはずの挽物製作の技術は一旦衰微し、近代に入ってから再び島外からの技術導入によって再出発したというのが実態ではなかったのか。この挽物製作が隆盛期を迎えるのは大正半ば頃からで、いくつかのギリギリヤーがこのころに前後して開業し、職業としても若者に魅力的なものとなった、と市史は記述している。その背景としては土産物としての需要があったことと盃蘭盆の仏具としての漆器への執着が島民に強かったことがあるようだ。リョーングブン（盃供盆）という漆器（9点セットの椀）は仏壇への供え物として八重山ではなくてはならないもので、自家用に一揃い持つことは一家の誇りでもあったという。

大田正美氏が足踏みろくろを習いギリギリヤーとして働き始めたのもちょうどこの時期であった。その時使っていた足踏みろくろは沖縄本島の兄から送ってもらったということで、本島由来のろくろであったことがわかる。さらにその使い方も本島から招いた技術指導者のもとで大正6年から3年間の訓練を受け、やがて大見謝指物店^{おおみじや}に勤めるようになったという。つまり八重山には本土の木地屋のように独占的技術を代々受け継ぐ家系があるわけ

ではなかった。石垣島では技術は本島から伝えられ、それを修得したものがギリギリヤーになったのである。

(3) 石垣島のろくろの歴史

それでは石垣島におけるろくろはどのような変遷をたどったのか、今までの検討を振り返り、もう一度その歴史の流れを追ってみたい。

『八重山島年来記』によれば石垣島で「本地引」が行われたと思われる最も古い年代は雍正6年(1728年・享保13年)であるが、この時に使われていた道具は本土における木地屋の歴史に照らしてみても手引ろくろであったことは間違いない。この手引ろくろが足踏みろくろに変わった転換期がいつ頃であったか、市史によって探ってみた。先に述べたように大田正美氏からの聞き取りで、江戸末期の1866年には本土から挽物職人が石垣島に来島して手引ろくろで仕事をしていた、という伝承があるわけであるから明治初頭にはまだ手引ろくろの時代であったと見ていいだろう。前節で述べたようにその後、大正6、7年ごろ二人の職人が来島して挽物製作を開始した。一人は熊本から来て天川製材所に入った熊田(多田)という人物、もう一人は那覇の若狭から来て自営で荷馬車の車輪の中心部(轂)を作った池原太郎という人物である。また『琉球漆器製造技術』によれば沖縄本島で足踏みろくろが使われ始めたのが大正5年という事であるから、二人の職人は最新技術の足踏みろくろを持って石垣島にやって来たものと思われる。一方八重山博物館の資料の足踏みろくろを大田正美氏が沖縄本島から送ってもらいその訓練を始めたのも大正6年である。市史の記述によれば、このころ沖縄本島で使われていた足踏みろくろには「浅岡式」と「瑞慶覧式」の2つがあり、大田正美氏が兄から送ってもらったものは瑞慶覧式の足踏みろくろとのこと。また瑞慶覧式とは瑞慶覧と言う名前の人が本土で挽物を習い、その道具を持ち帰ったことから、そう呼ばれるようになったと記されている。この2つのろくろの相違点など詳細はわからないが少なくとも博物館の資料で瑞慶覧式がどのようなものであるかは判明している。また市史にはこの瑞慶覧式が石川県山中の足踏みろくろと似ている事を付け加えているが、その経緯については何も触れていない。(1)で石川県金沢市所蔵の資料(福井県大野郡西谷村温見)に酷似していると述べたが、これには大阪の工場で作られた商標の焼印がある。恐らく瑞慶覧氏は同タイプの足踏みろくろを石川県の山中か関西方面の何処かで修得したものと推測されるが、詳細は不明である。また大田氏は当初のろくろの台木部分が腐食したことからヤラブ(テリハボク)の木で作り変えているとのこと。資料の後部軸受背面には1948作製の墨書があるので、或いは支柱と軸、前部軸受を古いままに残し台と後部軸受をその年に作り替えたのかもしれない。いずれにしてもこのタイプの足踏みろくろが本土(恐らく大阪近辺)に起源を持ち、それが瑞慶覧氏によって沖縄にもたらされ、さらに石垣島に伝えられたという技術伝播の流れが想定される。

これらのことから大正6、7年ころが石垣島において木地製作用ろくろが手引から足踏みに変わった転換期とみていいだろう。さらに池城安吉という職人の遍歴を紹介する記述が市史にはあり、そこからは昭和26年ころに足踏みからディーゼルの動力ろくろに変わり、さらにその10年後には電動ろくろを導入していたことが記されている。

要約すれば、石垣島では江戸から明治期を通じて手引ろくろの時代が続き、大正の初期に足踏みろくろに変わり戦後の昭和20年代半ばにディーゼルエンジンを利用した動力ろくろになり、昭和30年代半ばには電動ろくろが使われるようになった、という大まかな流れをつかむことができる。では沖縄本島ではどうであったのか、次項ではそれを見てみよう。

(4) 沖縄へのろくろの伝来について

前項で石垣島のろくろの歴史を見てきたが、江戸時代の手引ろくろにしても大正初期の足踏みろくろにしても、それらがすべて沖縄本島から伝えられていたことがわかった。それでは沖縄本島へは、どこから伝えられたのか、それを探してみたい。

まず沖縄本島においては手引ろくろのみならず、足踏みろくろについてもその存在を確認できなかったことはすでに述べたとおりである。また、それらに関する伝承を持ち伝える話者も残念ながら確認できなかった。従って沖縄におけるろくろの歴史把握は文献調査によらざるを得なかったことをまず断っておきたい。

幸い沖縄におけるろくろ使用の起源についてはまさにその事をテーマにした記録が残されていた。しかし、恐らく引用や参照を繰り返しながら少しずつ解釈がずれたり、あるいは誤認していくつかの文献に異なる記述が残されてしまったと思われるので、まず関係文献を古い順に整理してみた。

① 外間守善・波照間永吉編 1997『定本 琉球国由来記』東京：角川書店

3種の異本を校合して作成した復刻版。原著の序には康熙52年11月(1713年)の日付が記されている。内容は沖縄における諸事万端の由来、起源を簡潔に記したもの。その「巻四 事始 坤」の「伎術門」に「50 轆轤」が立項されている。基本文献であり、以下に全文を引用する。

「50 轆轤 轆盤工引物

当国、轆轤者、安里掟 原、隅州国分之人、^{よめじまろくろべえ}鮫島六良兵衛云 従国分于船路、将至鹿児島時、逢逆風、而漂至于当国。時那覇親見世召置 年代不詳 既歴数年、娶宮古島女、生一男。故難離妻子、終普門寺之辺居住。後移居于若狭町村、而始轆轤也。倭国「用明天皇元年、寺工及び轆盤博士・瓦博士ヲ百済国ヨリ献ル事アリ 日本紀。是皆工人ナルベシ。」

(原著では小文字は割注)

要約すれば、「鹿児島県の国分(現霧島市)の人 ^{よめじまろくろべえ}鮫島六良兵衛が船旅で暴風に遭い沖縄に漂着し、そこで世帯を持ち定住するに至った。当初普門寺に住み、後若狭町村(現那覇市若狭)に移り轆轤で挽物製作を始めた。」という事になる。ただ、それがいつのことなのかは年代不詳という事なのである。(日本紀の記述がなぜここに引用されているのかは不明。)

② 石澤兵吾 1889『琉球漆器考』東陽堂

明治19年に赴任し沖縄県商工課長となった石澤が、知事の命を受けて編集執筆した琉球漆器の基本文献。内容は貝摺奉行所から引き継いだ漆器の図案や技法書等を編集し解

説を加えたもの。この書の冒頭に琉球漆器の起源について述べており、そこで引用した資料は康熙48年(1709年)に書かれた『那覇由来記』の一節である。この「轆轤始りの事」と題した短文の内容は『琉球国由来記』とまったく同じ鮫島六郎兵衛漂着の一件で、結びは「この人後は若狭町村に移て轆轤を始と言傳へあり年代は知らず。」とある。強いて言えば名前の「良」の表記が異なるだけである。

石澤はこの文について、恐らく琉球漆器の元祖と信じられるが残念なことにその出所が詳らかではないと述べている。さらに石澤は当時若狭町村に住む鮫島六郎兵衛の同族とされる喜瀬某の家譜を紹介しているが、これがまた同様に鮫島六郎兵衛漂着の顛末を伝えているのである。六郎兵衛がその後王府より重用され子孫が出世したことを後々まで伝えるために家譜に記したといい、その文末の年号が同治7年(1868)となっている。しかし石澤は依然として鮫島六郎兵衛が挽物製作を始めた時期が不明である(「如何せん年代を記さざるは大いに遺憾とす」)として、さらにこの家譜に記された六郎兵衛の事績の一つに崇元寺の普請の折に塗物師を勤めたとあることに着目し、この崇元寺建立の年代を調べて鮫島六郎兵衛が轆轤を使い始めた時期を割り出そうと試みているのである。そして寺の建立が古文獻より明の成化年間である事を引いて我が国の年号に対応させて寛正・長享年間という年代を想定したのである。⁽⁴⁷⁾

この解釈でいけば沖縄にろくろが伝えられ挽物製作が始まったのは15世紀後半のこととなる。

③ 沖縄県伝統工芸指導所編 1982『琉球漆器製造技術一切削技術(挽物) No.4』

「3わが県における挽物」の4ページに以下の記述がある。

「わが県にロクロが伝来したのは1629年(寛永6年)で、大隅の人鮫島六郎兵衛によってもたらされた。」

この書物の出版年から判断して「1629年伝來說」の発端は恐らく本書のこの記述からではないだろうか。もちろんこの説の元になったのが石澤兵吾の『琉球漆器考』であることは間違いなく、石澤の意図しない誤読に端を発していることも間違いのないだろう。すなわち石澤は崇元寺建立の始期を寛正6年(1465)にとらえたが、『琉球漆器製造技術』の執筆者は別の文脈に使われた寛永6年と取り違えて1629年と判断してしまったようである。

④ 琉球漆器事業協同組合編 1991『琉球漆器 歴史と技術・技法』那覇市 琉球漆器事業協同組合

書名の通り琉球漆器の歴史と技術を後世に伝えるために協同組合が企画し編集した冊子である。「Ⅱ技術・技法の流れ」の章と「Ⅳ産地の概況」の章にろくろ使用の起源に関する記述があるが、複数の執筆者が各章を分担して執筆したためかそれぞれで年代の相違がみられる。ただいずれも出典は②『琉球漆器考』と思われ、石澤が年代を特定するために引用した古文獻の解釈もしくは読み違いではないかと思われるのがⅡ章の記述である。「はっきりした年代は不明であるが崇元寺普請とあること等から寛永6

年(1629年)以前であり・・・⁽⁴⁸⁾」とあるが、寺の普請と寛永6年の関係が不明で、あるいは③と同様に成化年間の始期、寛正6年(1465年)を寛永6年と取り違えたか。一方IV章では「(鮫島六郎兵衛)が琉球に漂着して、若狭町村で轆轤を始めたのは成化年間(1465~1487)ではないかと思われる。」として、⁽⁴⁹⁾注22で石澤の『琉球漆器考』を挙げているので、こちらは石澤の解釈をそのまま引いていることになる。

⑤ 石垣市史編集委員会編 1994『石垣市史 各論編 民俗上』石垣市

すでに本章(1)節においてこの市史から多くを引用しているが、沖縄におけるろくろの起源についても記述があった。⁽⁵⁰⁾「二、挽物」の冒頭で「沖縄県に轆轤が伝来したのは1629年(崇禎2)で、大隅(鹿児島県東部)の人・鮫島六良兵衛によってもたらされた。」と記しているのである。実はろくろの起源について最初に目にした文献がこの市史で、江戸初期にもかかわらず明確に伝来の年が示されていることに驚き、その根拠となる一次史料を探し始めたのだった。しかしこの記述から少し後に括弧書きの引用元が示されていた。それが③『琉球漆器製造技術一切削技術(挽物) No.4』で沖縄県伝統工芸指導所が編集発行したシリーズの1冊であった。すでにみたようにこの引用文献の記述が誤りであることから、それをそのまま引いた市史の記述も当然事実を伝えていなかった。

沖縄におけるろくろ使用の起源についての文献検討は以上の通りであるが、これらの情報をどう解釈するか、そのことについて以下にまとめてみた。

まず鮫島六郎兵衛がどのような出自の人物なのか、これについてはいずれの文献にも記されておらず、それを問題にしようとする論者もいなかったようである。わかっているのは隅州国分の人というだけであるが、そもそも実在したのだろうか。隅州国分は鹿児島県国分市付近のことで現在は合併して霧島市となっている。試みに電話帳を開いてみると確かにこの地には鮫島姓が存在する。⁽⁵¹⁾霧島市で35戸、隣接する曾於市では47戸、始良市には36戸の鮫島家が名を連ねているのである。これ以外の国内各地にどのように分布しているかネット検索で調べてみた結果、鮫島姓はほとんどが鹿児島県に集中していることがわかった。⁽⁵²⁾とりわけ鹿児島県内でも西之表市や枕崎市のほか霧島市近辺にも密度の高い分布があることから隅州国分の鮫島某は信憑性が高いとみていいだろう。問題は名前の方だが、六良(郎)兵衛は「ろくろ兵衛」である。「ろくろ」を伝えた「ろくろ兵衛」ということか。橋本鉄男の『ろくろ』では全国のろくろ地名を始め畑六郎左衛門に至るまでろくろに由来する地名やろくろに仮託した人名について詳述しているが、⁽⁵³⁾鮫島某に対してもおそらく同様の心意が働いて生まれた別称ではないだろうか。さらに言えば、船旅に出て途中難破漂流して予想外のところに流れ着き、定住してその土地に何か新しいものをもたらす、という話は伝説の一類型ではないかという気がしないではない。ただその伝来のプロセスについての語り口はともかくとして、ろくろという技術が大隅の人がもたらしたという核となる事実は実際にあったものとして受け止めたい。

次に検討すべきは彼がどういう系統の木地屋であったかということであるが、崇元寺普請の際に塗物師を勤めたとあることから漆塗りの技術を持った木地屋であったことがわか

る。恐らく隅州国分においても同様の職人として渡世していたのであろうけれども、それ以上の来歴を追求するには手掛かりがなさすぎる。翻って考えれば、南西諸島における挽物技術の伝来については、古くからの交易の歴史に鑑みれば大陸や半島からの直接のルートを想定することも可能ではないかと考えていたが、そのことが打ち消されただけでも鮫島六郎兵衛説は大きな意味を持つものであった。言い換えれば琉球漆器製作の歴史の中で円形容器の製作にかかる挽物技術は少なくとも本土から伝えられたものである、ということである。ただその年代については、最も古い文献と思われる『那覇由来記』(康熙 48 年・1709) が同じ鮫島六郎兵衛の事績を紹介しながら結局「年代は知らず」としている以上、それ以後の文献がどう詮索しても推測の域を出ない。むしろ敢えて年代知らずとしているところに何らかの意味があるのかもしれない。このことはまた別の角度で検討してみたい。

(5) 琉球漆器における円形器物の木地構造について

前項ではろくろ伝来の年代考証が少し煩瑣になってしまったが、沖縄におけるろくろ使用の起源は琉球漆器の歴史を考える上で大変重要な意味を持つことから紙数を費やした。ここでは琉球漆器の歴史から再度ろくろについて考えてみたい。

沖縄では浦添市美術館の宮里館長からの有益な示唆と首里城公園の企画展が琉球漆器の歴史について大変貴重な視点を提供してくれた。まず琉球漆器の特質を端的に示した次の一文に強い感銘を受けた。「琉球漆芸の歴史をたどれば琉球史がわかる、と言われるほど琉球漆器は王国時代の政治・経済と密着していました。」⁽⁵⁴⁾ 本土の漆器産地の歴史では見ることのないインパクトのある表現だが、それは絶海の孤島の小国であるがゆえに大国中国と日本に対する深謀遠慮の外交を余儀なくされた結果であった。古くは中国との冊封・朝貢関係にあり薩摩侵攻以後は日支両属の小国として常に儀礼的配慮が求められ、その儀礼品の代表として琉球漆器は無くてはならない重要な位置を占めていたのである。さらに皇帝や将軍への献上品という性格から、そこには自ずと華麗にして精緻な品質が追及される背景があったことは容易に想像される。琉球漆器の起源は中国に成立した明王朝と朝貢関係を結んだ 14 世紀ころに遡り、中国の影響を受けながら螺鈿や沈金をはじめとする高度な技術を磨いていったのである。

さて漆芸としての塗りの技法や加飾技法は本論のテーマからそれるのでおくとして、器胎について、それも円形漆器の木地について検討したい。円形器物の出現は多くの場合ろくろ技術の登場と表裏をなしていると思われるからである。ところが琉球漆器では少し様子が違っていた。琉球漆器の円形容器としては丸櫃^{まるびつ}や食籠^{じきろう}などが 15～16 世紀の資料として残されており、⁽⁵⁵⁾ これらはいずれも挽物ではなく曲げ物であることがレントゲン撮影によって確認されているという。⁽⁵⁶⁾ 丸櫃はほぼ円柱形の器形であるから身、蓋ともに側面は薄板を使った曲げ輪構造で、底板と蓋甲板は柂目材を数枚接いだ円盤として側面に接合させている。これらは本土の漆器においても、現代にいたるまで曲げ輪による飯櫃や重箱、弁当箱などで見られる技法である。注目されるのは肩が丸みを帯びた食籠の構造で、側面は丸櫃と同様の曲げ輪構造であるが、丸みを帯びて湾曲している蓋肩と身尻の部分は板材を薄く帯状に削った材をずらしながら巻き上げて成形していたのである。こうした技法であればろ

くろを使わず円形容器を製作することが可能である。これは捲胎と呼ばれる技法で現在の漆芸界ではほとんど使われていない技法で、沖縄においてもこの技法の存在は伝えられておらず最近のレントゲン撮影調査によってはじめて判明したという⁽⁵⁷⁾。小径の器は勿論、大型の円形容器（例えば大盆）であっても挽物として加工可能な現代に、捲胎は忘れられた技法となってしまったのではないだろうか。逆に、漆を塗ってしまえば器胎がどのような方法で成形されていようとわからないのだ。実はここに一つの問題があった。

清朝の時代に皇帝への献上品として繰り返し貢がれた琉球漆器の代表的な製品に黒漆雲龍螺鈿盆があり、首里城の企画展ではほぼ同じ雲龍螺鈿のデザインの大、中、小の三種の盆（大きいものは盤）が展示されていた。このタイプの漆器は近世琉球期（日本のほぼ江戸時代と重なる）を通じて献上品として大量に中国へ渡ったものとみられ北京故宫博物院に数多く残されているという。2012年に開かれた首里城公園の開園20周年記念特別展の図録『首里城に魂を！』には径35.0cm（黒漆雲龍螺鈿盆）と径85.4cm（黒漆火焰双龍瑞雲螺鈿大盤）の2種が掲載されており、特に前段で検討してきたろくろの使用に関連して言えば径35.0cmの資料に付された解説が注目される。「（前略）この小さい盆は寄木造であるが、一木を挽いて形成したと思われる盆もある。近世琉球期をほぼ通して献上された規格品であるが、製作技法の違いで年代差があると思われる。」⁽⁵⁸⁾という。食籠の湾曲した肩の部分に使われていた捲胎技法がこの盆の縁の部分にも使われており、しかも同じ外観の盆であっても資料によっては一木をろくろで挽いて形成した物もあるというのである。どの年にどの史料を献上したかは特定できないとの説明もあることから年代の特定は容易ではないだろうが、この資料の木地構造の詳細な調査によって捲胎技法と挽物技法の前後関係や技法の変遷がわかれば、ろくろの使用起源を探る上でも非常に有力なデータとなるだろう。ちなみに捲胎技法の歴史は非常に古く、その起源は中国の唐代に求められるという⁽⁵⁹⁾。無論ろくろによる挽物技法の歴史も最近の考古学の研究では弥生時代にまで遡って議論されているわけであるから、同様に古いことは間違いない。ただ、ここでは琉球漆器の技法伝来の歴史を検討しているわけであるから話は別である。問題はどちらの技法が琉球漆器において先行して使われていたか、という事である。

以上を踏まえてまとめれば琉球漆器の円形容器の製作技法としては捲胎が先行していたと考えるのが妥当ではないだろうか。その第一の根拠は現在の琉球漆器に捲胎の技法が伝えられていないどころか、そうした技法が使われていたこと自体忘れられていたという事実だ⁽⁶⁰⁾。これは前述の雲龍螺鈿盆のように二つの技法によるものが存在することによって裏付けられると思うが、先行する捲胎技法がある時点で挽物技法にとって代わられたということを意味していると考えられる。さらに唐代にはじまる捲胎技法が明代に最盛期を迎えたという指摘⁽⁶¹⁾と琉球王朝が朝貢と交易によって明王朝と密接な関係にあったこともそれを傍証している。製作の現場に即して考えれば円形容器を作るのに捲胎技法と挽物技法の二つの技法が存在し、どちらを採用するか選択するとした場合、比較的径の小さい器についてはより効率的な技法としてろくろによる挽物技法を採用するのではないか。つまり明朝から伝えられた捲胎技法によって製作されていた盆が、ろくろ伝来後に挽物技法に移行したということではないだろうか⁽⁶²⁾。いずれにしてもさらに多くの円形漆器のレントゲ

ン撮影調査が行われ、琉球漆器の木地構造の製作年代や変遷についての研究データが蓄積されることを期待したい。そうした情報の蓄積の上に、前項（４）のような文献調査と併せて、製品の側からろくろ使用の起源を探ることが出来る⁽⁶³⁾と考えるのである。

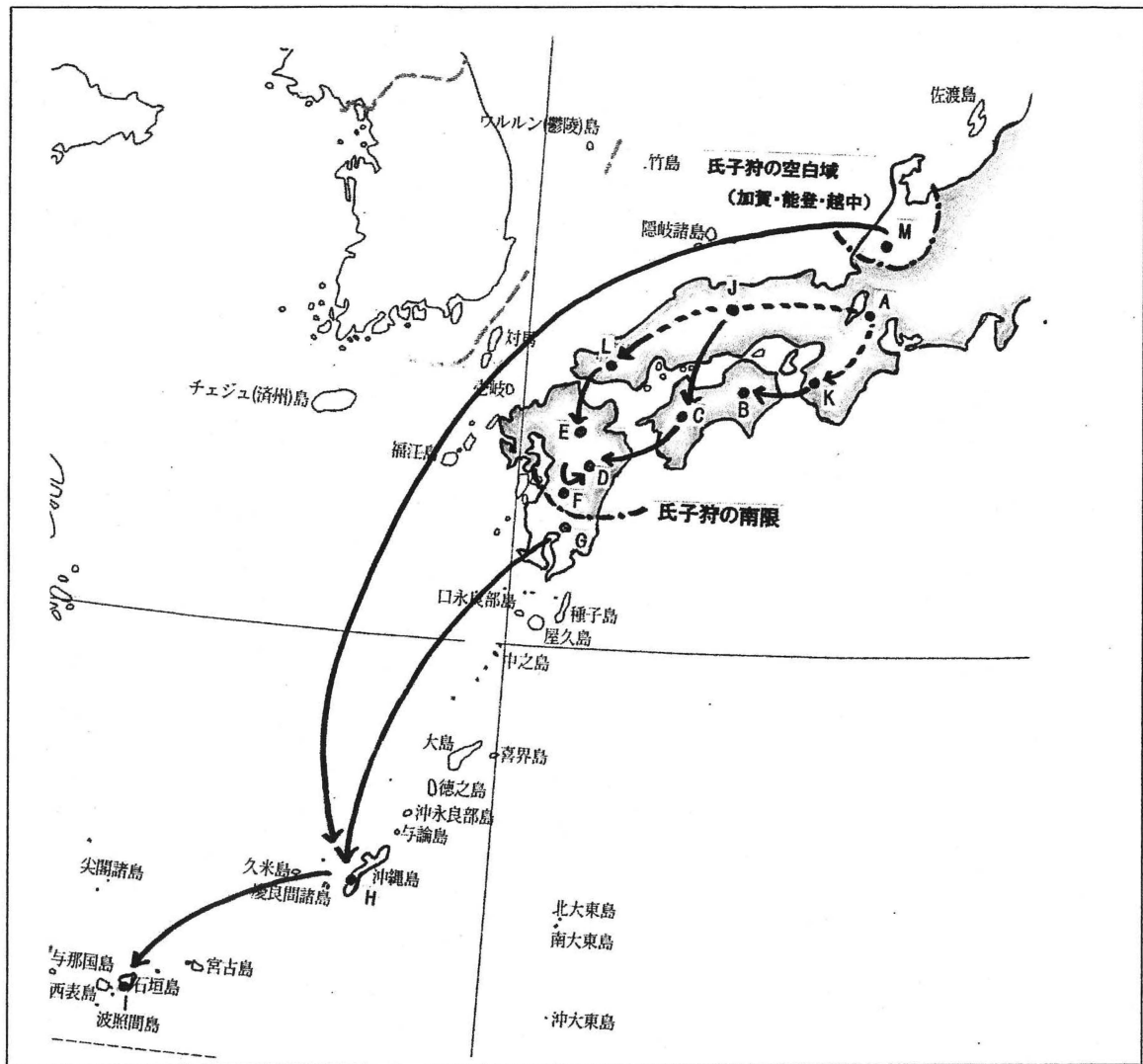
第４節 四国・九州・沖縄地方のろくろ（まとめ）

四国・九州・沖縄で調査分析できたろくろは四国で２点（徳島県、愛媛県）、九州で１点（宮崎県）、沖縄で１点（石垣市）の合計４点である。その中で伝統的な手引ろくろは宮崎県の資料一点のみで、他は足踏みろくろであった。四国・九州・沖縄の広大なエリアの木地屋とろくろについて４点の資料で語ることは困難であるが、幸いにどの地域にも自治体史を始めこのテーマに関した文献が多くあり、それらを援用しながらこの地域における木地屋の歴史とろくろの変遷を簡潔にまとめたい。（次頁の図参照）

まず四国については徳島県の祖谷地方と愛媛県の久万高原の二箇所に古くから木地屋の集積があり、それぞれろくろが残されていたがどちらも近代に入ってから足踏みろくろであった。また愛媛県は蛭谷氏子駈帳の第１号簿冊（正保４年・1647）から記録があるのに対して徳島県は第１１号簿冊（元文２年・1737）に初めての記録が登場し、その間に百年近い開きがある。このことは同じ四国の木地屋であっても異なる系統である事を示唆しており、事実それぞれ文献では久万高原の木地屋は美作（岡山）からの来住を伝えており（J→C）、東祖谷・一字の木地屋は紀伊（和歌山・黒江）との繋がりを述べている（K→B）。また足踏みろくろについても近代の資料とはいえ、前者は美作（岡山）の旧上斎原村赤和瀬の資料との類似をうかがわせる手引ろくろ改良型の形態である。一方後者は東北から渡って来たろくろ指導者伊沢為次郎の伝えた道具である可能性が高く、まったく異なる構造を示していた。どちらにも伝統的な手引ろくろが残っていなかったのが残念であり、それらの比較ができればより明確な結論を示せたかもしれない。それでも阿波の文献史料『茂山日記』の中に江戸時代の東祖谷の木地屋が手引ろくろを扱う姿が描かれていたことは幸運であり、この地域で使われていた手引ろくろの構造をうかがい知る記録として貴重である。

九州では、宮崎県五ヶ瀬町で九州唯一の手引ろくろを調査し、その木地屋の末裔からは久万高原の木地屋との縁戚関係について話が合った（C→D）。五ヶ瀬町の資料と面河山岳博物館の資料とは手引と足踏みの違いがあり単純な構造比較はできないが、材料取付部の爪数が５本爪で共通していることが注目される。本州各地の資料を見ても５本爪はほとんど例がないからである。さらに伊予（愛媛）と日向（宮崎）・豊前（大分）の間は氏子狩の巡国人が四国・九州を結ぶ移動ルートであった。一方ろくろ資料の存在は確認されないが、大分県山国町の木地屋について同町が企画した特別展資料（報告書）によってかなり詳細な状況が把握できた。そして同町にかつて居住しやがて南下していった木地屋のルーツが山口県にあることを氏子駈帳の記録から確認できた（L→E）。つまり九州の木地屋には山口県と愛媛県の二つのルートで移住してきた木地屋がいたという事である。さらに大分・宮崎から熊本南部へ移住した木地屋への氏子狩は第８号簿冊（宝永４年・1707）に記録が残されており、人吉市の訪問を最後に、それ以南への氏子狩は行っていない（F）。つまり氏子狩の南限

〔木地屋の移住と技術の伝播（四国、九州、沖縄）〕（文中のA～Mは図中のA～Mに符合する。）



- A 滋賀県 蛭谷・君ヶ畑（＝ 木地屋の根源地）
- B 徳島県 祖谷地方（東祖谷山歴史民俗資料館＝足踏みろくろ No.61 ）
- C 愛媛県 面河地方（面河山岳博物館＝足踏みろくろ No.62 ）
- D 宮崎県五ヶ瀬町（小椋家＝手引ろくろ No.60 ）
- E 大分県山国町（木地屋居住跡＝木地墓）
- F 熊本県 人吉市（氏子駈の南限地）
- G 大隅国分（沖縄にろくろを伝えたと言われる鮫島六郎兵衛の出身地）
- H 那覇若狭町（鮫島六郎兵衛 挽物業創始の地）
- I 石垣市（八重山博物館＝足踏みろくろ No.63 ）
- J 岡山県(美作)
- K 和歌山県海南市(紀州黒江)
- L 山口県(周防)
- M 石川県山中町（大正末期沖縄に移住し挽物技術を伝えた岩城仙太郎の出身地）

は熊本県人吉市古仏頂である。しかし木地屋はそれより南へ移住しなかったわけではない。

『木地師制度の研究』第二巻によれば熊本県との県境付近の鹿児島県には木地屋の来住の歴史が色濃く残っているという⁽⁶⁴⁾。彼らの特徴は小椋姓ではなく轆轤、木地山、軸屋など木地屋との関係をうかがわせる名前になっていることである。さらに伊佐郡山野町の木地山家は熊本県から来住した伝承を持つなど北部からの移住を伝えている一方、宮之城町の轆轤家のように先祖の出自がまったく伝わっていない例もあるという。恐らく彼らの歴史が氏子狩によって小椋姓が広められる以前の古い時代であったことの証左ではないだろうか。

沖縄の木地屋を語る場合は琉球漆器に関わった木地屋（ヒチムンサー）と、庶民の日常の器を作った木地屋（ギリギリヤー）とに分けて考える必要があるだろう。前者は沖縄本島的那覇を中心に琉球漆器の木地製作に従事した木地屋であり、後者は石垣島を中心に八重山地方の日常雑器の製作に従事した職人たちで歴史は本島ほど古くない。さらにこの両方を含めて言えることは、本州でみてきた木地屋社会とはまったく異なる性格を示しているということだ。即ち先祖代々ろくろを持ち伝え挽物製作を伝統の技としている木地屋ではなく、挽物製作を自らの職業として選んだ者が新たに技術を修得して木地屋となったのである。そしてこのろくろの技術は大陸や南方から来たものではなく本土から、それも文献（鮫島六郎兵衛の一件）にあるように薩摩経由で沖縄に伝えられたものだった（G→H）。ただ、そのろくろがどのような構造のものであったかは資料が残っていないので不明である。近代以降にいわば第二波として本土から伝えられたものが足踏み式のろくろで（M?→H）、それがやがて石垣島にも伝えられたことがわかっている（H→I）。この地域で唯一の資料、八重山博物館の足踏みろくろがそれで、市史に触れられているように石川県、福井県の木地屋が使っていたものと酷似している。これを持ち伝えた職人が本土で修業したというのは恐らくこの付近ではないだろうか。

木地屋の技術の特質は単に物を製作するための手技としてあったのではなく、生活・文化まで含めた独自の世界を持っていたことにある。そしてその背景にあったのが惟喬親王伝説であり、御綸旨や縁起書であり、氏子狩という統制システムであった。これらによって単なる挽物職人は全国に広がる独特の社会の構成員に組み込まれ木地屋という世界の住人となっていたのである。もちろん彼らがろくろをはじめ種々の道具類を代々持ち伝え挽物製作の技術を占有してきたのは、深山を漂泊し里人の生活と隔絶した営みを余儀なくされていたが故であって、その占有を意図した結果とは言えない。言い換えれば独占的にならざるを得なかったのである。それを側面から補強して確固とした社会制度にまで仕立て上げたのは近江の国の蛭谷・君ヶ畑の先人たちの功績だろう。氏子狩と称して数年から十数年おきに全国の木地屋を訪ね歩いて惟喬親王伝説を説き、巻物を与え、寄進を求め、さらに「木地屋」という仮想国家の住人としての意識付けを共通の姓によってより強固なものにするという発想は驚嘆すべき戦略であった。

九州・沖縄方面調査の大きな意義は近江文化圏の辺境地域を訪ねることによって、近江の国の磁力が届かないところで木地屋社会がどのように変容していったかを垣間見ることが出来たという点にある。その磁場の限界は既に述べた熊本と鹿児島の県境付近にあると言って間違いはないだろう。ここで氏子狩という統制システムの圏外に出た木地屋は、あるもの

は定住して本来の職を捨て、あるものは技術を持って活躍の場を里に求めたと思われる。彼らが木地屋の名残をとどめながら小椋姓を持たないのは恐らく近世末に小椋姓が広まる以前に近江の国の支配を脱していたからだろう。そしてここで何よりも着目しなければならないのは、木地屋が占有していた挽物技術が初めて属人的性格を捨て、個人から離れて技術だけが自由に流通するようになったということである。前段で種々の検討を加えた鮫島六郎兵衛の一件も、或いはろくろ技術の伝来を伝えるための説話だったのではないだろうか。そうでなければ沖縄への挽物技術の伝来が単なる漂流・漂着という偶然の結果になってしまう。年代不詳の記述に隠された真実はそういう事ではなかったのか。

さらに言えば、近江の国の磁力が届かなかった地域がもう一つあった。少し話が飛躍する感もあるが沖縄のろくろ技術にも関係することであり、付け加えておきたい。

石川県江沼郡山中町（現加賀市）は山中漆器の産地として広く知られているが、ここの挽物技術のルーツは大聖寺川の上流、真砂集落の木地屋である。その真砂の木地屋は越前の国から山を越えて加賀へ入ったと伝えている。ここで注目したいのは真砂木地屋には惟喬親王伝説や御綸旨などが伝えられているにもかかわらず近江の国の氏子狩は一度も受けていない点である。つまり越前領で氏子狩を受けたのを最後に近江とのつながりを断ったまま加賀の国に入り定着したのである。試みに蛭谷氏子駈帳の二百数十年に渡る記録をあたってみても、越前までは何度も廻国していながら加賀・能登・越中の北陸三国へは一度も訪れていない。九州南部と異なり近江の国とは目と鼻の先である地理的環境にありながらこの三国は氏子狩の空白域だったのである。にもかかわらずこの地域には挽物製作技術と密接につながった漆器産地が集中している。ざっと挙げても山中漆器、金沢漆器、輪島塗、合鹿碗、高岡漆器、富山漆器、魚津漆器等々が数えられる。なぜこの地域に近江の国の統制が及ばなかったのか、理由はわかっていない。

ここで是非指摘しておきたいのは同じ近江の国の統制を脱した地域である九州南部地域との共通点についてである。小椋姓の木地屋がないのは近江統制の圏外になった時代の古さを反映している点で同じと考えられるが、とりわけ注目されるのは技術の流動性という点である。山中漆器の起源は真砂からの木地職人の移動というより、挽き物技術が山中に伝えられ広まった結果であった。さらに近代に入っても山中の挽物技術は各地に伝えられており、『山中漆工史』第十二節「山中木地師の活躍」には、日本各地のみならず海外にまで技術を伝えた職人たちのリストが載っている⁽⁶⁵⁾。その指導先は青森から飛騨、富山、山陽山陰、四国、九州・沖縄、朝鮮、ビルマにまで及ぶ。つまり近江の統制がおよばないところでは挽き物技術は代々継承される特殊技術ではなく、広く普及されるべき一般的な生産技術に変容していたのだ。さらに同書には興味深いエピソードが紹介されていた。山中の木地職人岩城仙太郎が大正末期に沖縄へ移住してその技術を広めた(M→H)、というのである。山中の挽物技法は職人がろくろに対して座る位置関係が他地域とは異なる独特の方法で知られるが、昭和47年に沖縄の工房を視察した山中漆器の職人が、沖縄の挽物技法が山中のそれと同じことに驚き、帰ってから調べたところ岩城氏の移住がわかったというのだ⁽⁶⁶⁾。木地屋の技術が人から離れて自由に流通する技術に変容したことを示す好例ではないだろうか。

木地屋社会の特異性を確立しシステム化したのは近江の国の神社勢力による氏子狩制度であった。しかし、その支配統制の圏外に出た木地屋は移住生活を捨てて常民社会に溶け込み、ろくろによる挽物製作を特殊技術から一般技術へと性格を変えていった。九州南部から沖縄に見られる木地屋の歴史はまさにそれを示しており、奇しくも同じ運命を辿った北陸の木地屋と近代以降に交流があったことも興味深いことである。いずれにしてもこれらの地域は、氏子狩の統制下で伝統的な木地屋の歴史を歩んできた地域とは明らかに異なる歴史を辿っていたのであった。

第5章―第1節～第5節【注】

(1) 氏子狩とは、蛭谷・君ヶ畑両集落の寺社組織の役人が、それぞれ全国各地に散在した木地屋を数年から十数年おきに巡廻訪問して人別を確認し、奉加金や寺社修復費の寄進を募り、一方でまた御綸旨などの巻物を下付したり宗門改めや手形等を交付し、木地屋の職の正当性を保証し、様々な便益を与えた制度である。制度の確立は近世初頭と考えられるが、氏子狩の記録は正保4年(1647)の蛭谷の氏子駈帳第一号簿冊が最古である。蛭谷では明治26年(1893)までの34冊の記録が確認されている。また君ヶ畑では元禄7年(1694)から明治5年(1872)までの52冊が残されている。

(2) 蛭谷の氏子駈帳による四国廻国のデータ

・ 四国の記載がある簿冊は計16冊、号数の内訳は

1, 3, 4, 5, 7, 8, 10, 11, 12, 13, 17, 19, 20, 21, 28, 29

・ 約200年間で訪問した木地屋集落の総延べ数は374件。その県別内訳は

愛媛県198件、徳島県123件、高知県51件、香川県2件

で、愛媛県が全体の53%、徳島県が33%を占める。(君ヶ畑の記録は未集計)

(3) 『民俗文化財集 阿波の木地師』 p11 図版18 及び中段の説明

編集 徳島県郷土文化会館 民俗文化財集編集委員会

発行 徳島県郷土文化会館 1983.3.20

(4) ・ 三好郡行政組合 1996 『阿波国三好郡村誌・祖谷山舊記』復刻版 p201、212~213

・ 東祖谷山村故事収集委員会・ひがしいやの民俗編集委員会 1990 『ひがしいやの民俗』 p44 東祖谷山村教育委員会

・ 喜多源内 1922 『西祖谷山村史』 p138~141

(5) 『民俗文化財集 阿波の木地師』 p46~47 (三) 伊予と阿波の轆轤師文書

(6) 轆轤師、得銭はいずれも西祖谷山村(現三好市)にあった地名である。

轆轤師はかつてそう呼ばれていたが現在は西岡、得銭も現在は嘉字に改めて徳善。

(7) 橋本鉄男 1979 『ろくろ』 p166~169 法政大学出版局

(8) 『民俗文化財集 阿波の木地師』 p48 (四) 木地師阿波入国経路

(9) 『民俗文化財集 阿波の木地師』 p60 に『茂山日記』所収の挿図が掲載されている。

以下に同書の一節、ろくろ作業の描写の部分を紹介する。

「木地挽を望けれハかしこまりて 老婆と妻と二人ハ紐を引 男ハかぎの如き物をもてけずる いとおかしき歌を口の内にて拍子とりつつ紐を引 女ハ丸くはつりた

る木質^{あらき}を足にて廻しつつ おかしき斧もて^{ナカクボ} 凹^{ナカクボ} にはつりもてゆく其のわざいとよく
たへたり これはロクロにかくる下地なり」

(10) 東祖谷山村誌編集委員会編 1978『東祖谷山村誌』p270 東祖谷山村

(11)『阿波の木地師』p68～69 (二) 工作具の革命・足踏みろくろ

(12) 手引ろくろの一般的な木軸の長さは60～70cm程度で、この長さにはそれなりの理由がある。ろくろの軸に掛ける縄は7周半ともいわれており、その縄が引手によって交互に引かれるたびに軸に捲かれた縄が前後に移動するために、その移動幅の軸長を確保しなければならない。一方足踏みろくろでは、縄であれベルトであれ、軸に掛ける巻き数ははるかに少なく済む。このため足踏みろくろの軸長は短くてもよいわけである。東祖谷山の資料は木軸部のみで比較すると一般的手引ろくろの半分以下の27cmであった。

(13) もし、徳島県にある足踏みろくろが伊沢為次郎の移入したものであるならば、彼が最初に足跡を残した東北地方にも同形の足踏みろくろがあるはずである。詳細な調査は行っていないが、会津の木地屋研究者金井晃氏から南会津郡下郷町の音金に伊沢為次郎の考案ではないかと思われる足踏みろくろが一台あるとの情報を得、その写真を確認した。これが東祖谷歴史民俗資料館所蔵のろくろとよく似た形態であった。今後さらに調査確認してみたい。

(14) 橋本鉄男の『ろくろ』p143には、『大岩助左衛門日記』の記述から、実際にはこれよりさらに古く天正4年(1576)に氏子駄を開始したこと、その帳初めとして麻生山木地屋21戸(実際は一戸書き漏らして20戸)の木地屋が書き記されていること、等を紹介している。現在残る氏子駄帳の第1号簿冊が正保4年(1647)であるから、それより70年も以前に氏子駄りの計画がスタートしていたことになる。しかし実際の帳簿は残っていない。

(15) 君ヶ畑の氏子駄データは未集計であり詳しい分析は今後になるが、四国の歴史に関わる部分で少し触れれば、蛭谷が最初に伊予に入ったのが正保元年(1644)で阿波に入ったのが元文二年(1737)であるのに対して、君ヶ畑が四国に入った時の最初の訪問地はやはり伊予で元禄七年(1694)のこと、これが君ヶ畑の国内最初の氏子狩(第一号)である。阿波に入ったのは宝暦二年(1752)(第7号)、つまり伊予の木地屋は蛭谷、君ヶ畑の双方から強いつながりがあったことを想像させるのに対して、阿波の木地屋は中世末からの古い歴史を持ちながら近江のどちらの神社からも長い間訪問を受けずにいたのである。大変興味深いことであるがこのことの背景にどのような事情があったのか、その検討は今後の課題である。

(16) 愛媛県 1984『愛媛県史 地誌Ⅱ』(愛媛県生涯学習センター データベース『えひめの記憶』)

同書 第7章 第4節 三 上浮穴郡の木地屋集落(デジタルデータのためページは不明)

(17) 杉本寿 1976『木地師制度の研究』第2巻 清文堂出版 大阪

(18) この記録は杉本寿『木地師制度の研究』第2p433 「第6節面河村地方の木地師村落」に全文が掲載されており、本文引用はこの文書の冒頭部分で、以下移住を重ねた場所を詳細に記録して最後は慶応4年(1868)となっている。

- (19) 前掲書 p444 「小椋重右衛門先祖年代記附録」の冒頭部分に記されている。
興味深いことにこの家系は享和3年(1803)に笠方から芸州(広島県)佐伯郡吉和村の山中へ移っている。そこからさらに防州(山口県)玖珂郡へ移動し、文政2年(1819)で記録は終わっている。記録はないが、その後再び伊予の面河に戻って定着し現在に至る。
- (20) 面河村村誌編集委員会 1980『面河村誌』面河村
(愛媛県生涯学習センター データベース『えひめの記憶』)
同書 第二章「三 木地屋集団」に笠方梅ヶ市の小椋アヤ子氏所蔵文書として二通が紹介されている。(デジタルデータのためページは不明)
- (21) 久万町誌編集委員会編 1989『久万町誌』久万町
(愛媛県生涯学習センター データベース『えひめの記憶』)
同書 第四章 三 久万山農民の暮らし附木地師の生活
(デジタルデータのためページは不明)
- (22) 久万高原郷土会編 2011『久万山物語』久万高原町教育委員会
同書 p227「古文書に残る木地師」には『諸事頭書之控』の宝永5年(1708)の記録を紹介し、このころ浮穴郡及びその周辺の木地屋が共同で船による大阪への木地の運搬を行っていた事を伝えている。
- (23) スエロクロという呼び方は他に例がない珍しい呼称。「据えろくろ」の意か。
また『愛媛県史 地誌Ⅱ』「三 上浮穴郡の木地屋集落」には、このスエロクロを使った木地挽作業の様子を「シリコ挽き」ともいったとある。一人或いは二人の引手が座って綱を引くことから来ているのだろうか。「尻こ挽き」の意と思われる。引綱に牛革のベルトを使ったというのも珍しい(『久万町誌』)。
- (24) 本例のほかは、岐阜県郡上市明宝村寒水の資料、石垣市八重山博物館の資料など。
- (25) 『阿波の木地師』p12~13
- (26) 『久万町誌』第二編 第四章 三 熊山農民の暮らし 附 木地師の生活
- (27) 『阿波の木地師』 p10~11には図版16で徳島県内で唯一の「手挽ロクロ」が掲載されている。同じ資料がカラー写真で口絵図版にも再掲されている。掲載写真による判断で誤認もあるかもしれないが、この資料は今までの調査を踏まえてみれば、手引ろくろの特徴を備えていないのではないと思われる。特に軸の構造から判断すれば、ベルトによって動力を伝える方式の水車ろくろか初期の電動ろくろではないだろうか。その根拠は、短い鉄軸シャフトにベルト掛け用のプーリーが取り付けられていること、また水車ろくろの場合回転動力を手元でオン・オフできないため、軸に遊び車を取り付けて、ベルトをずらしてろくろの回転を止める方法が一般的である。その遊び車は当然軸には固定されていないことから破損欠落した資料が多い。この資料でも軸の後半部分は鉄シャフトが露出しており、同様の事情が推察される。以上の点から、この資料を手引ろくろとすることには疑問があると考えられる。(掲載資料の名称表記は「手挽ロクロ」となっているが、注の本文で「手引ろくろ」とした理由は第Ⅱ部第2章第2節「ろくろ」の名称について、を参照されたい。)

- (28) 橋本鉄男『ろくろ』p169～174
- (29) 杉本寿『木地師制度の研究 第二巻』p795～1025 豊前、豊後、薩摩、肥後、日向の各国の木地屋について詳述あり。
- (30) 前掲書 p855 鹿児島藩文書について、p859 木地山（地名・姓）について、p863 木地山（地名・姓）について、p865 轆轤（姓）について、p866 軸屋（姓）について、p868 木地山（地名）について、p869 軸屋（姓）について
- (31) 前掲書 p860 木地山休八家の来歴 p864 木地山奎治家、木地山喜地郎家の来歴
- (32) 今まで調査した資料（木軸手引ろくろ）60 件の軸径の平均値は 57.7 ミリで、径が 80 ミリを超えるものは本資料含めて三例しかない。
- (33) 碓井哲也 2012『木地師・熊・狼 高千穂郷・山の民の生活誌』p48～50 鈺脈社 宮崎
- (34) 五ヶ瀬町 1981『五ヶ瀬町史』p694 第一法規出版 福岡市
- (35) 小椋昭夫 昭和 3 年生まれ（89 歳）祖父秋次郎 父定市 三カ所 坂狩で酒店経営
- (36) 小椋康尋 昭和 27 年生まれ（65 歳）祖父岩三郎 祖母シモ 父幸四朗
祖父岩三郎は手引ろくろによる木地製作を行っていた。祖母シモはろくろの綱を引いた経験を持ち、森の恵み資料館の等身大ジオラマのモデルとなった。
- (37) 1980 年に宮崎県教育庁は民俗技術の映像記録として木地屋のろくろ作業を収録した。そこに康尋氏の父幸四朗、祖母しも（当時 88 歳）が作業する様子が残されている。町史によればテレビ宮崎によって同年 6 月にその映像が放映されたという。その記録映像は森の恵み資料館でビデオ資料として視聴することが出来る。
- (38) 昭夫氏は愛媛県の親戚の木地屋を訪ねた子供の頃の古い記憶について語り、そこが有名な劇場のある山裾の村でみやま・やまだ・・・村という所だった、と。古い話で判然としなかったが、愛媛県上浮穴郡の何処か。
- (39) 山国町教育委員会 2005『民俗文化財集「山国町の木地師」』p12
- (40) 照合で確認できたのは次の 7 人（→は、それぞれの人物が同一であるとした場合の移住の動きとして示した。）

簿冊番号	蛭谷第 7 号簿冊（元禄 7 年）	蛭谷第 8 号簿冊（宝永 4 年）
訪問年代	（1694 年 5 月）	（1713 年 1 月）
三右衛門・・・	山口県佐波郡徳地町柚木	→ 大分県下毛郡山国町槻木（不知山）
庄右衛門・・・	同上 徳地町柚木	→ 同上 槻木（めうがの村）
長右衛門・・・	山口県都濃郡鹿野町大潮	→ 同上
安右衛門・・・	同上	→ 同上
長左衛門・・・	山口県阿武郡阿東町地福上・下	→ 同上
清兵衛・・・	山口県都濃郡鹿野町野上	→ 同上
平右衛門・・・	同上	→ 同上

- (41) 山口県への資料調査は未実施である。
- (42) 石垣市史編集委員会 1994『石垣市史各論編 民俗上』p765 石垣市
- (43) 石川県金沢市教育委員会所蔵の「北陸地方の木地製作用具」（昭和 47 年国重要文化財）に含まれる資料で福井県大野郡西谷村温見の足踏み轆轤に酷似する。

(かつて同コレクションは民間経営のテーマパーク「江戸村」が所有していた。)

- (44) 『石垣市史』第3章第8節諸職 二、挽物 p752~772

以下市史からの引用または概要紹介はすべてこの「二、挽物」の中の記述による。

- (45) 石垣市 1999『八重山島年来記』(石垣市史叢書13) p53 600条

『八重山島年来記』は八重山をめぐる古い行政日誌を中心とした年代記録で、書き始めは洪武元年(1368)であるが中世の部分は年代のみの記載で実質的な行政記録が記されているのは近世初頭からである。多くの写本や表題、記述の異なる異本が存在する。市史叢書は『沖縄県史料 前近代1 首里王府仕置』(沖縄県教育委員会 1981)所収の「八重山島年来記」を基に修正を加えたもの。

- (46) 『石垣市史各論編 民俗上』p755

- (47) 石澤は「中山世譜尚圓王の部に左の附記あり曰く・・・」と参照した文献名を挙げて引用しているが、その原史料の所在については言及していない。

中国年号の成化年間は成化元年(1465)~成化23年(1487)であり、これに対応する日本年号は寛正6年~長享元年である。石澤はこの間を崇元寺の建立の時期と解釈しているのである。

- (48) 琉球漆器事業協同組合編 1991『琉球漆器 歴史と技術・技法』p45

- (49) 同上 p116~117

- (50) 『石垣市史』p752

- (51) NTT ハローページ 鹿児島県霧島市版

- (52) 名字由来 net による。 <https://myoji-yurai.net/>

- (53) 『ろくろ』p7~16、p118~126

- (54) 平成29年度首里城公園企画展「琉球王国のもよう」展示室Ⅱにおける解説パネル文より引用。

- (55) 国立歴史民俗博物館編 2017『URUSHI ふしぎ物語—人と漆の12000年史—』p266

図2に15世紀の丸櫃「黒塗菊花鳥虫沈金丸外櫃及び緑塗鳳凰沈金内丸櫃」が掲載されている。また首里城公園管理部編集 2012『首里城に魂を!』p24に16世紀の食籠(図18「黒漆菊花鳥虫七宝繫沈金食籠」)とp26、27に16世紀の丸櫃(図20「黒漆牡丹七宝繫沈金丸櫃」、図21「黒漆日輪鳳凰瑞雲点斜格子沈金丸櫃」)2点が掲載されている。

- (56) 注(55)『首里城に魂を!』の16世紀の食籠(図18)の解説及び丸櫃(図20、図21)の解説による。

- (57) 高橋隆博 1994「古代の漆芸技法-券胎」『日本美術工芸』6月号 p11-17 大阪

日本美術工芸社

捲胎技法の詳細な解説がなされており、この技法が近年まで知られておらず正倉院の「漆胡瓶」のレントゲン撮影調査で初めて認識されるに至った経過を伝えている。

(この技法の表記には「捲胎」と「券胎」の二通りがあり、本論では書名以外では「捲胎」と表記した。)

- (58) 前出『首里城に魂を!』p34の図28の解説文

- (59) 前出「古代の漆芸技法 — 券胎」 p17
- (60) 『首里城に魂を！』 p70
- (61) 前出「古代の技法 — 券胎」 p17
- (62) ただし大盤のように径が 80 cm をこえる器は、一木では材料調達やろくろ加工の技術的問題があり、また経年劣化（変形、歪み）を避けるため寄木と捲胎以外の方法は考えられなかったと思われる。
- (63) 捲胎技法による円形容器の製作が、どの程度の小径の器にまで使用されていたのか、という点が一つのポイントであると思っている。このことについては浦添市美術館の宮里正子館長から、ミャンマー調査の折、捲胎漆器作りに従事する女性からサンプルとして製作実演してもらったという小さな器を見せていただいた。漆を塗る前のリボン状の竹が渦を巻いている直径 10 cm ほどの器だった。それを見て、これであればろくろが無くても外見上はまったく挽物と変わらない碗類も製作可能と感じた。それでは、ろくろ伝来前の琉球漆器に碗はあったのか、つまり捲胎による碗は存在するのか。まだまだ解明すべき課題は多い。竹を利用する東南アジアでは籃胎のほか捲胎も竹を利用していた。宮里館長によればあちらには節と節の間が非常に長い竹がある、と。そうだとすれば竹ほど捲胎にふさわしい素材はないように思う。均一で薄い帯状の材が作りやすく、一定の長さが確保できれば繊維の強さや曲げに対する強度は木材より勝っているから。
- (64) 杉本 寿 1976 『木地師制度の研究』第 2 巻 p859～889 清文堂出版 大阪
- (65) 山中漆器漆工史編集委員会 1974 『山中漆工史』 p51 山中漆器商工業協同組合 石川県山中町
- (66) 同上 p52～53

第Ⅳ部 結 論

第1章 技法と構造の関係について

第Ⅲ部では国内各地のろくろについて、その主な特徴やそれぞれの歴史的背景との関連について見て来た。第Ⅳ部ではそれらの特徴を全国的な視野の中で比較検討し、どのように関係し合っているのか、また相違しているのか、様々な角度から検討を加え、技術の系譜から木地屋の系統を探る試みに繋げたい。

第1節 ろくろに刻まれた技法の痕跡

木地屋が長い歴史の中で担ってきた伝統的技術を一言で要約すれば、ろくろによって円形の木製器物を作ること、その一語に尽きる。さらに製品に大小違いはあってもろくろという道具の性質上すべて回転体のバリエーションである。これは当然のことではあるが、道具の視点から見ればろくろは加工材を装着してそれに回転を与える以上の機能は持たない、至ってシンプルなものである。そこに、ろくろと加工材の間にろくろ鉋を持った職人としての木地屋が入り、様々な技法を駆使してお椀やお盆、鉢などの容器が作り出されるのである。

一方、ろくろ鉋は個々の木地屋が日々打ち直しては刃付けをする、俗に「ゼンマイ鉋」と言われる伝統の道具である。⁽¹⁾ これも加工の段階によっていくつかの種類があり、個々の職人の使い方によっても様々な刃型が工夫される。しかし基本は「ゼンマイ鉋」である。そして最も重要なことはその刃物の使い方、技法ではないだろうか。これについては、各地のろくろを調査して解かったことがある。それは、加工材に対して刃物（ろくろ鉋）を構えて切削する場合に、その技法が痕跡として道具（ろくろ）に刻まれることがある、ということである。広く共通する痕跡であれば、その技法は一般化されたものであり、地域が限定的であれば特殊な技法と言うことになる。さらには技法の違いがろくろの構造そのものにまで影響を及ぼすことがある、ということも解かった。

第2節 作業痕と技法の解説

こうした事例を検証する前に、その前提として確認しておかなければならないことがある。ここで問題にしているのは手引ろくろの技法であり、手引ろくろに残された痕跡（作業痕）である。しかし、その手引ろくろは明治時代の半ば、遅くとも大正時代には役割を終えており、地域によって前後するが、およそこのころまでに足踏みろくろ或いは水車ろくろに移行している。つまり、手引ろくろの技法は明治、大正で伝承が途切れてしまったということである。各地を調査しても手引ろくろの作業経験者は勿論、先代の作業を見たことがある、と言う人ですらまず出会うことはない。作業に関する話を聞いたという人に出合えば幸運である。

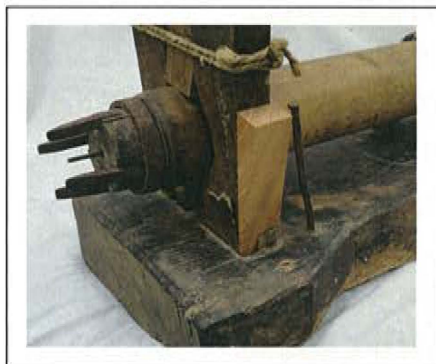
そこで作業痕から技法を解説する方法であるが、極めて限られた聞き取り情報のほかは作業の記録写真、描かれた図像が重要な手掛かりとなる。そしてあとは乏しい作業経験から

の推測に頼らざるを得ないのである。⁽²⁾ そうした事情を踏まえた上で、以下に個別の技法とろくろに残された痕跡についての考察を行いたい。なお、地域別の資料概要の中で一部検討済のものについても技法と作業痕というテーマで再度ここに含めた。さらに後半は、挽物製作技術からろくろ製作技術に広げて検討する。それについても経過を窺う痕跡があったからである。

痕跡 1) 支柱基部に残る一本の釘（角棒）（[写真A]参照）

この釘については地域を問わず国内広く見られる特徴であるが、ないものも存在するのでその技法の違いが興味ある問題である。（「手引ろくろデータ比較一覧表」参照）

釘の位置はどの資料においてもほぼ同じで、爪に向かって右側の支柱の根元斜め後方に決まっている。釘の形状は和釘もしくは細い角棒がほとんどで資料の古さを窺わせる。⁽³⁾ 少し内側に傾いているものも多く、また釘が抜けて欠損して、穴だけが残っているものも見られるが位置は同じである。複数の痕跡が残る場合もある。



〔写真A1〕 No.60 宮崎県五ヶ瀬町 個人蔵

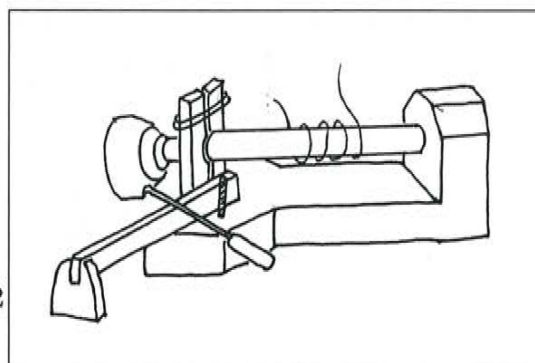


〔写真A2〕 No.52 鳥取県三朝町栗祖

<技法の解説 1>

ろくろ鉋を加工材に当てて切削作業をする場合、必ず鉋の一部を安定した台状の道具に預けて刃先を安定させなければならない。このための台として鉋台、鉋マクラ、ウマ、ウシ等地方によって様々に表現するが、ほぼ似た形状のものを使う。（[写真 F 1~3]参照）

これらはいずれも簡単な脚が付いていて自由に位置を決められるが、加工材の側面から底面にかけて鉋を当てようとするときは、ろくろ本体の台が邪魔になって思うような位置に鉋台を置くことが出来ない。この場合に、片方にのみ脚の付いた棒状の道具を使い、もう一端をろくろの台に渡して作業をする。この棒を受ける位置が丁度支柱の基部にあたり、そこに棒がずれないように受けの釘を打つことになるのである。これは作業の様子を撮影した写真によって読み解くことができた。（写真は糸魚川市大所木地屋の記録から）



痕跡2) 支柱中ほどにある凹み、切込み痕

これも地域に関係なく多くのろくろに確認される痕跡であり、技法としては広く行われていた一般的なものと思われる。ただその痕跡が明瞭であるもの、かすかに認められるもの、二段になっているもの等々、痕跡の状態にはばらつきがある。([写真B]参照)



[写真B1] (左)

No. 43 茨城県大子町 (個人蔵)

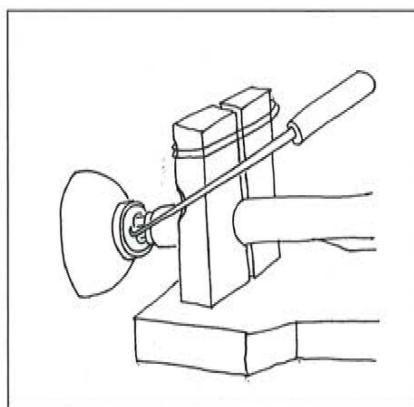
[写真B2] (右)

No. 58 石川県能登町 (福正寺蔵)

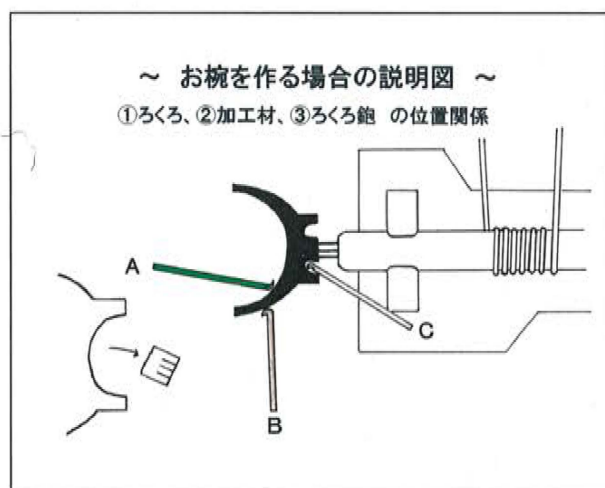
<技法の解説2>

これについては記録写真も図像もなく推測によらざるを得なかったが、技法としてはお椀などの小さな器の高台の中を削る際に、支柱を鉋台として使ったものと考え。爪のすぐ際を削るには向きや角度との関係からこれ以外の場所は考えられないからである。(推定作業図を参照[図C]) この推測についての現代のろくろ職人の見解は、「ありうることだ」というものであった。なお、爪に取付けた痕の部分が高台の中央に残るが、これはろくろから外して別の刃物で削り落とす。

[図C]



(左) 支柱の凹み(切込み)にろくろ鉋を押し付けて安定させて、材料に刃を当てる。これによって細かな成形ができる。特にこの場合は、高台の内側を削る作業である。



(右) ろくろでお椀を挽く場合のろくろ鉋の位置を示す。支柱をろくろ鉋の固定に使う場合の位置関係を「C」で示す。爪の痕がついた凸部は、ろくろから外して専用のノミで削り落とす。

痕跡3) ヨコ受型軸受の上の凸凹（ろくろ鉋の技法が構造を変えた事例）

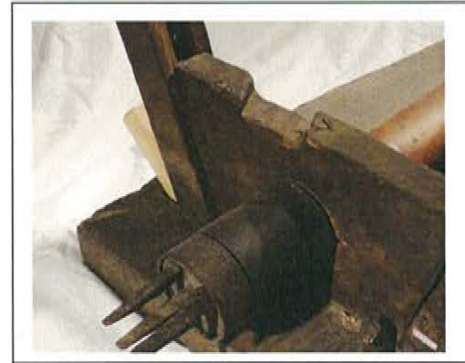
これは東北にのみ見られる極めて限定的な技法であるが、1)、2) 同様にろくろ鉋の使い方が、ろくろそのものに影響を及ぼして基本構造まで変えてしまった実にユニークな事例として再度取り上げたい。

これも基本的にはある方向からろくろ鉋を当てようとするときに、その位置を確保するために生まれた技法であるが、それが実にユニークな結果を生み出したということだろう。

この技法によって残された跡は、作業痕というより一つの様式になって定着し独特の形態を作り出した。その第一がヨコ受型ろくろの軸受板上部に見られる段差もしくは切込みである。そして次の段階として、ろくろの基本構造である支柱を直立からV字に開く変形をもたらしたのである。〔写真 D〕を参照）



〔写真 D1〕



〔写真 D2〕

＜技法の解説3＞

岩手県二戸郡旧浄法寺町、旧安代町におけるろくろ技法では、鉋台として「渡し棒」（浄法寺）、「腕木」（安代町）と呼ぶ棒を使っていた。この棒の使い方を示す写真が残されており、そこからろくろの軸受の上に刻まれた不思議な凸凹の意味が解かった。

（下の二点の写真参照）



（左）八幡平市博物館の展示パネルより



（右）二本目のウデ木の位置が軸受の上板に預けられている。

ここでもポイントは加工中の器の側面から底面にかけてろくろ鉋を当てるときである。正面削りの時は適当なマクラ状の材二個に腕木（渡し棒）を渡しているが、側面・底面を削るときは腕木（渡し棒）の一端をマクラ状の木に、もう一端をろくろ本体の軸受の上の棧木に預けているのである。この時、棒がずれないように「受け」として切込み（段差）を付けたものが、不思議な凸凹に見えたのである。さらに恐らく器の大きさによって棒の位置をずらす必要があつてのことと思われるが、段差（または切込み）を二個・三個刻んだものもある。そしてこのスペースを確保するために支柱をV字に開くことになり、ついにろくろの構造まで変えてしまったのである。（詳細な説明は第Ⅲ部第1章東北地方第5節を参照）

痕跡4）ろくろ製作の作業痕（台前方の木口に残る二個の四角い削り痕）

これはろくろ作業の痕跡ではなく、ろくろを製作した時の作業痕と判断したものである。今までの調査の中で、ろくろの台前方の木口に意味の解らない不思議な痕跡があるものはいくつか出合った。当初は気にも留めず深く考えなかったものだが、岡山県旧上斎原村赤和瀬の資料を作図してその意味を読み解くことが出来た。このことについて以下に整理して述べるが、あくまでも事実を確認したわけではないことを断っておかねばならない。手引ろくろの伝統的な製作技法を知っている人は恐らく現存しないと思われるからである。

どのような痕跡なのかを写真で示し、次に図によって説明したい。まず、こうした痕跡を持つ資料で、今までに確認できた6例のリストを掲げる。

台帳番号	県名	資料採取地	形 式	台 形	台 長	軸長	軸 径	爪 数
1	新潟	糸魚川市大所	タテ受型	トンボ型	940	755	54	4本平行型
6	新潟	糸魚川市大所	〃	〃	925	701	52	〃
24	岐阜	郡上市寒水	〃	〃	925	738	50	〃
36	岡山	真庭市田羽根	〃	〃	1100	698	70	〃
46	岡山	鏡野町赤和瀬	〃	〃	910	665	62	〃
49	岡山	鏡野町奥津羽出	〃	〃	1020	848	74	〃

この表を見てわかることは、基本構造はすべて同じであること、中部以西の地域であることなどである。



〔調査台帳番号46〕 岡山県苫田郡鏡野町
赤和瀬（木地師の館資料－1）

台の前方木口に四角の
削り痕が2つ確認できる。

←

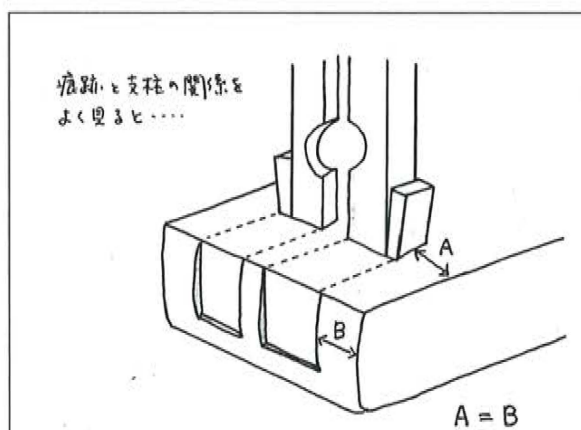


[調査台帳番号 49]

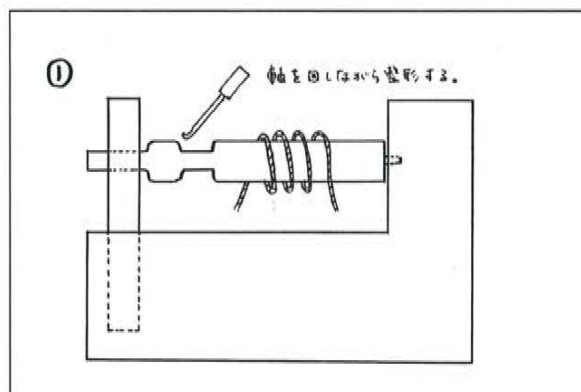
岡山県苫田郡奥津町羽出（奥津歴史資料館）

<技法の解説4>

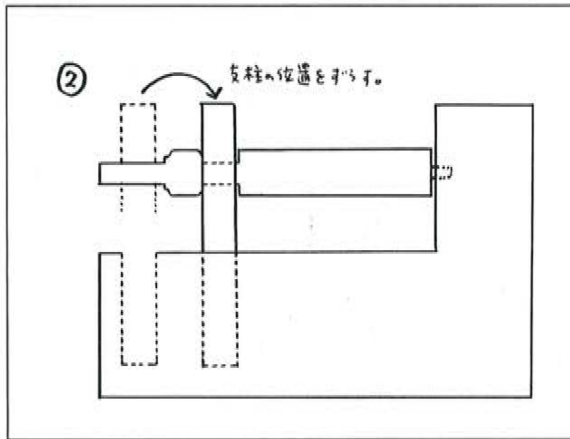
下図のように、四角い痕跡の位置とろくろ本体の支柱の位置を比べてみると、重なり合うことがわかり、これが解説の手掛りとなった。



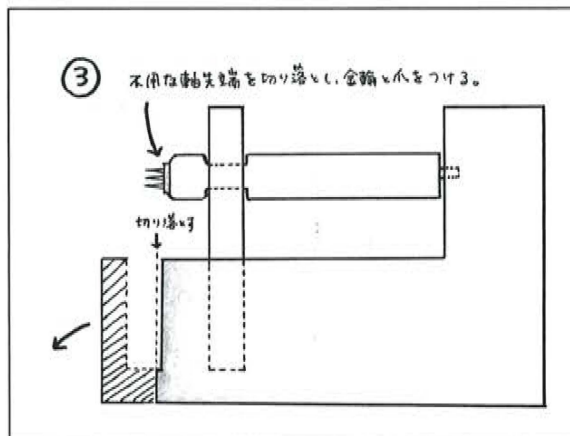
- ① このことから、ろくろ製作過程で軸を作るための作業用の支柱が、現在の支柱の手前に立てられていたと想定した。



- ② 軸本体部と軸受部、軸頭をろくろ鉋で成形した後に、支柱を本来の位置に立てる。
この時の柄穴の幅は作業用の穴とまったく同じで、位置のみを少し内側にずらす。

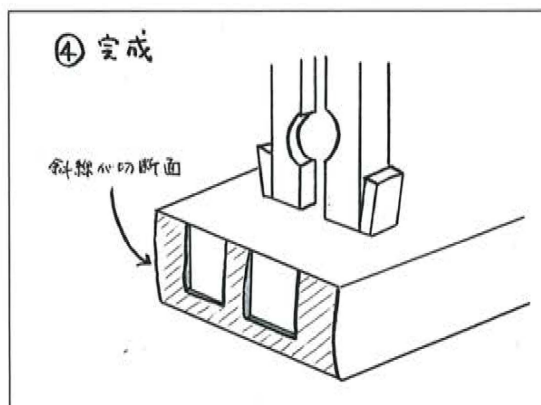


- ③ 作業のために長くのばしてある軸先端部を切り落とし、爪を取り付ける。作業用の柄穴の内側の壁を利用して、他の部分を切り落とす。



- ④ 鋸を使わずにチョウナ（手斧）のみで成形している場合、台の不要部分を切断する為には、柄穴の内側の壁を利用することが効率的であったと思われる。その結果、台の木口には柄穴内壁の形が痕跡として残ることになった。↓ 【調査台帳番号 4 9】 岡山県苫田郡奥津町

（奥津歴史資料館）



以上がろくろの製作過程を想定して考えた「二つの四角」の痕跡の解説である。長い歴史を持つ木地屋の歴史の中で、その主要道具であるろくろの製作方法を記録したものがないのだろうか、という疑問は当然あるだろう。しかし、様々な木地屋文書が各地の木地屋の旧家に残されているにもかかわらず、ろくろ製作に関する記録と言うのは聞いたことがない。代々続く木地屋の家系の中で、敢えて製作マニュアルというものは必要なかったということだろう。

痕跡5) ろくろ製作の作業痕その2 (ろくろ軸先端の木芯及びその中心の穴)

ろくろの軸の先端には加工材を取り付けるための爪が付いており、ほとんどが3本か4本のいずれかである。そして4本爪の場合、爪の取付部の中心に小さな木軸の芯(突起)が残されているものがある(爪数および木芯の有無については「手引ろくろデータ比較一覧表」参照)。この役割についてはよくわかっていないが、ここで問題にしたいのは、その木芯の中心に小さな穴が開いている場合があり、その意味についてである。事例としては「糸魚川 1947 (台帳番号3)」がある。

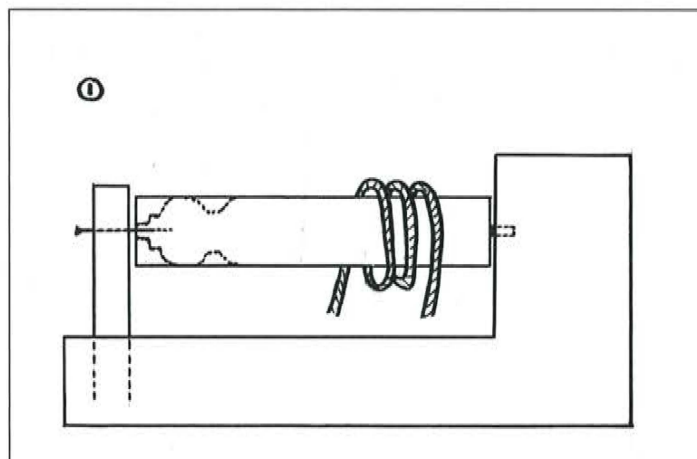
(写真左) No. 3の軸頭、爪の間に
木芯が見える。

(写真右) 木芯の中央の穴



<技法の解説5>

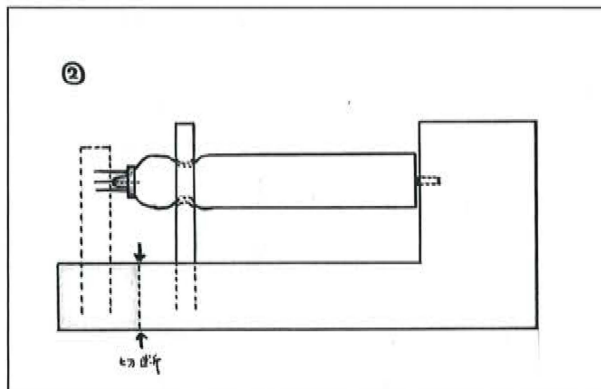
ろくろ軸製作の作業痕と考え、その根拠について説明したい。既に述べてきたことであるが、ろくろと言う道具で一番重要であり、精巧な細工が求められるのは軸である。この軸をどのようにして製作したかは、先述のとおりマニュアルはないが、西欧の原始的な旋盤作業の図像などをヒントにいくつか考えられている。最も簡便な方法は二台のろくろを向かい合わせて使う方法で、これは佐藤友晴の文献にも紹介されており、⁽⁴⁾ 旋盤で椅子の脚等を製作する場面を想定すれば理解できるだろう。要は棒状の材料の両端を回転可能な支持体に取り付けて引綱によって回転を与える方法である。これを簡略化し、結局4)の技法と原理的には同じことになるが、一端をろくろに取付け、もう一端を丸釘状の金具で支持体に固定する方法である。([図 E]参照)



[図 E]

①台の前方に作業用の柄穴を掘り、簡単な支柱を一本立てて材料の端に丸釘を通す。

綱を引いて材料を回転させ、軸の形を成形する。



②軸の成形が終わったら、台に支柱を立て、軸受に軸を組み込む。作業用の支柱と不要な台前端部を切り落とす。

軸の先端には、丸釘を通した穴が痕跡として残る。
(この場合の柄穴を利用した切断の痕跡は確認されていない。)

第3節 痕跡から判明した技法（まとめ）

ここまでろくろに残された痕跡から技法を探る試みについて述べてきたが、その過程で判明した様々な技法についてここで整理しておきたい。手引ろくろが使われなくなって既に一世紀が過ぎ、それらの技法は過去のものとなっている。もとよりその技法にしても写真や図像で確認できれば幸運であるが、推測による部分が大きいことも既に述べたとおりである。そのことの当否も含めて、もう一度整理し検証しておきたい。

まず1)から3)までは、すべてろくろ鉋の当て方の技法に関するものであった。それは、単純な加工材を回転させる機能しか持たないろくろに向かって、それぞれの製作物によってどのようにろくろ鉋を扱うかは木地屋にとって最も本質的な技術であったことを物語っている。それを整理すればおおよそ次のようになる。

ろくろと刃物の関係についての考察

(1) 挽き物(お椀など)を作る作業に必要なもの

① 材料を回転させる道具 = ろくろ

② 材料を削る道具 = ろくろ鉋

これだけでは挽き物作業はできない

③ ろくろ鉋を支持・固定する道具 = 鉋台

*** 刃物と加工材との関係(距離・角度)を決める大事な道具**

地方名が多い…ウマ(新潟県糸魚川)、ウシ(福島県会津・神奈川県箱根)、
渡し棒(岩手県浄法寺)、アテ(茨城県大子町)
ほかに鉋マクラも

24

(2) 鉋台分類の試み

① 独立型・・・ウマ、ウシ、アテなど

横棒に足をつけたもので、作業に応じて位置を自由に変えて使う。

② 半独立型(一部ろくろ本体)・・・渡し棒

ろくろ本体に棒を差しかけて、刃物の支持・固定に使う。
1～2本を組み合わせる場合も。

③ ろくろ本体利用型・・・支柱などに鉋を押し付けて固定(痕が残る)

器の底面、糸尻を削るときにろくろの支柱を支持具として使う。

25

以上の整理分類を確認したうえで若干補足したい。

鉋台の①独立型の具体例として、以下に三例の写真を掲げる。

[写真 F1] [ア テ]



(茨城県大子町 大蔵家蔵)

[写真 F2] [ウ マ]



(滋賀県旧貫井町

滋賀県立琵琶湖博物館蔵)

[写真 F3] [不 詳]



(秋田県旧皆瀬町木地山

滋賀県木地屋民芸品展示館蔵)

②の半独立型には、台に釘を打って差し掛けるものと、軸受の上板に差し掛けるものがあり、前者は痕跡1)の例、後者は痕跡3)の例になる。③の本体利用型は痕跡2)の場合である。

次にろくろ製作技術については、挽き物製作技術以上に未解明であり記録のない分野である。実はろくろを誰が作っていたのか、それすらはっきりしたことはわかっていない。勿論ろくろ制作工房がどこかにあって全国の木地屋に届けていたというような話は一切ないわけで、木地屋自らが作っていたことは間違いない。ただ、ろくろは今に残された資料を見てもかなりの年月を使い継がれてきたことを窺うことができ、その更新のサイクルは相当長かったのではないだろうか。場合に寄ったら生涯に一度もろくろを新調せずに、先代のものを使って済ませた、と言う木地屋も居たのかもしれない。そうした中でどのように技術を伝承したのか。これらの事はすべて仮定のことではあるが、詳細は不明と言うほかない。ただ、ろくろは移住の時の持ち運びのスタイルを考えても、一つのろくろの中にパーツごとに製

作年代が異なるということはあることである。台は移住するときには処分して、軸のみを持って移動し、移住先で台を作るということが行われていたからである。また、製作物に応じて軸のみを径の大きなものに取り換えたということもあったというから、そういう意味では支柱なども含めて部分的な更新の機会は結構あったのかもしれない。勿論分家を出すときに一台新調するということもあっただろう。そういう機会をとらえて代々技術が伝えられたのではないか。ただ、それらが製作マニュアルとして記録に残されるということにはなかった。

その関連では現代の刊行物でろくろ製作マニュアルがあった。『琉球漆器製造技術』で、⁽⁵⁾ の中には加工材取付用の爪の作り方から刃物台（ウシ）の作り方まで詳細に説明されていて、ある意味で新鮮な驚きであった。翻って考えてみれば伝統的な職人の技術に関しては、マニュアルというものは外からの技術を摂取し新たな技術として定着させる場合に必要とされるものなのかもしれない（第Ⅲ部、第5章、第3節沖縄地方のろくろ参照）。その意味では木地屋にとってろくろは常に内部技術であって、外に向かって広める技術ではなかった。このことはまた技術の系譜のところで考えてみたい。

第Ⅳ部－第1章〔注〕

(1) 木地屋は伝統的に自らが使う鉋は自分で日々打ちなおさなければならなかった。

それは職人としての心構えと言うようなことではなく、刃先の構造上そうせざるを得なかったということである。従ってろくろ作業場の隅には必ず炉と鞆があり、小さな金床が備えられていた。

なお、職人は自分の使いやすい刃物をそれぞれ工夫する、と言われているがろくろ調査の折に目にする刃物は意外と一定のパターンにおさまっている物がほとんどであった。ろくろの地域差ほどには刃物の地域差が認められなかったといってもいいかもしれない。ただ、ろくろに着目するあまりおろそかになってしまったのは、刃物の呼称について確認しなかったことである。つまり刃物の形状よりもむしろ呼称の方に地域差があり、系統を窺う手掛かりがあったと思われるからである。今後の課題としたい。

(2) 筆者は30代後半に木地屋の古老よりろくろ作業（電動ろくろ）の手ほどきを受け、刃物造りから挽物技法まで伝統的な作業を一通り経験することができた。初級研修のレベルだが現在の研究に多少なりとも役立っていることは間違いない。

(3) まれに洋釘を打ってある場合もある。（洋釘の我が国における普及は明治10年代末と言われている。）

(4) 佐藤友晴 1961『蔵王東麓の木地業とこけし』p189

(5) 沖縄県伝統工芸指導所 1982『琉球漆器製造技術』＝切削技術（挽物）＝ No.4

タイトルの通り挽き物技術の解説書で、様々な用具の使い方から作り方まで詳細に説明しており、中には刃物台（ウシ）の作り方やろくろ爪の作り方まで書かれている。

第2章 地域間の相関について

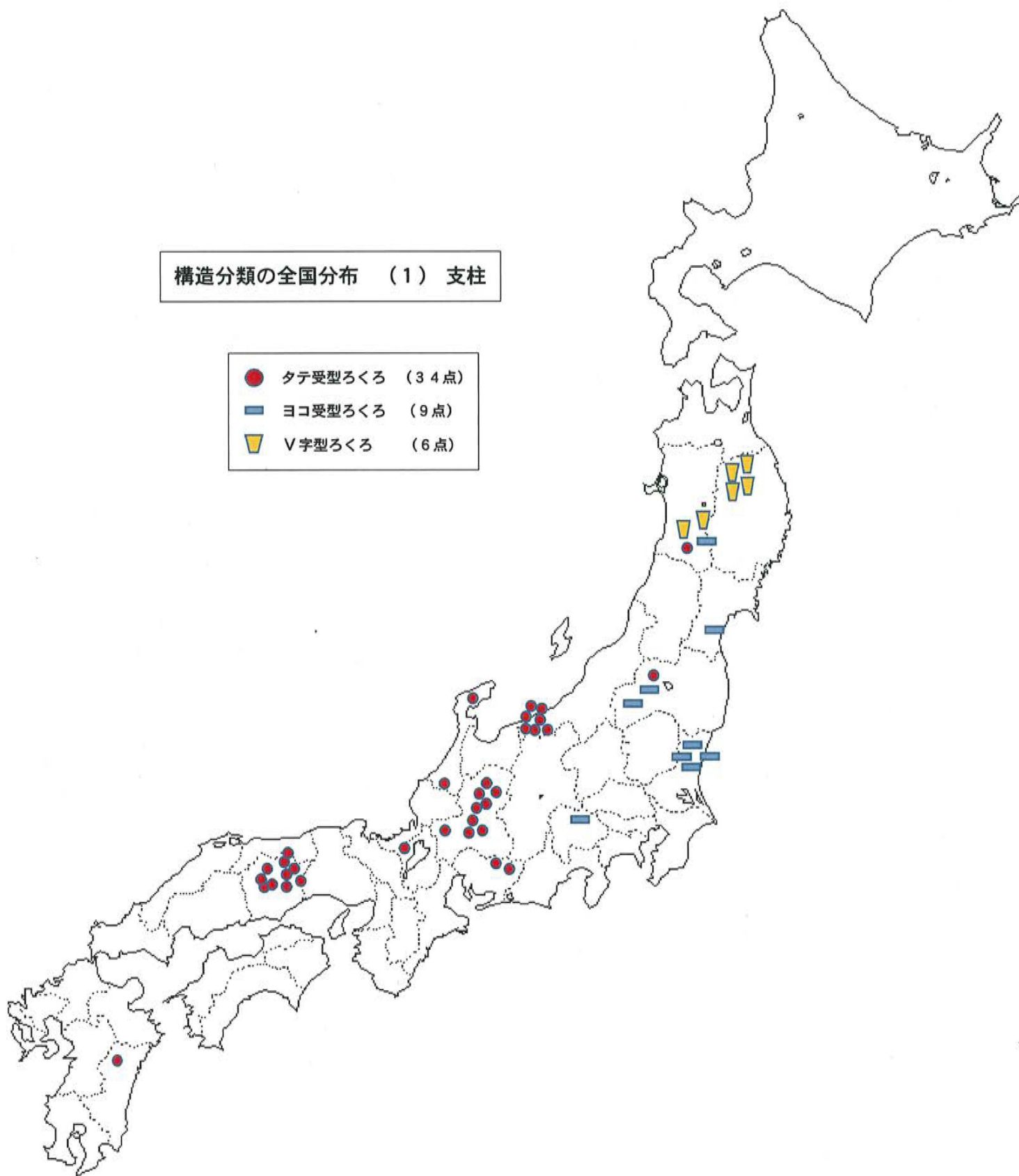
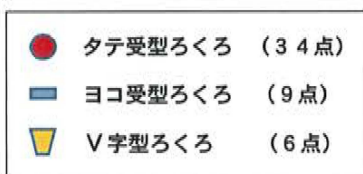
第1節 分布図作成の趣旨

本節では、第Ⅲ部の各章でみて来た地域ごとの資料の特徴を全国的な視点で比較検討してみたい。その為の手法として民俗分布図を作成し、地域的な分布の様相を視覚的に捉えて論ずることとした。地図に落とすデータは「手引ろくろデータ比較一覧表」の項目から主な項目を選び、その項目ごとに1枚の地図を作製することとした。

まず、基本的な前提となる条件について述べておきたい。作成するのは木地屋が使っていた道具、手引ろくろの構造に関する分布図であるからいわゆる民俗分布図といってもかなり特殊なものになる。資料の各部材に残る痕跡から、微妙な技法の違いまでかなり細かく分けて分布図を作成したが、これは構造の地域的な差異から技術の系譜を探るという研究目的に即したためである。その一覧を示せば次のようになる。

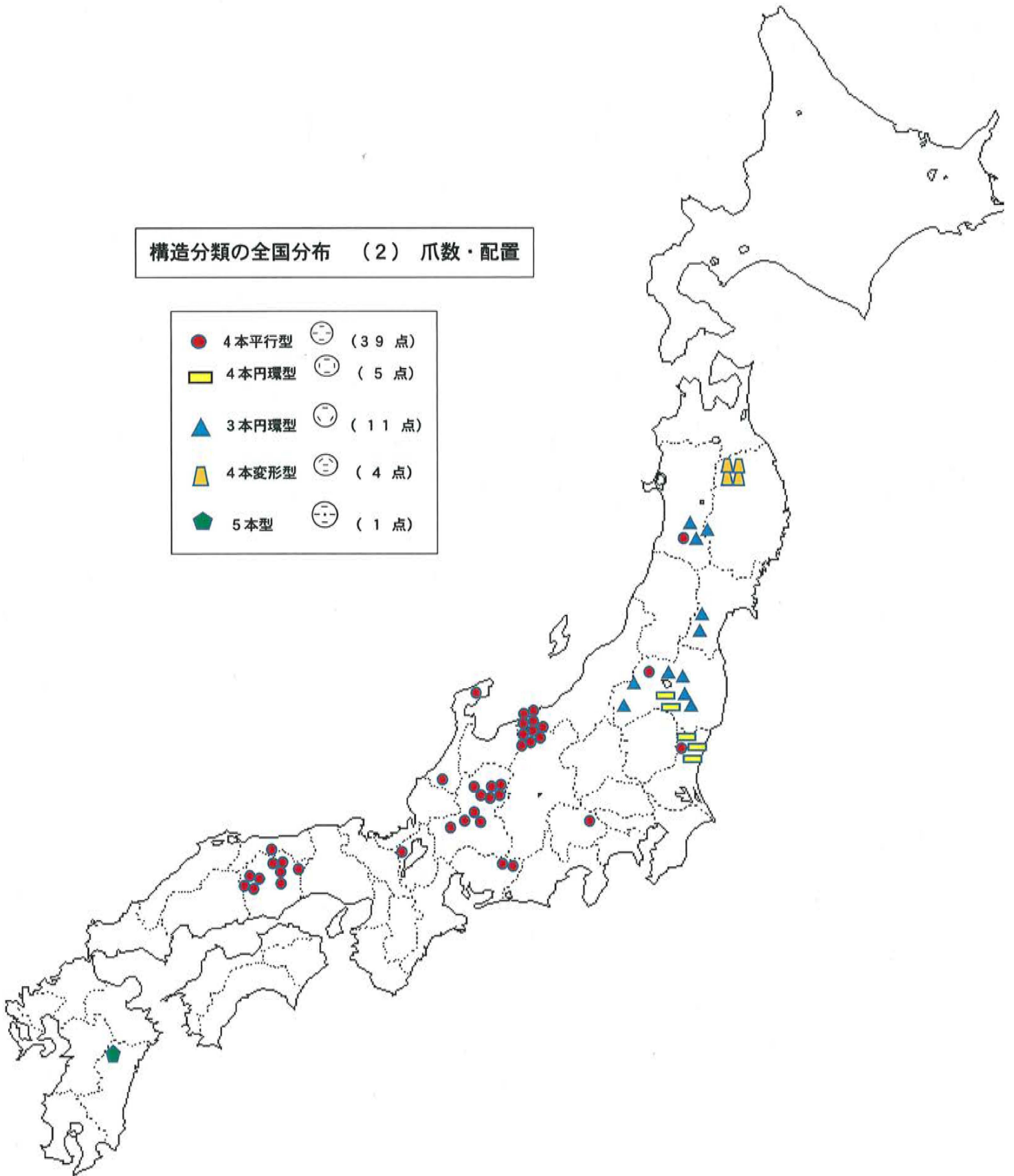
- ① 支柱＝ろくろの二大類型である「タテ受型」と「ヨコ受型」に、ヨコ受型の変形である「V字型」を加えた三類型について全国の分布状況を示した。→【分布図1】
- ② 爪数と配置＝ろくろ軸の先端には加工材を取り付けるための爪があるが、その数と配置は地域によって異なることから、その状況を示した。軸のみの資料も対象に含めたことから標本数は最も多い60件となった。→【分布図2】
- ③ 台形＝台の形にもいくつかのパターンがあり、その分布状況を示した。→【分布図3】
- ④ 支柱下の釘＝これは作業痕の有無を示すもので、挽物技法の地域差を浮かび上がらせる事を狙った分布図で、技法の解説は前節で述べた。タテ受型、ヨコ受型のろくろの類型別分布図をベースにしているので、どのタイプにこの技法が多く使われていたのかも示すことが出来た。→【分布図4】
- ⑤ 支柱の切込み＝これも同じく作業痕の一つである。その技法がどの程度の広がりを持って行われていたかを見るためのものである。→【分布図5】
- ⑥ 軸型＝これはろくろ軸の形態的分類を地図に落としたもので、「円柱型」、「ツバ型」、「その他」の3分類を表示した。→【分布図6】
- ⑦ 軸受に中ツバあり＝ある特殊な構造が地域的にどのような広がりを持つか、を確認するための分布図である。その構造とは、軸受部に見られるツバ型の細工で、恐らく回転の正確と円滑を狙った構造とみられるが精巧な細工であり、一つの技術的特徴ととらえた。→【分布図7】
- ⑧ 軸頭の木芯＝これは何のための物かは不明であるが、かなりの数のろくろ軸の先端に見られる特徴であり、逆にその分布状況から何らかの手掛かりが得られないかと考えて図化した。そのセンターには穴が残るものもあり、製作技法の痕跡とも考えられる。
→【分布図8】
- ⑨ 後部軸受の特徴＝ここでは二つの特徴を合わせて表示した。極めて地域的で特殊なものであり、二つの相関を見るというより、それぞれの地域的広がりを確認するための

構造分類の全国分布 (1) 支柱



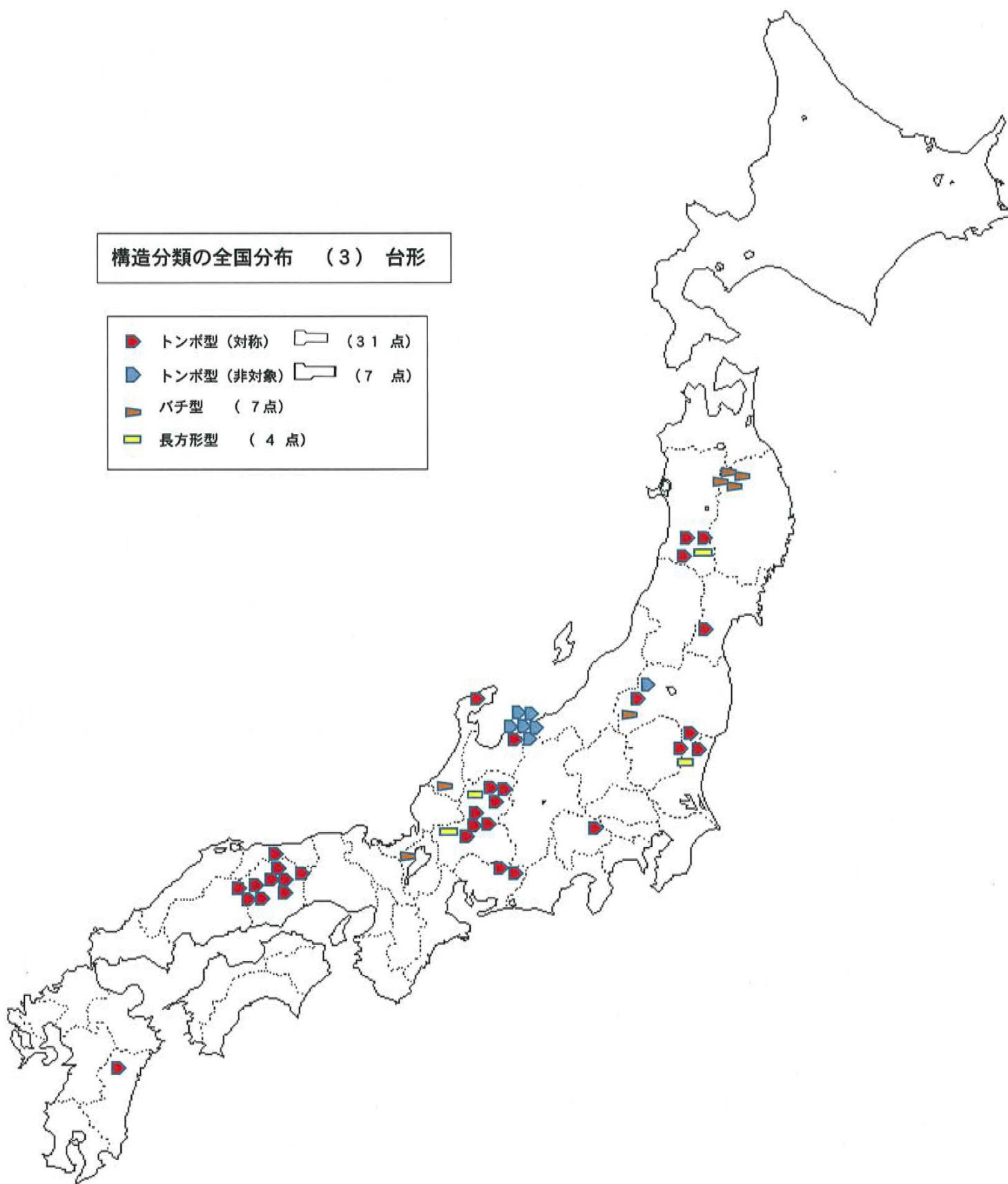
構造分類の全国分布 (2) 爪数・配置

- | | |
|---------|---------|
| ● 4本平行型 | ☹ (39点) |
| ■ 4本円環型 | ☹ (5点) |
| ▲ 3本円環型 | ☹ (11点) |
| ▲ 4本変形型 | ☹ (4点) |
| ◆ 5本型 | ☹ (1点) |



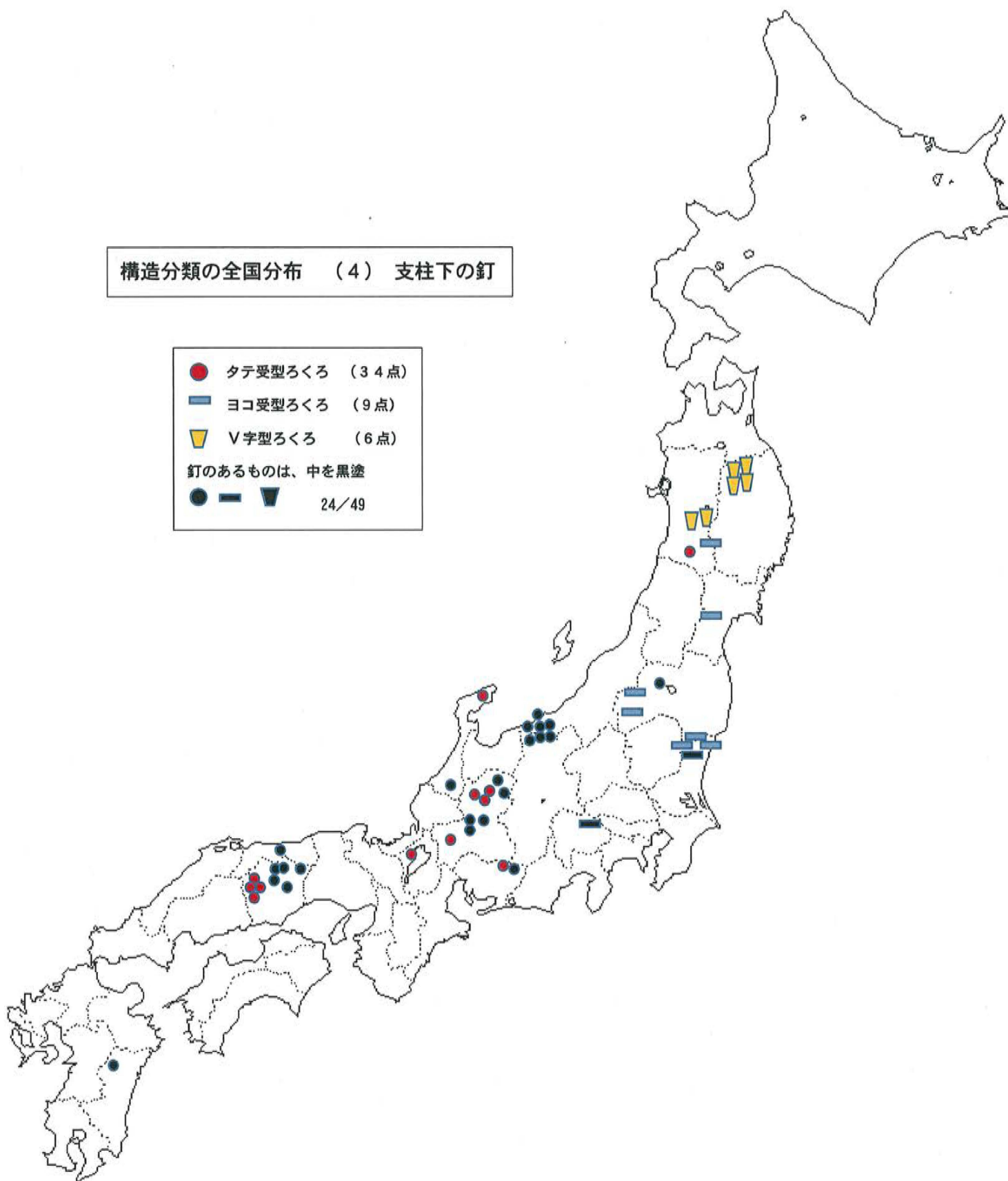
構造分類の全国分布 (3) 台形

- | | | | |
|---|------------|---|--------|
|  | トンボ型 (対称) |  | (31 点) |
|  | トンボ型 (非対象) |  | (7 点) |
|  | バチ型 | | (7 点) |
|  | 長方形型 | | (4 点) |



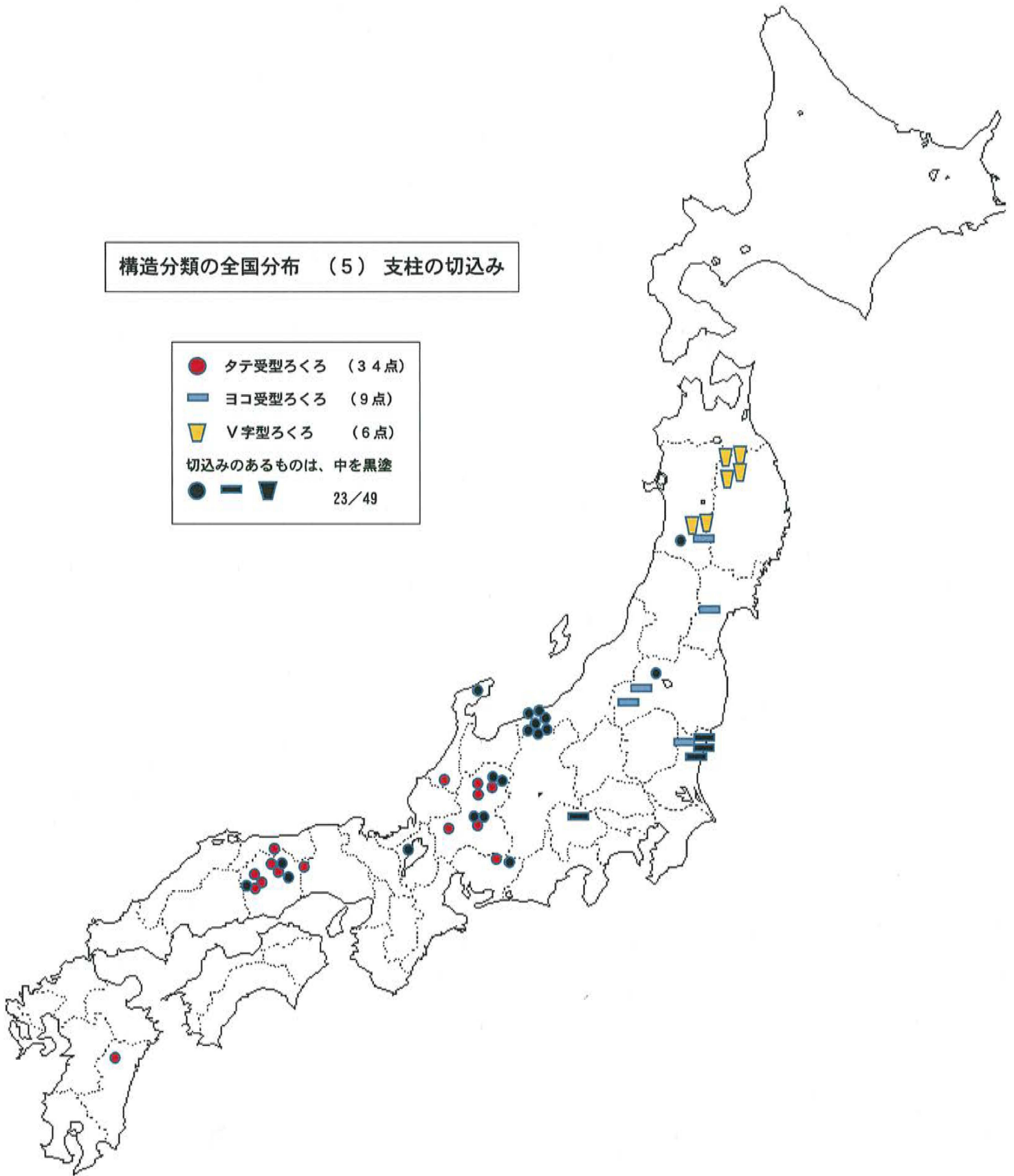
構造分類の全国分布 (4) 支柱下の釘

- タテ受型ろくろ (34点)
 - ヨコ受型ろくろ (9点)
 - ▼ V字型ろくろ (6点)
- 釘のあるものは、中を黒塗
- ■ ▼ 24/49

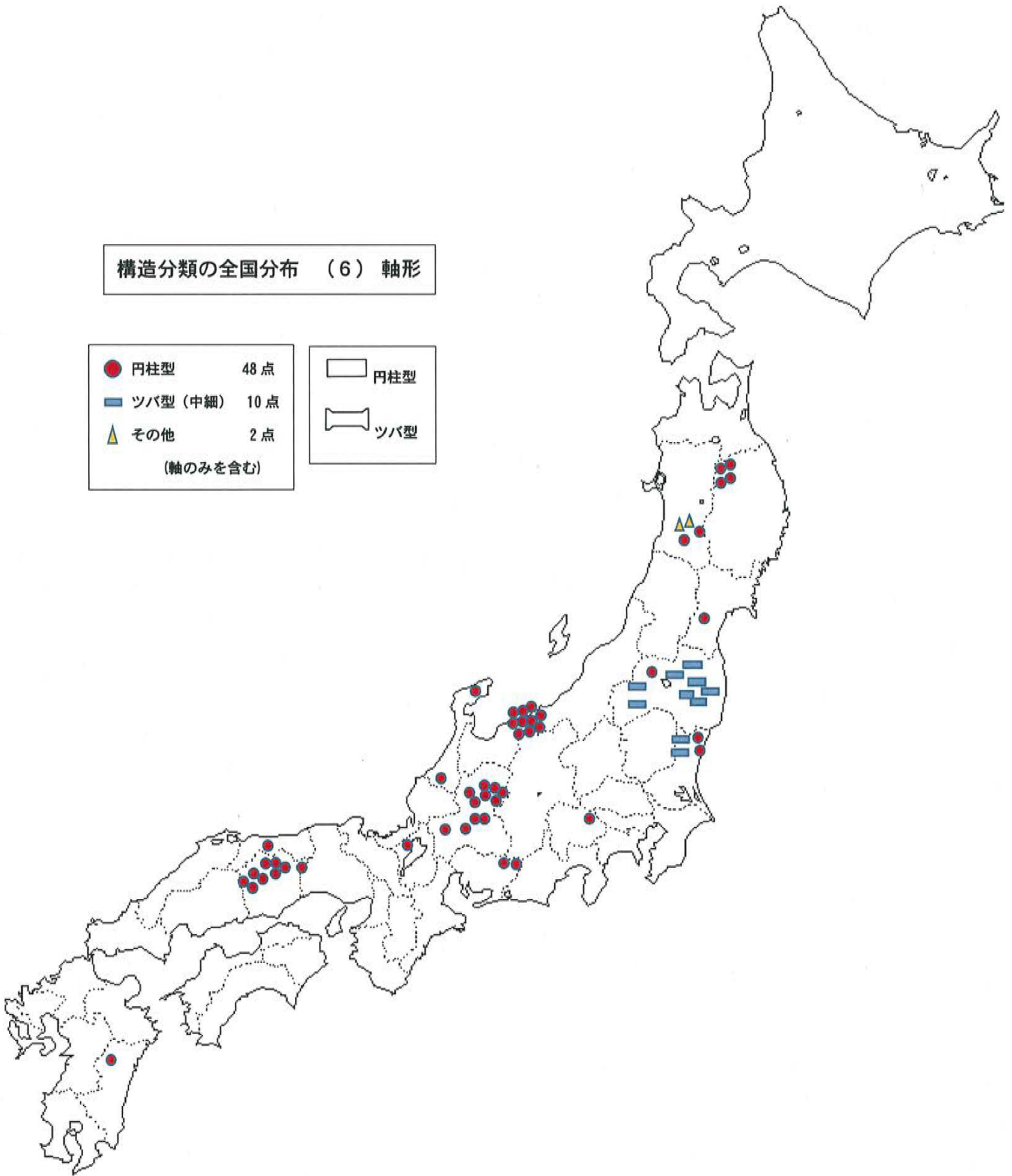
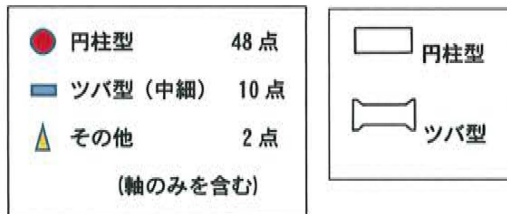


構造分類の全国分布 (5) 支柱の切込み

- タテ受型ろくろ (34点)
- ヨコ受型ろくろ (9点)
- ▼ V字型ろくろ (6点)
- 切込みのあるものは、中を黒塗
- ■ ▼ 23/49



構造分類の全国分布 (6) 軸形



構造分類の全国分布 (7) 軸受に中ツバあり

- タテ受型ろくろ (39 点)
- ヨコ受型ろくろ (15 点)
- ▼ V字型ろくろ (6 点)
- (軸のみを含む)
- 中ツバありを 黒塗り表示 (計 9 点)



構造分類の全国分布 (8) 軸頭の木芯

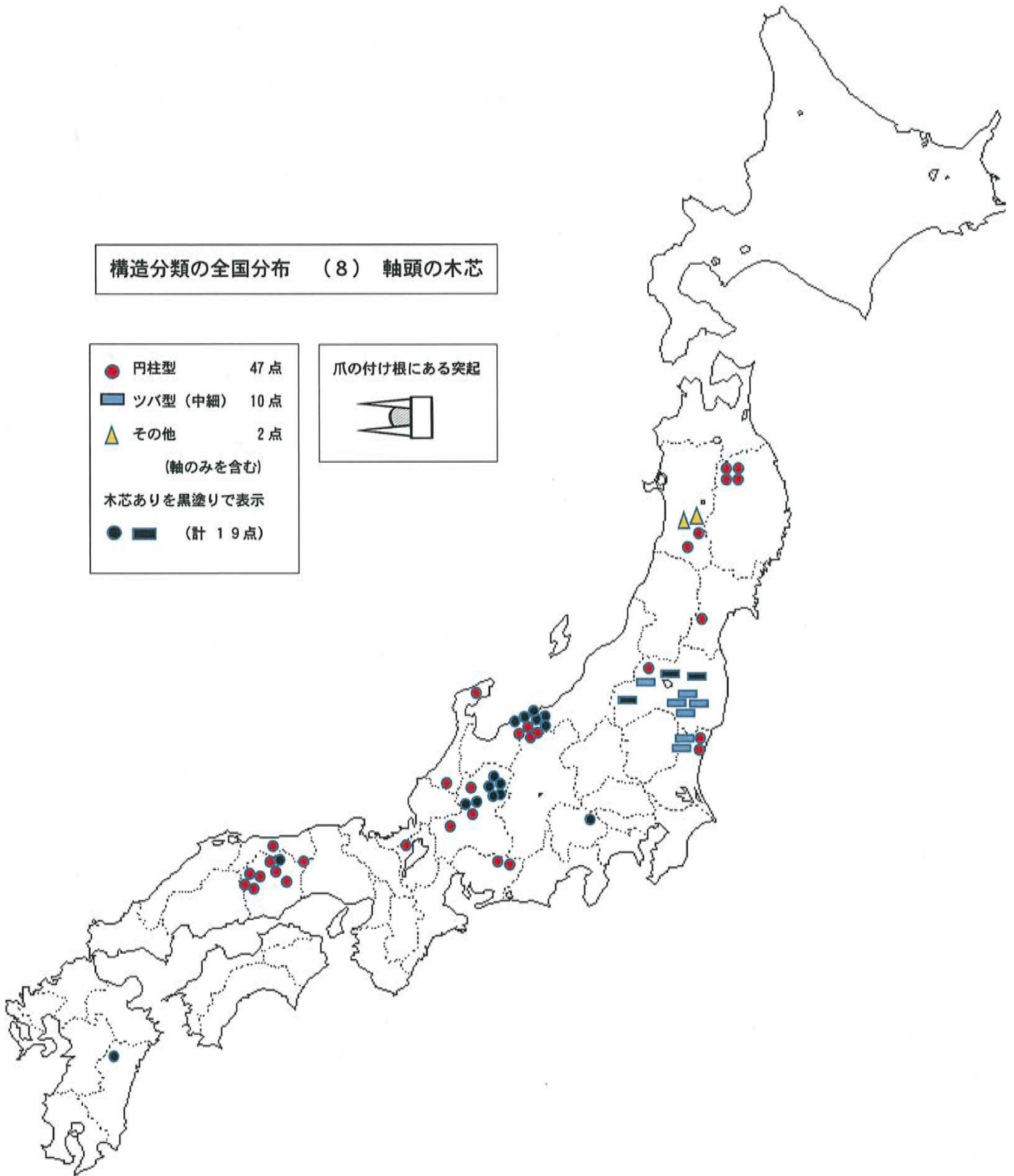
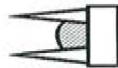
- 円柱型 47 点
- ツバ型 (中細) 10 点
- ▲ その他 2 点

(軸のみを含む)

木芯ありを黒塗りで表示

● ■ (計 19 点)

爪の付け根にある突起



構造分類の全国分布 (9) 後部軸受の特徴

● タテ受型ろくろ (34点)

■ ヨコ受型ろくろ (9点)

▼ V字型ろくろ (6点)

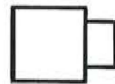
(1) 黄銅片使用のものを黄色で表示

● ■ ▼ (計7点)

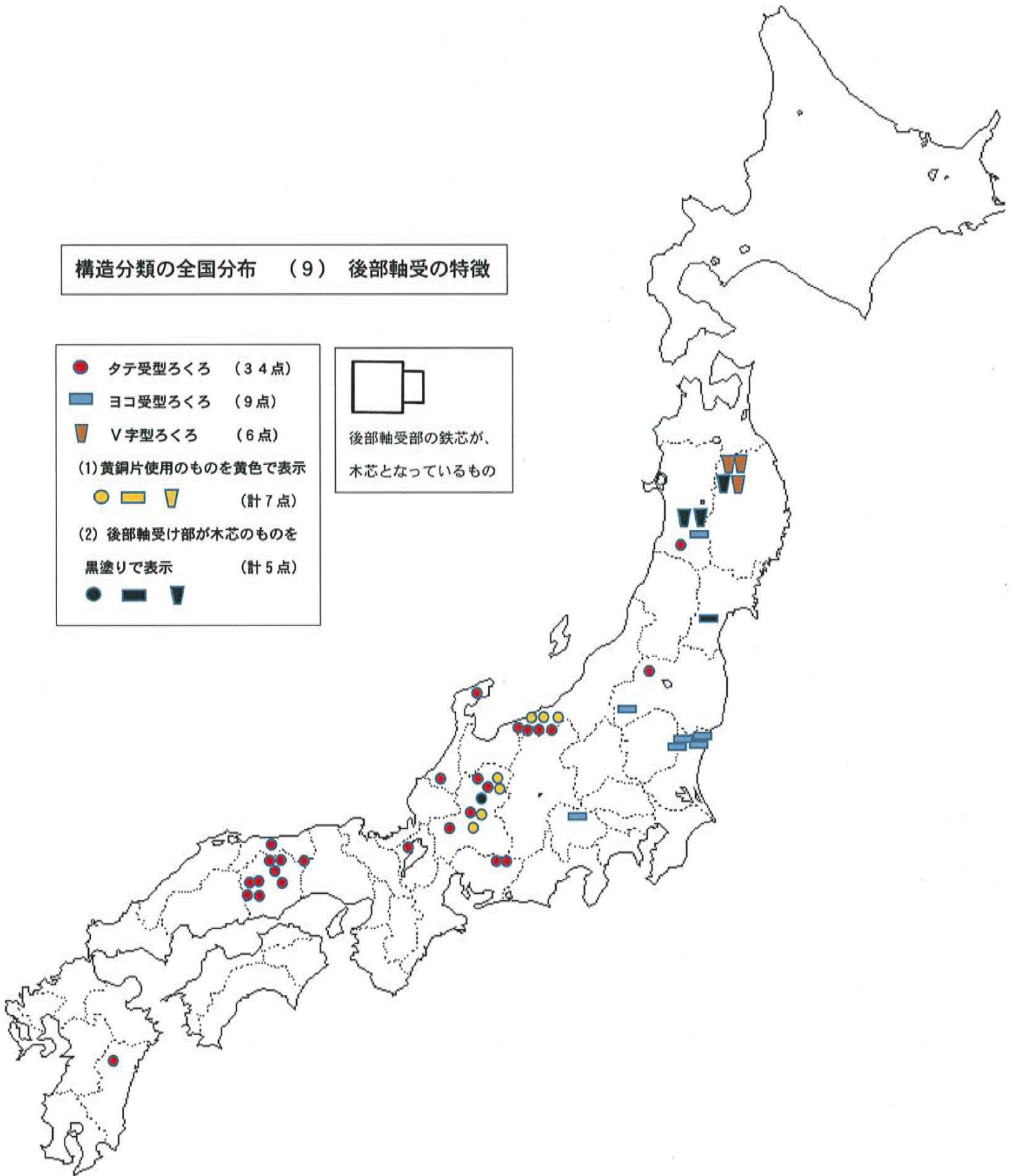
(2) 後部軸受け部が木芯のものを

黒塗りで表示 (計5点)

● ■ ▼



後部軸受部の鉄芯が、
木芯となっているもの



図化である。→【分布図9】

以上が分布図作成の図化項目のすべてである。また付け加えればこれらの基礎データの出所はすべて「手引ろくろデータ比較一覧表」であるが、その標本数は項目ごとに対象となる資料が異なることから、すべてが一致するわけではない。また研究の基本的な位置づけから足踏みろくろ（手引ろくろからの改良は「手引ろくろ」として扱った）、鉄軸のろくろ、および採集地が不明な資料は除外した。

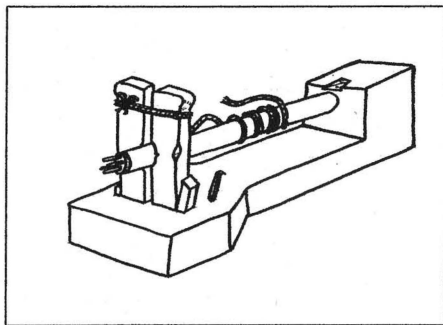
第2節 分布図に表れた傾向を読む

それでは個々の分布図を掲げて、そこに示された地域的な広がりや傾向を読み取る作業に入りたい。

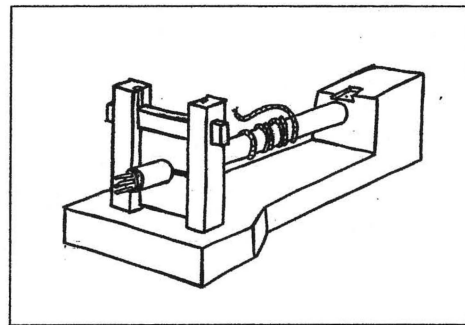
【分布図1】(1)支柱=ろくろの二大類型の分布（タテ受型とヨコ受型）

【項目の説明】（以下【説明】と表記）

ろくろが、支柱の構造で大きく二つに分類されることは、前段でも述べてきたがここで改めてその形を示せば、下図のようなものである。タテ、ヨコの区別は支柱（軸受）の向きによるものである。（V字構造はヨコ受型の変形とみなされる。）



(1) タテ受型ろくろ（概念図）



(2) ヨコ受型ろくろ（概念図）

【分布図作成の目的】（以下【目的】と表記）

ある意味でろくろの構造を二分する基本的な対立の構図が国内レベルでどのような状況を示すかは、ろくろの歴史を探る上で非常に重要な意味を持つと考えた。図像資料について述べたように、それが時間的な先後関係を示すものか、全く系統を異にするものか、いまだ明確な結論を示すことが出来ないことから、何らかの手掛かりになることを期待した。

【分布図に示された傾向】（以下【傾向】と表記）

三つのタイプを凡例のように三つのアイコンで区別して日本地図に表示した。これを見てもまず解ることは、あきらかに三つのタイプが住み分けしていることである。本州の中部を境にして南西側には「タテ受型」のみが分布し九州にまで及んでいる。一方の「ヨコ受型」は本州中部の北東側にだけ分布しており、さらに「ヨコ受型」の変形である「V字型」が東北奥地にのみ、偏って存在している。いずれにしても各タイプが混在していない、ということはそこに何らかの要因があって、そのような分布になったことであり、興味深い検討課題である。

【分布図2】 (2)爪数・配置

【説明】

ろくろ軸の先端に取り付けられている爪は、加工材を軸に固定させる役割を持ち、ここでは5種類のパターンに分類したが、ほとんどすべてのろくろはこのどれかに該当する。最も多いのが「4本平行型」で爪数は4本、爪の先端は短い直線の刃となっており、それがすべて平行（同一方向）に配置されている。これ以外はいずれも少数である。「4本円環型」、「3本円環型」は刃の向きが円周に沿って輪のように配置されているもの。「4本変形型」は3本円環型の中心にもう一本加えて、刃の向きをどれか一つに平行に配置したもの。「5本型」は4本平行型の中心にもう一本加えて、その追加の爪は丸釘状で尖っている。（凡例の図を参照）

【目的】

加工物の種類・大きさを問わずに、ある地域にみられる「爪数・配置」は、その集団の中ではほとんど同一で、複数のパターンが存在するということではなかった。このことから、技術の系統を探る上で指標の一つになりうると考えた。

【傾向】

最大多数の「4本平行型」はほぼ「タテ受型」の分布域と重なっている。同じように「3本円環型」は「ヨコ受型」と重なるが部分的に「4本円環型」が小エリアとして食い込んでおり、「4本変形型」はV字ろくろにのみ見られた。「5本型」は地図では熊本県五ヶ瀬町の資料1点だが、足踏ろくろであることから対象から除いた四国・沖縄の資料にも見られたものである。分布エリアの大小はあるが、それぞれまとまってグループを形成していることが見て取れる。

【分布図3】 (3)台形

【説明】

台形のパターンは大きく分ければ3種類でバリエーションは少ない。しかもその8割近くが「トンボ型」である⁽¹⁾。またそのトンボ型の変形としてT字部が左右非対称のものを別項目としたので地図表示は4種類のアイコンで図示した。トンボ型以外では前部から後方に向かって少しずつ幅が絞られた「バチ型」、単純な長方形の「長方形型」がある。

【目的】

基本的な形はほとんど「トンボ型」で定まっているように思えるが、その中であえて別のタイプが存在した場合、それはまったく別系統のろくろの存在を示しているのではないか。それがどのような分布を示すか確認したい。

【傾向】

まず「タテ受型」のエリアはほとんどが「トンボ型（対称）」「トンボ型（非対称）」と重なるが、それ以外のタイプは分散しており、特に「長方形型」はグループを形成しているとは言い難い。地域遍在の傾向を示しているのは岩手県浄法寺の「バチ型」と新潟県糸魚川市

の「トンボ型（非対称）」である。ただ、どちらも離れた土地にも単発的に存在するのが不思議である。

[分布図4] (4)支柱下の釘

[説明]

本章第1節で論じたようにこれは技法を示す痕跡であり、ろくろの台に打たれた釘の有無を図示するものである。釘の位置は正面から見て右手支柱の基部である。

[目的]

ある技法の痕跡について全国的な分布を把握することは、技法そのものの系譜を地図上に読み取ることになり、木地屋の系譜をダイレクトに反映した情報となるのではないかと考えた。図は「(1) 支柱」の分布図をそのまま下敷きにして、その中で「支柱下の釘」のあるものを黒塗り表示した。

[傾向]

この技法を使っていたのはほとんどが「タテ受型」ろくろを使っていた木地屋であることが解かる。しかしそれが「タテ受型」のすべてではなく、地域的な分布の偏りもあるようだ。また「ヨコ受型」でこの技法の痕跡が見られるのは中部に近いエリアで、東北には全くその痕跡は見られない。

[分布図5] (5)支柱の切込み

[説明]

これも技法の痕跡に着目した分布図である。「支柱の切込み」は正面から見て右側の支柱の角に凹みや切込みによる痕跡が確認できるもので、その意味は前章の第2節で詳述した。

[目的]

前項の目的と同じであるが、技法どうしの相関がどのように示されるかも興味深い。

[傾向]

「タテ受型」では多少の違いはあるものの、ほぼ(4)「支柱下の釘」の分布状況と重なり合う分布を示している。「ヨコ受型」についても同様だが、該当事例が若干増えている。

[分布図6] (6)軸形

[説明]

ろくろの軸の形は地方によって、或いは個別資料によって微妙に異なるものがあるが、いずれにしても円柱を基本として、その径が微妙に変化しているだけのことである。ただ、その径の変化が明らかに或る意図によって形作られ、それが地域的に偏っているとすれば、それは一つのタイプ(型)として捉えるべきものと考え。そういう観点から分類したのが「円柱型」と「ツバ型」である。従って「円柱型」は微妙な変化はあっても大局的に円柱の形をしているものをすべて含めた。「ツバ型」は一目で造形的に円柱とは異なるイメージをもっ

ており、そこに何らかの意図が込められているように見受けられるものである。(凡例添付のイメージ図参照)

【目的】

ろくろの軸が道具全体の中で極めて重要な役割を持つパーツであることは何度か触れてきたが、その軸の形が地方によって明らかに相違する点を技術の一つと捉えて、地域的な広がりを確認したいと考えた。

【傾向】

結果は、類型別に極めて明瞭な分布域を示すことが解かった。全体の8割は「円柱型」で分布域は東北から九州まで広がるほぼ国内全域である。それに対して「ツバ型(中細)」は福島県とその周辺のみ集中している。また秋田県の「その他」は[調査台帳番号 32]、[同 53]の2点で同型のV字ろくろである。そのイメージは例外的で比較項目にも入れなかったが、円柱の後端部に膨らみを持つ独特のものである。

【分布図7】 (7)軸受に中ツバあり

【説明】

通常の軸受部は、段欠き構造といい軸径を軸受部のみ段差を付けて絞り込み、そこを支柱側の半円弧の軸受構造と噛合わせるものである。この「中ツバ型」はその段欠きで絞り込んだ軸の中央にフランジ(ツバ)を作り、支柱側にもそれに対応した細工を施す手の込んだものである。この技法は外見からはわからず、分解してみないと確認できない。

【目的】

事例としては少なく、特殊な形であることは間違いないが、これだけの複雑な構造を作ること自体一つの技術の系統であり、それがどのような広がりを持つか、確認したい。

【傾向】

中部地方に特化した技術であること、一つの集団の中でもこの技術を使ったものとそうでないものが混在すること、ほとんどが「タテ受型」であることが分布状況から見て取れる。同じ中部地方の一角、山梨県に「ヨコ受型」でこの技術を取り入れたものがあつたことは注目される。一方「ヨコ受型」が主流である東北地方にはこの技術は見られない。

【分布図8】 (8)軸頭の本芯

【説明】

ろくろ軸の頭部には材料取付用の爪が付いているが、その爪の付け根中央に軸端が突起状に残っているものがある。丸みを帯びているものがほとんどであるが、先端が平らになっているものもあり、大きさも幅がある。一方こうした突起がまったくない軸も多い。

【目的】

きわめて些細な特徴のようだが、各地で共通してみられるものであり、その役割も不明であることから分布状況を確認したい。

【傾向】

軸に関する特徴であることから、ベースとした分布図は⑥の「軸形」である。ほとんどが中部地方に集中しているが、中国、九州地方にも見られる。一方「ツバ型」の福島県にも見られることから軸形のタイプとは関係のない特徴と考えられる。こうした分布状況からは、それが軸の製作過程で生じた作業痕であるのか、何らかの役割を持つ特徴なのかは残念ながら窺えない。

【分布図 9】 (9)後部軸受の特徴

【説明】

ここでは後部軸受に見られる極めて特殊な二つの事例を一つの分布図に表示した。一つは後部軸受の穴の内壁に黄銅片を張り付ける技法で、これは分解したときに差し込まれていた軸端の鉄芯に緑青（銅に特有の錆）が付着していることで確認できる。ろくろは前後軸受ともに「すべり軸受」であるが、後部軸受のこの技法はメタル⁽²⁾として黄銅を使ったものと考えられる。もう一つは、これも極めて珍しい技法で、後部軸端に鉄芯を使わず、木軸の端部を段欠きに削って径を細くしたものを軸受の穴にそのまま差し込んでいる。当然軸受の内径も大きく、その潤滑とはめ合い精度の調節が難しいと思われる。（「第Ⅲ部 第1章 第2節 秋田県のろくろ」を参照）

【目的】

この二つの特殊技法が、どの程度の広がりを持つのか確認したいと考えた。

【傾向】

まず黄銅のメタル使用については、極めて限られた範囲で行われていた技法であることが解かった。新潟県と岐阜県にしか見られず、糸魚川市大所木地屋で3例、高山市大萱木地屋で2例、郡上市明方（明方歴史民俗資料館）と郡上市寒水で1例ずつの合計7例である。

一方の後部軸受部に木芯を使う事例は、やはり限定的で岩手、秋田、宮城の三県に4例があった。浄法寺のV字型ろくろでは鉄芯が3台に対して1台のみ木芯であった。同じく川連のV字型ろくろでは2台とも木芯構造であった。遠刈田新地では1台で、いずれも東北地方に集中していることが注目される。なお岐阜県高山市の資料[調査台帳番号 11]も木芯であったが、この資料は伝統的手引ろくろとはかなり様子の異なる、おそらく新しい時代の道具として作られたものと考えられ、同列に論じることには躊躇せざるを得ないものである。

第3節 分布図が語るもの

ここまで手引ろくろの構造的特徴から10項目を選び9枚の地図を作成し、国内全体の中でのそれぞれの分布状況を調査データの表示として客観的に見て来た。ここではそれらの地図を比較しながら、分布図の示す傾向や個々の特徴の相互の関係性などについて分析し、そこに資料の歴史的背景を重ね合わせながら、何故そのような分布になったのか読み解いていく。さらにそこから木地屋の移住と技術の系統について解明の糸口を探してみたい。

1) 分布地図の解説

この地図では一つのアイコンが一つの資料を表示しており、それぞれのアイコンは「手引ろくろデータ比較一覧表」の各資料に対応している。この先の考察で地図上のアイコンを取り上げる場合は「一覧表」の左端の「調査台帳番号」(以下[番号]で表記)で示すことにする。

まず9枚の分布図を総体的に眺めて読み取れることは、新潟、長野、山梨、静岡を通る一つのラインを想定した場合、このラインを境界線にして西と東に大きく属性が別れる、ということである。⁽³⁾とりわけ注目すべきは、ろくろの構造の最も基本的な二分分類として挙げた「タテ受型」と「ヨコ受型」が鮮やかに本州を二分したことである。(分布図1)

さらに興味深いことはこの顕著な二分エリアの対立が、他の項目の分布にも表れていることである。例えば「(2) 爪数・配置」ではほとんど(1)と同じ傾向が読み取れる。つまり「タテ受型ろくろは4本平行型の爪」を持ち、「ヨコ受型のろくろは3本円環型の爪」を持つ、ということである。

一方、技法の違いに目を転じて作業痕の分布図を見れば「(4) 支柱下の釘」・「(5) 支柱の切込み」では、どちらもその分布は中部に想定したラインの西側に集中して見られる。このことから「タテ受型」とこれらの技法との強い相関が認められると言っていいだろう。

これらのことを総合して判断すれば、中部ラインを境に「西と東では異なる技術の系統を持つ木地屋が存在した」ということではないだろうか。

次に東側(東北地方)に限って分布状況を詳しく見てみよう。二分分類で東側は「ヨコ受型」に分けられるが、そのヨコ受型も分布図を見れば秋田県、岩手県のV字型エリアと福島を中心として茨城北部(行政的区分では関東だが地理的には東北に近い)と宮城南部を含むエリアに二分できるのではないかと。これはヨコ受型の中の区分と言うことになるが、ポイントは支柱が直立しているかV字に開いているかである。ほかに「(6) 軸形」でもこの2つのエリアは対立しているが、二分するというほど明確とはいえない。むしろ軸形に関しては福島県が全国の中でほとんど孤立していると言っていい。それほど「ツバ型」の軸は福島独特のものである。孤立しているという点では岩手県浄法寺も「V字支柱」と「バチ型台形」で独特の存在である。これに川連のろくろを加えれば東北には個性的なろくろが多いという印象であるが、このことについては少し先でまた考えたい。

では西側のエリアはどうだろうか。東側とは対照的にこちらではいくつかの項目を比較検討しても特徴の均質化という傾向が見て取れる。つまり「タテ受型」、「4本平行型」、「トンボ型」、「円柱型」という特徴は中部以西の資料ではほぼ共通しているのだ。ただ技法については少し偏りがあり、「(4) 支柱下の釘」・「(5) 支柱の切込み」、そして「(8) 軸頭の木芯」などは新潟、岐阜、愛知など中部地方に濃厚な分布が見られ(4)(5)の特徴は岡山にも及ぶ。これらは、ほぼ同じ資料に重ねて見られる特徴となっている。そうした中で「(7) 軸受に中ツバあり」と「9-(1)後部軸受への黄銅片使用」は新潟、岐阜、愛知に限られておりローカルな技法と言うことが出来るだろう。その発想のオリジナルがどこにあったのかと言うことはこれだけの資料では容易にはわからないが、どちらもより安定した回

転につながる技術であり、そうした要請があったということではないだろうか。

2) 移住の歴史と分布図

これらの分布図を構成するアイコンの一つ一つは、それぞれの歴史的背景を持っているが、中でも木地屋の重要な特性である移住情報を分布図と重ね合わせることで、新たに見えてくることがあるのではないだろうか。

先ず「(1) 支柱」の図で、東側の分布に不自然な点がいくつかあるのに気が付く。福島県と秋田県に一カ所ずつある赤丸(タテ受型)は西側に属する特徴で、東のエリアに割って入っているようだが、実はこの資料を持ち伝えたのはどちらも先祖が信州からの移住であることがわかっている。福島県の赤丸は[番号 20]の資料で、福島県喜多方市の小椋家所蔵で現在福島県立博物館に寄託展示されている。この小椋家の来歴は縁者の手になる一家の移住史『木地師三代』によって詳細に跡付けられており、三十六代当主が信州伊那谷の和合村から会津に移住して来たという。⁽⁴⁾ 秋田県の赤丸は[番号 51]の資料で、秋田県雄勝郡旧皆瀬村木地山の小椋久四郎家所蔵であったが現在は滋賀県東近江市蛭谷の木地屋民芸品展示資料館に展示されている。⁽⁵⁾ この小椋久四郎は木地山こけしで著名な工人であったが、その先祖は信州から会津に移住して、さらに羽後木地山へ入ったという。⁽⁶⁾ この2点が信州起源とすれば上述の二つのタイプ(タテ受型とヨコ受型)のろくろの分布エリアはさらに明確な住み分けをしていることになる。このことは信州起源の木地屋が遠く福島、秋田まで移住しながらみずからの伝統技術を変えることなく持ち続けていたことをも示している。

次に茨城県に4点のヨコ受型アイコンがあるが、これは[番号 40]から[番号 43]までの資料に該当し、所蔵する大蔵家はやはり先祖が信州から移住した木地屋の末裔であった。茨城県大子町の大蔵家の先祖は信州伊那谷八重河内村⁽⁷⁾の出身で、江戸時代末文政年間(1818～)に会津へ移住した木地屋であった。先の喜多方の小椋家と秋田木地山の小椋家は「タテ受型」の技術を持ち運んだ木地屋であったが、この茨城の大蔵家は同じ信州起源でも「ヨコ受型」である。ということは信州南部には「ヨコ受型」の木地屋と「タテ受型」の木地屋がいたことになる。信州は大きな国であったが氏子狩の記録を見る限り木地屋が多くいたのは南信地方、それも伊那谷に集中していた。喜多方の小椋家の出身地和合村と大子町の大蔵家の出身地八重河内村とは天竜川を挟んで向かい合った位置にあり、直線距離で十数キロしか離れていない。このことはどう解釈すればいいのだろうか。

実は信州起源と判明している「ヨコ受型」木地屋の末裔がもう一軒あった。それは山梨県北都留郡小菅村の亀井家で[番号 59]の資料を所蔵していた。⁽⁸⁾ そしてこの資料も「ヨコ受型」であった。第Ⅲ部第3章第2節で述べたことであるがこの亀井家と連れ立って信州から山梨県内を移住しながら最終的には埼玉県秩父の山に入った木地屋たちがいた。これらの事を考え併せれば信州南部伊那谷地方にはかつて「タテ受型」と「ヨコ受型」の両方の木地屋がおり、それぞれの技術を持って北へ移住していった姿が浮かび上がって来る。

次に西側の「タテ受型」エリアにおける移住情報と分布図とを比較してみたい。まず、新

潟県糸魚川市の大所木地屋は第Ⅰ部第1章で詳しく述べたように江戸時代後期寛政4年(1792)に飛騨の国より越後に移住して来たことが自ら記した文書によってわかっている。ただ残念なことに飛騨の国とあるだけで、それ以上の詳しい情報はない。試みに大所木地屋の表示と岐阜県に表示されているアイコンの項目ごとの異同を見てみると、「(1) 支柱」、「(2) 爪数・配置」、「(6) 軸形」の3項目では完全に一致する。ただ「(3) 台形」については大所のみがT字部の非対称という特徴をもち、岐阜県は勿論西側にはおなじ例がなく、東側では福島の喜多方の資料一点である。この特徴の意味は明確に確認できるものはないが、恐らく綱の引手がろくろの台の縁に足を掛けて力を入れるようなことがあって、その足掛けの場がT字の斜め部分と重ならないように、その分だけT字の首を長く確保したということではないだろうか。いずれにしても広く行われた技法ではなく極めてローカルな工夫のレベルだったということであろう。注目されるのは「(7) 軸受に中ツバあり」、「(8) 軸頭の木芯」、「(9) 後部軸受の黄銅片」の3項目で、新潟県大所木地屋と岐阜県下の各資料群との相関が極めて高いことである。とりわけ(9)の黄銅片の使用に関しては大所木地屋の3例に対して、岐阜県大萱で2例、郡上市明方と寒水で1例ずつ、全国で合計7例しかない。これは他に広がりを持たない極めてローカルな工夫を共有しているということにほかならず、糸魚川市大所木地屋の飛騨からの来住を道具の構造と技法の面でも裏付けるものと言っていだろう。

逆に広く行われていたと判断できる技法として「(4) 支柱下の釘」、「(5) 支柱の切込み」がある。分布図を見れば、西側のすべてではないにしても広く行われており、さらに重要な点は西側以外には広まっていないということである。この技法に関しても西の「タテ受型」と東の「ヨコ受型」という二大対立の構図を示していると解釈できる。そしてもう一つ見落としてならないのは、信州起源で東側に割り込んでいるかのような分布を示していた例の[番号 20]の資料が、ここでもやはり西側の特徴を反映していることである。

これらの検討を踏まえて作成した地図が[構造分類の全国分布 (10) 領域表示]で、ここでは氏子狩の訪問領域(=氏子狩文化圏)を重ねて表示した。⁽⁹⁾ 能登半島付近の白地は、既に述べた氏子狩の空白域で加賀、能登、越中である。ここから窺えることは「タテ受型」も「ヨコ受型」も大きな氏子狩文化圏の中に入り、かつ西と東の住み分けの様子が明確にわかること、そして氏子狩文化圏の外側にある東北にはV字型に代表される個性的なろくろの圏域が存在することである。さらに注目したいのは「タテ受型圏」と「ヨコ受型圏」が接するのが本州中部付近であることだ。信州で一点のろくろも確認できなかったことは既に述べたことで、いずれにしても境界域での標本数が極めて少ないことから断定は難しいが、恐らくこのあたりに両タイプのろくろの混在があったのではないかと思われる。勿論集団内の混在ではなく、それぞれのタイプを使う集団の混在と言うことである。それは「タテ受型」の福島県喜多方の小椋家と、「ヨコ受型」の茨城県大子町の大蔵家の事例からしてもありうることだと考える。この両家は既に見たようにともに信州南部伊那谷から出ているのである。

構造分類の全国分布 (10) 領域表

- タテ受型ろくろ (34点)
- 点)
- ▽ ヨコ受型ろくろ (9点)

領域の表示

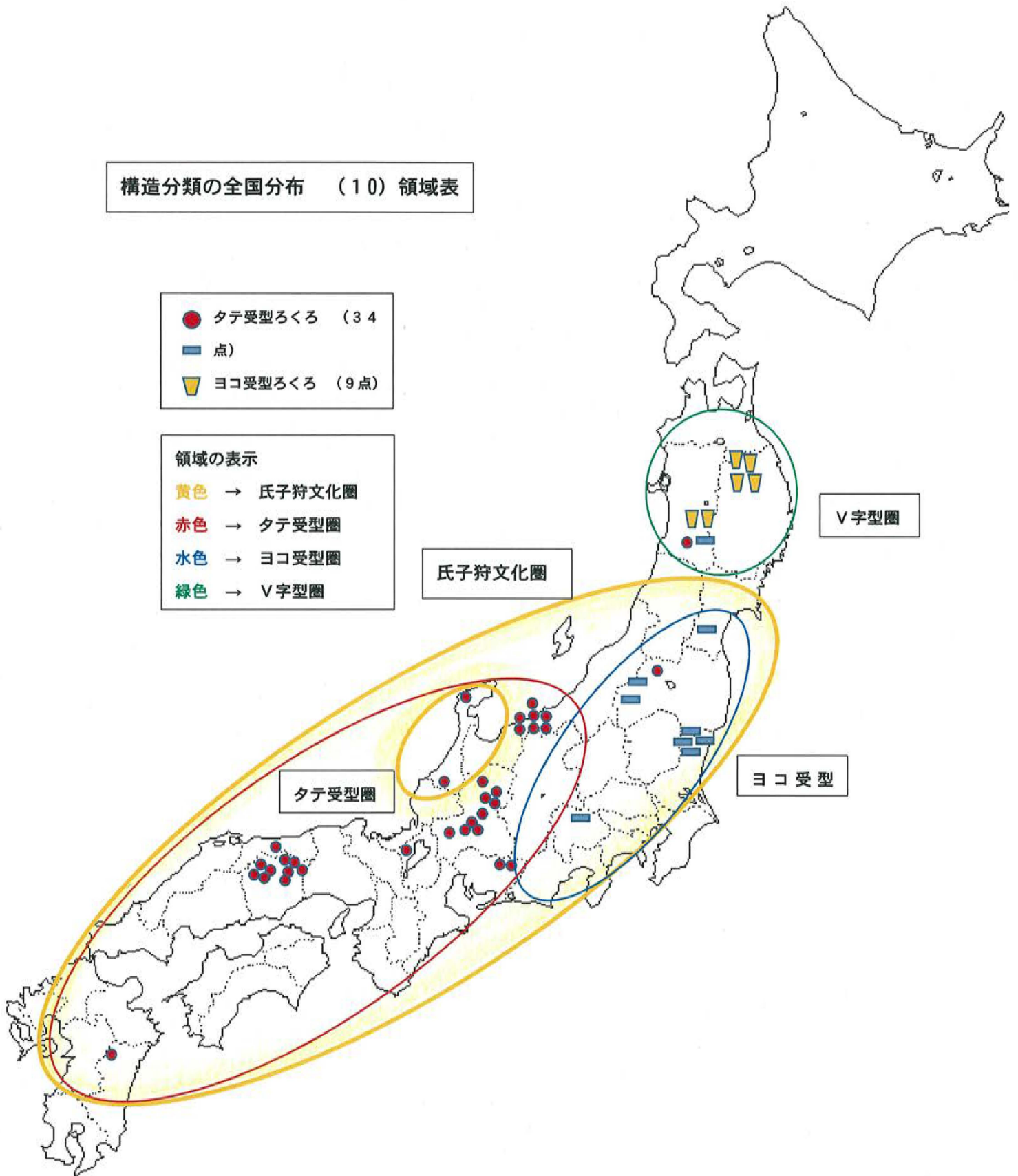
- 黄色 → 氏子狩文化圏
- 赤色 → タテ受型圏
- 水色 → ヨコ受型圏
- 緑色 → V字型圏

氏子狩文化圏

V字型圏

タテ受型圏

ヨコ受型



第IV部－第2章〔注〕

- (1)「トンボ型」の呼称は蛭谷の古い由緒書「牽鑽表始命記」に轆轤を説明して「床ハ秋津島ニ表シテトンボノナリニ造ラセケルカ・・・」とあることにちなんだ。
「牽鑽表始命記」は谷川磐雄 1926『民俗叢話』p102,103 坂本書店刊 に掲載されており、著者によれば宮城県遠刈田新地の木地屋の旧家に所蔵されていたという。橋本鉄男は『こけしのふるさと』所収の「東北地方の木地屋の移住史覚え書」で「牽鑽表始命記」の由来について検討し、氏子狩開始より二世紀も以前の古い文書である可能性を示唆し、何故それが東北の帳外の木地屋に伝わったものか、と首を傾げている。
- (2)滑り軸受の軸と軸受の接触面に軟質の金属を張り付けて円滑な回転を得る方法。摩耗したら交換することではめ合い精度を調節する。
- (3)このラインは自然科学系の用語「糸魚川静岡構造線」にほぼ重なり、たまたまそうなったというだけだが興味深い一致である。
- (4)神田賢一 1991『木地師三代』p10、p12 歴史春秋社 会津若松市
なお和合村は現在合併により下伊那郡阿南町の一部となっている。
- (5)秋田木地山の小椋久四郎所蔵のろくろが蛭谷の資料館に収まった経過はわからないが、橘文策著 1963『木地屋のふるさと』未来社、には著者所蔵として写真入りで掲載していることから恐らく氏が蛭谷へ寄贈したものではないかと推測される。(同書 p112)
- (6)菅野・土橋・西田編 1972『こけしのふるさと』江田絹子「羽後に形成された木地山と川連の木地業」p255 未来社
- (7)八重河内村は現在は飯田市に編入されている。
- (8)亀井家の来歴については「第Ⅲ部第3章第2節の山梨県のろくろ」を参照されたい。
- (9)「氏子狩文化圏」という用語が学術的に定着しているわけではないので若干の説明を加えたい。近世に入って間もなく近江の国の蛭谷にある筒井神社が全国の木地屋を傘下に取り込む支配制度を確立した。これは貴種流離譚と職祖神信仰を巧みに組み合わせた座的統制システムで、橋本鉄男は『ろくろ』においてこう述べている。
(近江の国蛭谷に)「一人の天才的な人物が現れると、先行諸職の事例を模本として、「ろくろ」工人の全国的な座的組織を、巧みに画策することとなったのである。そのプランナーこそ誰だろう、これまでも再三触れたことのある、近江の木地屋根源地、小椋谷の大岩助左衛門重綱である。」『ろくろ』p178
その支配の具体的な形は、各地に散在する木地屋はすべて蛭谷筒井神社の氏子であり、文徳天皇の第一皇子惟喬親王を職祖神とする、として親王の威光による御綸旨(偽文書)を流布させて木地職の正当性を保証するとともに社殿造営等の寄進を集めるものであった。その半世紀後には対抗する君ヶ畑も同様のシステムを築き、両勢力は江戸時代を通じて全国の木地屋を巡回してその支配を競うこととなった。この巡回を氏子狩と称し、その支配域は東北から九州にまで及び、この間に多くの木地屋は小椋姓を名乗るようになったといわれる。この近江の二つの支配機構に組み込まれた木地屋たちの居住するエリアを

本論では便宜的に名付けて「氏子狩文化圏」としたものである。

(本論 第Ⅰ部第2章 参照)

第3章 木地屋の移住と技術の系統

木地屋の伝統的な道具「手引ろくろ」に着目して、その構造の地域差と技法を調べ技術の系統を解明することを目指して国内各地を調査して来た。さらに、そこから木地屋の移住の実態を探ることを本論の目的とした。前章では調査データを地図にプロットして視覚的に分析し、そこから見えて来たことを詳細に述べたが、本章ではそれらを整理して、解明できた事実と未解明の課題として残ったことを簡潔にまとめたい。そして最後に本論全体を見通した大局的な考察と所感を述べることにする。

第1節 構造の地域差と技術の違い

1) 木地屋の道具と技術には系統がある。

極めて素朴で数少ない部材で構成された道具ではあるが、そこには様々な工夫とアイデアが詰め込まれていた。そこから一見同じように見える構造や形態が、地域によって様々な相違点のあることが解かった。そしてその違いは個人的な工夫によるものではなく、ある地域の木地屋は同じ技術と同じ道具を使い、その技術を保持して移動していた実態が明らかになった。

2) 技術の違いによる住み分けの構図がある

手引ろくろの構造には大きく分けて「タテ受型」と「ヨコ受型」の二大類型があり、すべてのろくろはこのどちらかである。そしてこの違いは、国内における分布域においてほぼ東西に二分される形での住み分けの構図が確認された。またこれに付随する小さな加工技術においてもこの東西の住み分けに重なる形で分布することが解かった。つまり「タテ受型」には「タテ受型」独自の構造的工夫と加工の技術が存在し、それは「ヨコ受型」においても同様であり、一部を除いて基本的には共有されることがなかった。

3) 技術の系統は移住を繰り返しても変わらない

構造（技術）の違いによって分布域が明確に分かれているが、例えば西の構造（技術）を持つ木地屋が東のエリアに移住しても構造（技術）は変わらない。つまり、そこには技術の系統があるということである。こうした場合には、分布図の中に孤立したアイコンが記されることとなる。

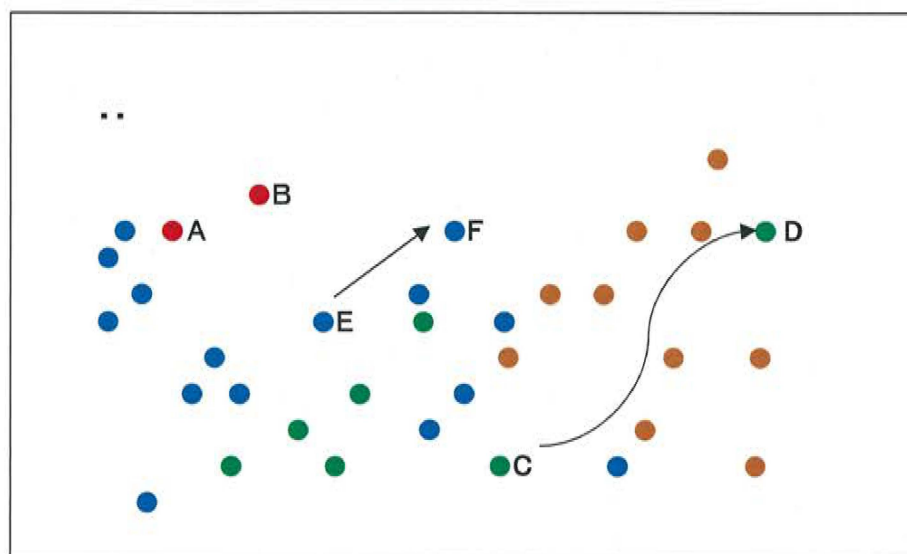
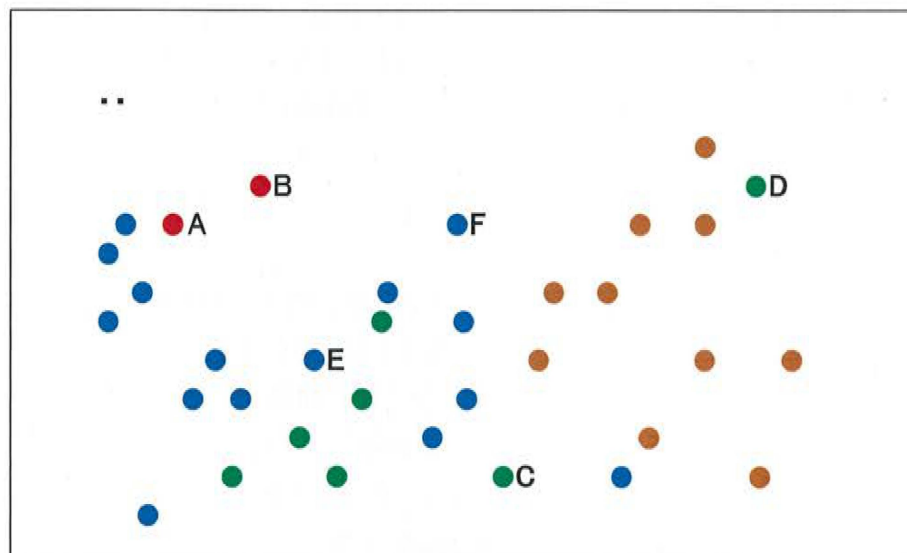
以上の3点が技術の系統と移住の系譜について本研究で明らかになった主要ポイントであるが、ここでそれらを補足しながら個別事例を挙げたい。

2) の技術の住み分けについて補足すれば「タテ受型」と「ヨコ受型」で付帯する技法が異なることは基本的には言えることだが、その二大類型の境界領域では技法が影響し合っていたのではないかと、ということが分布図から窺うことが出来る。例えば[分布図4]の支柱

下の釘を使う技法や、[分布図5]の支柱に切込みを入れて鉋を固定する技法では大多数は「タテ受型」の領域に見られるが、山梨や茨城に分布する一部の「ヨコ受型」資料にもその特徴が刻まれていた。しかしその分布は、「タテ受型」との接点（恐らく信州伊那地方）に近いところにだけ見られ、遠く離れた地域には影響を及ぼしていないことが見て取れる。構造の系統と技法の系統が境界付近でクロスしているという点で注目される。

次は、第Ⅲ部第2章で論じた北陸地方のろくろについてである。その中で石川県山中町真砂のろくろと同県能登町合鹿のろくろについて構造が他にない特異なものであり、その特異な構造を全国でこの2点のろくろのみが共有していることの意味を問題にした。ただそこでの結論は、旧柳田村による「合鹿木地師の来歴は不明であり、近縁の木地屋とのつながりはない」という調査結果に疑問を述べるにとどまった。ここで再検討するにあたって模式図を作成し、これによって考えてみたい。

[技術の系統から移住の系譜を探る]



この2つの図は分布図を模式化したもので現実のものではないが、同じ色のドットは、技術の系統を同じくする資料の所在を示す。Dは何代か前にC地点から移住して来たという伝承を持つ木地屋の資料であった。この場合Dの周辺には系統を異にする（茶色）木地屋が多く存在するが、技術の系統からしてその伝承の真なることは明らかである。

またFは江戸時代後期にEより移住して来たという文書を伝え持っていた。このことは技術の系統が移住の系譜を裏付けるものと解される。次にAとBの関係であるが、これを柳田村合鹿のろくろBと山中町真砂のろくろAとした場合、両者の間にはその歴史的関係を示唆する文書も伝承もない。よって現状ではBは来歴不明とされている。

しかし、本当に関係がなかったのであろうか、図中の資料が示す技術系統の中で（赤）の技術系統を示しているのはAとBだけである。

既に第Ⅲ部第2章第2節で詳述したように合鹿のろくろと真砂のろくろは支柱に独特の工夫があつて、向かい合った突き合わせの面に段差が刻まれ、さらに支柱上面に特殊な継ぎ手の技法が使われ2本の支柱が接合されていた。真砂の資料は非常に古く細部は摩滅していたがこの技法の跡は確認できた。このような工夫は国内各地の資料を見ても例がないものである。このことから考えても両者が歴史的な関係を持たなかったという方がむしろ不自然ではないだろうか。文書がなかったとしても非文字資料（民具）を読み解き歴史を明らかにすることが出来るのではないだろうか。ただ非文字資料は関係性を解き明かすことは出来ても時間の後先を読み解くのは困難である。この場合は、集落の歴史や木地屋の移住のスタイル等を勘案して真砂が先行して、そこから能登へ移ったと見るのが妥当だろう。

以上を整理すれば次のようになる。

＜ 非文字資料による歴史の解明 ・ ・ ・ ・ 下の（3）のケース ＞

- (1) 〔CとDは構造も技法も同じ〕で、なおかつ 〔CからDへの移住の伝承がある〕
 - ⇒ 技術の系統によって移住の系譜を明らかにできる
- (2) 〔EとFは構造も技法も同じ〕で、なおかつ 〔EからFへの移住の歴史を記した文書がある〕
 - ⇒ 技術の系統が移住の歴史を裏付けたといえる。
- (3) 〔AとBは構造も技法も同じ〕 であるが 〔AからBへの移住を示す文書も伝承もない〕
 - ⇒ （同じ技術の系統は両者の歴史的関係の存在を示す。）

第2節 技術の移動と伝播

手引ろくろの構造の地域差をテーマとして調査を行ってきて、間違いなく地域差が存在することは確認できた。そしてそれが個別的な工夫の跡ではなく系統的なものであること

も解明できた。では、その系統の違いは如何にして生まれ、その地域的分布の明確な住み分けはなぜ生まれたのか。そもそも木地屋の技術はどのように伝えられたのか。こうした本質的な問題について考えてみたい。

「技術の伝播」と言うとき、その前提として「技術は伝わるもの」或いは「伝えられるもの」という前提がある。ある地域で生まれた先進的技術は、やがて周辺地域に伝わり、場合によっては改良が加えられながらさらに遠くに伝わっていくだろう。恐らく業者による流通・販売ということがない時代の民具の伝播はこうした形であったと思われる。しかし木地屋の技術に関して言えば少し様子が違うのは、木地屋の技術は「伝えられる」ことはなく、常に「人とともに移動する技術」であったということだ。ろくろに製作マニュアルは存在せず、マニュアルを必要とするのは新たな技術として広める時だと先述したが、木地屋にとってはむしろ技術は独占すべきものであり、人に伝えるものではなかった。或いは結果として独占的にならざるを得なかったと言うべきかもしれない。特殊な刃物による作業と深山の移住生活は里人の容易に入れる世界でなかったことは間違いない。そうしたことから木地屋の技術は長い間属人的性格を持ち、人とともに移動する技術であり、技術だけが独立して伝わることはなかった。そのことが技術の系統を形作り、移住の系譜と重なっていったのではないだろうか。

しかし、その系統の源流がどこにあったのかということについては、必ずしも明確になっているわけではない。「タテ受型」と「ヨコ受型」の違いがなぜ生まれ、その源流がどこにあるのか、それは一つの大きな問題であった。我が国で最古のろくろの図像が「ヨコ受型」であること、さらに描かれたタイプでも「ヨコ受型」の方が圧倒的に多いことは既に第Ⅱ部第1章の第3節で述べた。しかし、現実の資料として確認されたものでは「タテ受型」が34点に対して「ヨコ受型」がわずか9点、「V字型」を加えたとしても15点と「タテ受型」の半数にも満たないのである[分布図1]。このことは一体何を物語っているのか、残念ながら真相は不明と言わざるをえない。ただ分布地図の「(1) 支柱」(二大類型の分布)を始め(2)や(4)(5)の技法に関する分布状況を見る限り「タテ受型」の源が近畿地方にあることはかなり高い蓋然性で主張しうるのではないだろうか。糸口が見つからないのは「ヨコ受型」である。

第6章の分布図の解釈では「西と東で技術系統を異にする木地屋が存在した」と述べたが、「ヨコ受型」の源がどこにあるかとなると壁にぶつかってしまうのである。⁽¹⁾現状で言えることは、信州の南、伊那谷地方には「タテ受型」と「ヨコ受型」の混在があり、やがて北に移住する時にそれぞれの技術を持って北上し、近くは山梨・秩父へ、遠くは会津から羽後へと「タテ受型」・「ヨコ受型」技術を移動させた、ということである。さらに言えばその移住者の中では「ヨコ受型」の木地屋の方が多数派で、結果として「(1) 支柱」のような分布状況になったのではないだろうか。⁽²⁾では何故南信地方に技術の混在があったのか、それは不明であり、何故そこに「ヨコ受型」の技術が残らなかったのかも同様である。恐らく「ヨコ受型」の技術は残っていたのだらうと推測する。ただそれを確認する資料が残っていないの

である。先にも述べたが信州で一つもろくろを確認できなかったのは、それ自体一つの謎であり、⁽³⁾ 解明すべき課題である。これは不思議なことに会津についても言えることである。ただ会津の場合はなぜか軸だけはいくつも残っており、これもまた一つの謎である。

さらに南西諸島への調査で明らかになったことは、木地屋の社会と歴史的に深い関わりのある氏子狩制度と技術の関係であった。

木地屋の社会は江戸初期から、近江の国永源寺の山中にある二系統の寺社（蛭谷系、君ヶ畑系）のいずれかの支配統制を受ける独特の制度の下に置かれていた。これを氏子狩といい、数年から10年ほどの間隔で寺社の役人が各地の木地屋を巡回し本山の維持管理のための寄進や奉加金を徴収し、代わりに御綸旨や由緒書を始め往来手形など様々な特権や便益を供与するものであった。明治初頭まで続いたこの廻国の記録「氏子駈帳」にはその時々木地屋の姿が克明に記され、木地屋研究の基本文献として貴重なものとなっている。本論でも随所でこの記録を援用し歴史解明の手掛かりとした。しかし、何といてもその時代を生きた木地屋がこの制度から受けた影響力は大きく、氏子狩の支配下にあった木地屋にとっては自らのアイデンティティーを自覚する精神的な支柱であったと言っても過言ではない。それは職祖神を惟喬親王としたことによるところが大きく、彼らは親王様の縁者の末裔であり（所によっては直接の末裔だと信じていた向きもあった）、親王様が発明された道具（ろくろ）を使って日々仕事をしていたのである。これはある種の共同幻想のようなもので、各地の深山に点在しながら、彼らは職祖惟喬親王を通じて独特の連帯感で結ばれていたといってもよい。これをいま仮に「氏子狩文化圏」と呼べば、長い歴史を通じて一度もこの文化圏に組み込まれなかった地域（＝木地屋）も存在した。南では鹿児島以南の南西諸島、北ではおそらく宮城・秋田以北であったと思われる。そして特異な地点として北陸の加賀、能登、越中が挙げられる。こうした地域での技術のあり方として共通するのは、伝統の木地屋社会における技術の属人的性格が薄れ、技術そのものが独自に流通していたということである。そこでは自ら技術を修得したものが木地屋となるのである。そして本論のテーマであるろくろの構造についても、この文化圏の中と外では様相を異にしていた。圏域の中では比較的技術の均質性が窺えるのに対して、圏外では改良・改変へのエネルギーが解放されたかのように様々な構造的工夫が行われ、いわば個性的なろくろが生み出されていたのである。以上がろくろの構造分析の結果を地図上にプロットし、そこに表れた特徴的な分布から読み解いた木地屋の移住と技術の関係である。

第Ⅳ部－第3章〔注〕

- (1) 蛭谷と並ぶもう一つの木地屋根源地、君ヶ畑には古いヨコ受型ろくろがあり、村の入口の小さな展示施設に飾ってある。ただ残念なことに採取地がはっきりしない。村人の話では30年ほど前に三重県の木地屋から寄贈されたい、とのこと。はっきりした情報がないことから調査データとしては使っていない。
- (2) 「分布図（10）領域表示」を参照

- (3) 長野県は南北に広いエリアを持つ県だが、氏子駈帳が示す木地屋の足跡の多くは南部に集中している。この地域においても手引ろくろの残存は確認されておらず、ここで現在も観光客を対象に電動ろくろで作業する木地屋に、その訳を尋ねたことがある。彼の返答は、手引ろくろは山の上の古い家にあったかもしれないが、現在は国道沿いに移転しており、古い道具はかつての家と共に無くなったということだった。恐らくこれは一つのケースかもしれないが、古い民具が残る条件の一つは江戸時代からの古民家に住み続けている場合であるということが出来るかもしれない。新潟県糸魚川市の大所木地屋に多くのろくろを始め道具一式が残っていたのはその好例だろう。信州にろくろが残らなかったもう一つの理由としては、近世の比較的早い時期に入山した木地屋の多くは信州の山からさらに別の国の山へ渡って行ったことが考えられる。つまり信州の山は多くの木地屋にとって通過点であったということである。事実、信州伊那谷から山梨、秩父を始め遠く会津、羽後まで移動した木地屋が多くあり、それぞれろくろが確認されている。勿論これだけですべてが説明できるわけではなく、今後もさらに検討が必要である。

おわりに

木地屋の伝統的な道具「ろくろ」に着目して各地に残る資料を調査してきた。当初は、特に根拠があるわけではないが少なくとも 100 点ほどの「手引ろくろ」が確認できるのではないかと予想していた。しかし結果として、岩手県から沖縄まで調査して 66 点であった。これは軸のみの資料も含めてであるから完全な形のろくろはさらに少ない。使われなくなってから久しい民具を調査することの困難を痛感した。調査しながら考えたことは、少なくとも現存するろくろだけは、しっかりと保存され今後の研究に活用されることへの期待と願いであった。

非文字資料としての「ろくろ」を、古文書を読むように解説し、できる限りの情報を引き出そうと努めてきた、その成果が本論の中核を成している。しかし、ろくろに関して聞き取り調査が実質的に不可能となった現在、熟覧調査から引き出せる情報にも限度があり、なお不明の点は多い。

木地屋研究の方法として冒頭で「民俗学的アプローチ」、「歴史学的アプローチ」、「民具学的アプローチ」の三分野を挙げたが、ろくろに関して言えば「考古学的アプローチ」も挙げべきであった。結局ろくろをテーマに研究する以上、その起源について追究しないわけにはいかず、時代をたどれば考古学の分野にまで踏み込まざるを得ない。また、半ば暗黙の定説となっている大陸起源説についても実際のところは霞の中である。

本論提出の直前に機会があってネパールの木地屋調査に出かけ、幸運にも二箇所を手引ろくろを実際に使う木地屋（ツナーロ）に出会うことができた。その素朴なろくろは構造も技法も日本のものとはかなり異なり大変興味深いものであった。そこでまた、アジアの中におけるろくろ、という新たな課題に直面した。

結局のところ、ろくろの構造についても、その歴史的・空間的広がりについても、さらに木地屋の移住の実態についても、まだまだ解明できたとは言い難く不明な点が多い。国内だけ見てもまだ調査に出かけていない県が若干ある。欲を言えばきりが無いが、今後も自らに合った手法でどこまでこうした謎に迫ることが出来るか、もう少しこのテーマを追ってみたいと思う。最後に、本論を仕上げるために多くの方々のお世話になったことを付け加え感謝の意を表したい。

【参考文献リスト】

- 会津藩地誌局編 1894『新編会津風土記 六』巻48～巻53 萬翠堂 若松市
- 朝岡康二 1998『野鍛冶』法政大学出版局
- 朝比奈奎一・三田純義 2006『機械の本』日刊工業新聞社
- 網野善彦 1992『職人歌合』岩波書店
- 荒川浩和 1993「合鹿椀系譜考」『合鹿椀』柳田村
- R.P.ホンメル著 国分直一訳 1992『中国手工業誌』法政大学出版局
- 安藤慶一郎・村松信三郎編 1981『民俗資料選集9 山村の生活と用具』国土地理協会
- 石垣市史編集委員会 1994『石垣市史各論編 民俗上』石垣市
- 石垣市 1999『八重山島年来記』(石垣市史叢書13)
- 石川県鳳至郡役所 1923.3『石川県鳳至郡誌』石川県鳳至郡役所
- 石川県埋蔵文化財センター2005『石川県埋蔵文化財情報 第14号』
- 石澤兵吾 1889『琉球漆器考』東陽堂
- 糸魚川市木地屋会編 1992『木地屋会報第1集 信越国境の木地屋たち』糸魚川市木地屋会
- 糸魚川市木地屋会編 2000『木地屋会報第2集 山に生きた日々』糸魚川市木地屋会
- 糸魚川市木地屋会編 2007『糸魚川木地屋の民具』糸魚川市木地屋会
- 岩手県 1961『岩手県史第三巻中世編下』
- 岩手県教育委員会 1978『漆掻き塗師の生活習俗』岩手県教育委員会
- 碓井哲也 2012『木地師・熊・狼 高千穂郷・山の民の生活誌』鉾脈社 宮崎
- 永源寺町史編纂委員会 2001『永源寺町史(木地師編) 上巻 蛭谷氏子駈帳』永源寺町
- 同上 2001『永源寺町史(木地師編) 下巻 君ヶ畑氏子駈帳』永源寺町
- 江沼地方史研究会編 1999『えぬのくに』第44号 江沼地方史研究会
- 太田豊年 1801『茂山日記』森文庫本(享和元年写本) 徳島県立図書館蔵
- 小椋裕樹 2016「ろくろの名称について」『民具マンスリー』49巻4号 p13 神奈川大学日本常民文化研究所
- 岡山県立博物館編 1995『研究報告16』田村啓介「岡山県下の木地師関係資料」
- 岡山県立博物館 2013『japan-漆の世界-』
- 沖縄県伝統工芸指導所 1982『琉球漆器製造技術』=切削技術(挽物)= No.4
- 奥会津地方歴史民俗資料館編 2001『木地語り-会津田島のとびの足跡』福島県田島町教育委員会
- 門田和雄・早稻田治慶 2012『機械用語事典-機械要素編』日刊工業新聞社
- 賈思勰撰 西山・熊代訳 1957『校訂・訳注 齊民要術 上』東京大学出版会
- 金沢市文化財紀要 40『金沢市西念・南新保遺跡』金沢市教育委員会 1983
- 金子裕之 1991「百万塔」『法隆寺の至宝』第5巻 小学館
- 上斎原村 1994『上斎原村史 民俗編』
- 上斎原村 2011『上斎原村史 地区誌編』
- 神田賢一 1991『会津木地師三代』歴史春秋社

- 菅野新一 1961『山村に生きる人々』未来社
- 菅野・土橋・西田編 1972『こけしのふるさと』未来社
- 菊池俊彦編 1988『図譜 江戸時代の技術』恒和出版
- 喜多源内 1922『西祖谷山村史』
- 木村裕樹 2010「活用される職祖伝承」
- 清見村誌編集委員会 1976『清見村誌 下巻』岐阜県大野郡清見村
- 清見村教育委員会 1986『きよみ風土記』岐阜県大野郡清見村
- 久万高原郷土会編 2011『久万山物語』愛媛県久万高原町教育委員会
- 工楽善通『古代史復元 5－弥生人の造形』（木製高杯の復元）p98～99 講談社 1989
- 鍬形蕙斎著 大島・小島・大久保編 2017『近世職人尽絵詞－江戸の職人と風俗を読み解く－』勉誠出版
- 小菅村 2009『小菅村文化再生研究室調査報告書－小菅村の木地屋』
- 小林行雄 1962『古代の技術』塙書房
- 小林行雄・末永雅雄・福岡謙二郎『大和唐古弥生式遺跡の研究』1943
- （財）国土地理協会 1981『民俗資料選集 9 山村の生活と用具－愛知県・津具村－』
- 五ヶ瀬町 1981『五ヶ瀬町史』第一法規出版 福岡市
- 国立歴史民俗博物館編 2017『URUSHI ふしぎ物語－人と漆の 12000 年史－』
- 斎藤晃吉監修 1975『柳田村史』柳田村
- 蔵王町『蔵王町文化財調査報告書第 14 集 十郎田遺跡 2』蔵王町教育委員会 2011
- 佐藤源八 1970『南部二戸郡浅澤郷土史料』（アチックミュージアム集報 第 37）
- 佐藤友晴 1961『蔵王東麓の木地業とこけし』未来社
- 設楽町 1999『設楽町誌 近世文書編Ⅱ』愛知県北設楽郡設楽町
- 同上 2005『設楽町誌 通史編』愛知県北設楽郡設楽町
- 澁澤敬三 1992『日本魚名の研究』澁澤敬三著作集第二巻 平凡社
- 首里城公園管理部編集 2012『首里城に魂を！』（財）海洋博覧会記念公園管理財団
- J. ニーダム著 中岡哲郎ほか訳 1974『中國の科學と文明』思索社
- 杉本 寿 1972『木地師支配制度の研究』（蛭谷原簿 32 簿冊）ミネルバ書房
- 杉本寿 1976『木地師制度の研究』第 2 巻 清文堂出版 大阪
- 須藤 護 1982『暮らしの中の木器』ぎょうせい
- 大子町編 1984『大子町史 資料編 上巻』大子町
- 高橋隆博 1994「古代の漆芸技法－券胎」『日本美術工芸』6 月号所収 大阪 日本美術工芸社
- 滝沢洋之 2001『会津の木地師』歴史春秋社
- 田島町教育委員会 1980『奥会津の山村生産用具』〔1〕
- 田島町教育委員会 1981『奥会津の山村生産用具』〔2〕
- 田島町教育委員会 1982『奥会津の山村生産用具』〔3〕
- 橘 文策 1963『木地屋のふるさと』未来社
- 只見町教育委員会 1991『図説会津只見の民具』

只見町史編さん委員会 1993『只見町史 第3巻 民俗編』福島県只見町
 田中庄一 1962『近世二戸漆の研究 木地碗』二戸文化史研究会
 田中長嶺 1900『小野宮御偉績考』近藤活版所
 田畑久夫 2002『木地屋集落 系譜と変遷』古今書院
 鳥海義之助『図解 木工の継手と仕口 (増補版)』オーム社 2016年1月
 津具村 1998『津具村誌 資料編Ⅱ』愛知県北設楽郡津具村
 同上 2000『津具村誌』愛知県北設楽郡津具村
 津具村教育委員会 1964『津具の山樵用具および加工品』
 寺島良安 1986『和漢三才図会』島田勇雄・竹島淳夫・樋口元巳訳 東洋文庫 476 平凡社
 徳島県郷土文化会館民俗文化財集編集委員会編 1983『民俗文化財集阿波の木地師』徳島県郷土文化会館
 徳島県三好郡行政組合 1996『阿波国三好郡村誌・祖谷山舊記』復刻版
 富村史編纂委員会 1989『富村史』岡山県苫田郡富村
 中川重年 1985「木地屋の世界—その移動と森林の変化」『ブナ帯文化』所収 思索社
 中村源一 1981『ろくろと挽き物技法』槇書店
 成田寿一郎 1990『日本木工技術史の研究』法政大学出版局
 成田寿一郎 1996『木工諸職双書 木工挽き物』理工学社
 成田寿一郎 1984『木の匠—木工の技術史』鹿島出版会
 西島明正 2006『山中町史』(完結編) 加賀市
 丹生川村史編集委員会 1998『丹生川村史 民俗編』岐阜県大野郡丹生川村
 橋本鉄男 1979『ろくろ』ものと人間の文化史 31 法政大学出版局
 飛騨市教育委員会 2009『神岡町史 通史編Ⅰ』岐阜県飛騨市教育委員会
 橋本鉄男 1970『木地屋の移住史・第一冊』(君ヶ畑原簿 51 簿冊) 民俗文化研究会
 橋本鉄男編 1974『朽木村志』朽木村教育委員会
 原田正彰 1977『柳田村の集落誌』柳田村役場
 東祖谷山村誌編集委員会編 1978『東祖谷山村誌』東祖谷山村
 兵庫県立考古博物館『木のうつわ六千年の技』p40 兵庫県立考古博物館 2011
 古川町教育委員会 1992『特別展 木地師の世界』
 文化庁文化財保護部編 1974『民俗資料選集 2 木地師の習俗』国土地理協会
 牧野信之助 1938「所謂木地屋根源地の史料」『土地及び聚落史上の諸問題』河出書房
 松山義雄 1985『深山秘録—伊那谷の木地師伝承』法政大学出版局
 宮本哲郎『「日常生活の道具」 西念・南新保遺跡出土木製品』(『月刊文化財』No.218) 東京 1981
 村松貞次郎 1973『大工道具の歴史』岩波新書
 山国町教育委員会編 2005『民俗文化財集 山国町の木地師』p12 山国町教育委員会
 山中漆器漆工史編集委員会 1974『山中漆工史』p51 山中漆器商工業協同組合
 柳田国男 1957『史料としての伝説』村山書店
 湯原町編 1953『湯原町史 前編』

吉田光邦 1974『機械』法政大学出版局

吉川金次 1984『斧・鑿・鉋』法政大学出版局

四柳嘉章 2009.12『漆の文化史』 岩波新書

琉球漆器事業協同組合編 1991『琉球漆器 歴史と技術・技法』

<デジタルデータ>

国立国会図書館デジタルコレクション『續知不足齋叢書 第2集第14冊』(高氏刊)

愛媛県 1984『愛媛県史 地誌Ⅱ』(愛媛県生涯学習センター データベース)

面河村村誌編集委員会 1980『面河村誌』面河村 (愛媛県生涯学習センター データベース)

久万町誌編集委員会編 1989『久万町誌』久万町 (愛媛県生涯学習センター データベース)

国立国会図書館デジタルコレクション 谷川磐雄 1926『民俗叢話』坂本書店刊